

ね、何事も明すけに言ふて退ける事が出来ぬからとて、お倉はつくづくまゝならぬを痛みぬ。つとめある身なれば正雄は日毎に訪ふ事もならず、三日おき、二日おきの夜な車を柳のもとに乗りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辭す時あり、稚兒のやうになりて正雄の膝を枕にして寐る時あり、誰が給仕にても箸をば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱られて同じ膳の上に粥の湯をすゝる事もあり、癒つて呉れるか。癒りまする。今日癒つて呉れ。今日癒りまする、癒つて兄様のお袴を仕立て上げまする、お召も縫ふて上げまする、それは厚し早く癒つて縫ふて呉れと言へば、左様しましたらば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、む、逢はして遣る、呼んでも来る、はやく癒つて御両親に安心させて呉れ、宜いかと言へば、あゝ明日は癒りますると憚りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ来るに、容躰ごとくく變りて何を言へどもいや／＼とて人の顔をば見るを厭ひ、父母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば廣き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしばらせぬ。

俄かに暑氣つよくなりし八月の中旬より狂亂いたく暮りて人をも物をも見分ちがたく、泣く聲は晝夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相さまざま此世の人とも覺えずなりぬ、看護の人も勞れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔て、姿を見るばかり、霧の立おほふて朧氣なれども明日は明日はと言ひて又そのほかに物いはず。

いつぞは正氣に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折のありもやすると覺束なくも一日二日と待たれぬ、空蟬はからを見つゝもなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞こえずもがな。

こ の 子

口に出して私が我子が可愛いといふ事を申したら、無皆様は大笑ひを遊ばしましやう、それは何方だからとて我子の憎いはありませんぬもの、取たて、何も斯う自分ばかり

り美事な寶を持つて居るやうに誇り顔に申すことの可笑しいをお笑ひに成りましやう、だから私は口に出して其様な仰山らしい事は言ひませぬけれど、心のうちではほんに可愛いの憎いものではありませぬ、掌を合せて拜まぬばかり辱ないと思ふて居ります。

私の此子は言は、私の爲の守り神で、此様な可愛い笑顔をして、無心な遊をして居ますけれど、此無心の笑顔が私に教へて呉れました事の大層なは、残りなく口には言ひ盡くされませぬ、學校で讀みました書物、教師から言ひ聞かして呉れました種々の事は、それはたしかに私の身の爲にもなり、事ある毎に思ひ出してはあ、で有つた、斯うで有つたと一々顧みられますけれど、此子の笑顔のやうに直接に、眼前、かけ出す足を止めたり、狂ふ心を静めたはありませぬ、此子が何の氣も無く小豆枕をして、両手を肩のそばへ投出して寢入つて居る時の其顔といふものは、大學者さまが頭の上から大聲で異見をして下さるとは違ふて、心から底から湧き出すほどの涙がこぼれて、いかに強情我まん私でも、子供なんぞ些とも可愛くはありませんと威張つた事は言はれませんかつた。

去年の暮押つまつてから産聲をあげて、はじめて此赤い顔を見せて呉れました時、私はまだ其時分宇宙に迷ふやうな心持で居たものですから、今思ふと情ないのではありませぬけれど、あ、何故丈夫で生れて呉れたらう、お前さへ亡つて呉れたなら私は肥立次第實家へ歸つて仕舞ふのに、こんな旦那様のお傍何かに一時も居やしないのに、何故まあ丈夫で生れて呉れたらう、厭だ、厭だ、何うしても此縁にながれて、これからの永世を光りも無い中に暮すのかしら、厭な事の、情ない身と此やうな事を思ふて、人はお目出たうと言ふて呉れても私は少しも嬉しいとは思はず、只々自分の身の次第に詰らなくなるをばかり悲しい事に思ひました。

それですが彼の時分の私の地位に他の人を置いて御覽じろ、それは何んな諦めのよい悟つたお方にしたところが、是非此世の中は詰らない面白くないもので、随分とも酷い、つれない、天道様は是非かなどいふ事が、私の生意氣の心からばかりでは有りますまい、必ず、屹度、何方のお口からも洩れずには居りますまい、私は自分に少しも悪い事は無い、間違つた事はして居ないと極めて居りましたから、すべての衝突を旦那さまのお心一つから起る事として仕舞つて、遮二無二旦那さまを恨みました、

又斯ういふ旦那さまを態と見たて、私の一生を苦しませて下さるよと思ふと實家の親、まあ親です、それは恩のある伯父様ですけれども其人の事も恨めしいと思ひまするし、第一犯した罪も無い私、人の言ふなりに温順しう嫁入つて来た私を、自然と此様な運に拵へて置いて、盲目を谷へ擠すやうな事を遊ばす、神様といふのですか何ですか、其方が實に恨めしい、だから此世は厭なもの斯う極めました。

負けない氣といふはいふ事で、あれで無くてはむづかしい事を遣りのける譯には行かぬ、ぐにやくと柔かい根性ばかりでは何時も人が海鼠のやうだと斯う仰しやる方もありますけれど、それも時と場合によつたもので、のべつに勝氣を振廻しても成りますまい、其うちにも女の勝氣、中へつゝんで諸事を心得て居たら宜いかも知れませぬけれど、私のやうな表むきの負けるざらひは見る人の目からは淺ましくもありましやう、つよらぬ妻を持つたものだといふ感は良人の方に却つて多くあつたので御座りましやう、で御座いますけれど私に其時自分を省る考へは出ませぬゆゑ、良人のこゝろを察する事は出来ませぬ、厭な顔を遊ばせば、それが直ぐ氣に障りまするし、小言の一つも言はれましやうなら火のやうに成つて腹だしく、言葉返しはつひしか

爲せんかつたけれど、物を言はず物を喰へず、随分婢女どもには八つ當りもして、一日床を敷いて臥つて居た事も一度や二度では御座りませぬ、私は泣虫で御座いますから、その強情の割合に臍甲斐ないほど掻卷の襟に喰つて泣きました、唯々口惜し涙なので、勝氣のさせる理由も無い口惜し涙なのでした。

嫁入つたは三年の前、其當座は極仲もよう御座いましたし雙方に苦情は無かつたので御座いますけれど、馴れるといふは好い事の悪い事で、お互ひ我々の生地が出て参ります、諸慾が沸くほど出て参りますから、それは不足だらけで、それに私が生意氣ですものだからつひ々心安だで旦那さまが外で遊ばす事にまで口を出して、何うも貴郎は私にかくし立を遊ばして、外の事といふと少しも聞かせては下さらぬ、それはお隔て心だと言つて恨みますると、何そんな水臭い事はしない、何も彼も聞かせるではないかと仰しやつて相手にせず笑つていらつしやるのです、あり々隠してお出遊ばすのは見えすいて居りますし、さあ私の心はたまりません、一つを疑ひ出すと十も二十も疑はしくなつて、朝夕旦那さま又あんな嘘と思ふやうになり、何だか其處が可笑しくこぐらかりまして、何うしても上手に思ひとく事が出来ませんか

つた、今おもふて見ると成るほど隠したても遊ばしましたらう、何と言つても女ですもの、口の早いに依つてお務め向きの事などは話してお聞かせ下さるわけには行きますまい、現に今でも隠していらつしやる事は夥しくあります、それは承知で、たしかに左様と知つて居りまするけれど今は少しも恨む事をいたしません、なるほど此話を聞かして下さらぬが旦那様の価値で、あの位私が泣いても恨んでも取合つて下さらなかつたは旦那様のおえらいので、あの時代のやうな運葉な私に萬一お役所の事でも聞かして下さらうなら、どのやうの詰らぬ事を仕出さるか、それでなくてさへ随分出入の者の手などを假りて、私の手もとまで怪しい遣ひ物などをよこして、斯ういふ事情で酷く難儀をして居ります、此裁判の判決次第で生死の分け目に成りますなど、言つて、原告だの被告だのといふ人が頼み込んで来たも多くあつたけれど、それを私が一切受附けなかつたは、山口昇といふ裁判官の妻として、公明正大に断つたのでは無く、家内の揉て居るに其やうの事を言ひ出す餘地もなく、言つて面白くない御挨拶を聞くより黙つて居た方がよつほど洒落て居るといふ位な考へで、幸ひに賄賂の汚れは受けないで済んだけれど、隔ては次第に重なるばかり、雲霧がだん／＼と深くなつて、お

互ひ心の分らないものに成りました、今思へばそれは私から仕向けたので、私の仕様が悪かつたに相違無く旦那様のお心を何時とは無しにぐれさせましたは私が心の行き方が違つた故と今ではつく／＼後悔の涙がこぼれまする。

絶頂に仲の悪かつた時は、二人ともに背き背きで、外へいらつしやるに何處へと問ふた事も無ければ、行先をいひ置かれる事も無い、お留守に他處からお使ひが来れば、どんな大至急要用でも封といふを切つた事は無く、妻とは言へ木偶がお留守居して居るやうに受取一通で追拂つて、それは冷淡に投げて置いたものなれば、旦那さまの御立腹は言はでもの事、はじめは小言を仰しやつたり、異見を遊ばしたり、論したり、慰めたり遊ばしたのなれど、いかにも私の強情の根が深く、隠したてを遊ばすといふを楯に取つて、ちつとやそつとの優しい言葉ぐらゐでは動きさうにもなく執拗ぬきしほとに、旦那さま呆れて手をば引き給ふ、まだ家内に言葉あらそひの有るうちはよきなれども、物言はず睨め合ふやうに成りては、屋根あり、天井あり、壁のあると言ふばかり、野宿の露の哀れにまさつて、それは冷たい情ない、こぼれる涙の氷らぬが不思議で御座ります。

思へば人は自分勝手なもので、よい時には何事の思ひ出しも有りませぬけれど、苦しいの、厭のと言ふ時に限つて、以前あつた事か、これから迎へる事についてか、大層よさうな、立派さうな、結構らしい、事ばかり思ひます、左様いふ事を思ふにつけて現在の有さまが厭で厭で、何うかして此中をのがれたい、此絆を断ちたい、此處さへ離れて行つたならば何んな美しく良い處へ出られるかと、斯ういふ事を是非とも考へます、で御座いますから、私も矢張その通りの夢にうかれて、此様な不運で畢るべきが天縁では無い、此家へ嫁入りせぬ以前、まだ小室の養女の實子で有つた時に、いろ／＼の人が世話をして呉れて、種々の口々を申込んで呉れた、中には海軍の潮田といふ立派な方もあつたし、醫學士の細井といふ色白の人にも極まりかゝつたに、引違へて旦那様のやうな無口さまへ嫁入つて来たは何うかいふ一時の間違ひでもあらう、此間違ひを此まゝに通して、甲斐のない一生を送るは眞實情ない事と考へられ、我身の心をため直さうとはしないで人ごとばかり恨めしく思はれました。

其やうな詰らぬ考へを持つて、詰らぬ仕向けを致しまする妻へ、何のやうな結構な人なればとて親切で對はれまじやうか、お役所から退けてお歸り遊ばすに、お出むか

へこそ規則通り致しまするけれど、さし向つては一言の打とけたお話しも申上げず、怒るならお怒りなされ、何も御随意と木で鼻をくゝるやうな素振をして居ますに、旦那さま堪へかねて、ふいと立つて家をば御出あそばさるゝ、行先は何れも御神燈の下をくゝるか、待合の小座敷、それをば口惜しがつて私は恨みぬきましたけれど眞の處を言へば、私の御機嫌の取りやうが悪くて、家のうちには不愉快で居た、まれないからのお遊び、こんな事をして良人を放蕩に仕あげて仕舞ふたのです、良人は美事家を外にするといふ道楽ものに成つて仕舞ひました。

旦那さまだとして金満家の息子株が藝人たちに煽動られて、無我夢中に浮かれ立つとは事が違ふて心底おもしろく遊んだのではありますまい、いはゞ疝癪抑へ、憂さ晴らしといふやうな譯で、御酒をめし上つたからとて快くお酔ひになるのではなく、いつも蒼ざめた顔を遊ばして、何時も額際に青い筋が顯はれて居りました。

物いふ聲がけんどんで荒らかで、假初の事にも婢女たちを叱り飛ばし、私の顔をば尻目にお睨み遊ばして小言は仰しやらぬなれども其お氣むづかしい事と言ふては、現時の旦那様が柔和の相としては少しも無く、恐ろしい凄、にくらしいお顔つき、其の

方の側に私が憤怒の相で控へて居るのですから召使ひはたまりません、大方一月に二人づゝは婢女は替りまして、其都度紛失物が出来ますやら品物の破損などは夥しい事で、何うすれば此様なに不人情の者ばかり寄合ふのか、世間一體が此様に不人情なのか、それとも私一人を歎かせやうといふので、私の身に近い者となると悉く不人情に成るのであらうか、右を向いても左を向いても頼もしい顔をして居るは一人も無い、あゝ厭な事だと捨てばちになりまして、逢ふほどの人に愛想をしやうでもなく、旦那様の御同僚などがお出になつた時分も御馳走はすべて旦那さまのお指圖無いうち手出しをもした事はなく、座敷へは婢女ばかり出して私は齒が痛い頭痛のと言つて、お客の有無にかゝはらず勝手氣儘の身持をして呼ばれましたからとて返事をしやうでもない、あれをば他人は何と見ましたか、定めし山口は百年の不作だとしても評して、妻たる者の風上へも置かれぬ女と言はれましてしやう。

あの頃旦那さまが離縁をやる一言仰しやつたが最後、私は屹度何事の思慮もなく暇を頂いて、自分の身の不都合は棚へ上げて、此様な不運な、情ない、口惜しい身と天が極めてお置きなさるなら、何うでも宜しい、何となり遊ばしませ、私は私の考へ

通りな事して、悪ければ悪くなれ、萬一よければそれこそ儲け物といふやうな無茶苦茶の道理を附けて、今頃私は何に成つて居ましたか、思へば身ぶるひが出ます、よく旦那様は思ひ切つた離縁沙汰を遊ばさずに、能うも私を取止めて置いて下さつた、それはお疝癪の募つて生やさしい離縁などをお出しなさるより何時までも檻の中へ置いて苦しませてやらうといふお考へであつたか其處は解らぬなれども、今では私は何事の恨みも無い、旦那さまへ對して何事の恨みも無い、あのやうに苦しませて下さつた故今日の楽しみが楽しいので、私がいくらか物の解るやうに成つたもあゝいふ中を経た故であらう、それを思ふと私の爲に仇敵といふ人は一人も無くて、あの輕忽とこましくやられて世間へ私の身のあらを吹聴して歩いたといふ小間づかひの早も、口返答ばかりして役たゝすであつた御飯たきの勝も、みんな私の恩人といふて宜い、今このやうに好い女中ばかり集まつて、此方の奥様ぐらゐ人づかひの宜い方は無いと嘘にも喜んだ口をきかれるは、彼の人達の不奉公を私の心の反射だと悟つたからの事、世間に當てもなく人を苦しめる悪黨もなければ、神様だとして徹頭徹尾悪い事の無い人に歎きを見せるといふ事は遊ばすまい、何故ならば、私のやうに身の廻りは悉く心得ちがひ

ばかりで出来上つて、一つとして取柄の無い困り者でも、心として犯した罪が無いほどに、これ此様な可愛らしい美しい、此坊やをたしかに授けて下さつたのも、此坊やの生れて来やうといふ時分、まだ私は雲霧につまされぬいて居たのです、生れてから後も容易には晴れさうにもしなかつたのです、だけれども可愛いといふ事、産聲をあげた時から何故となく身にしてみても、いろいろ負け惜しみも言ひまじやうけれど、そつくり誰れか持つて行くとも成つたら私は強情を捨て、取ついで、此子は誰れにも指もさへせぬ、これは私の物と抱きしめたて御座りませう。

旦那さまの思ひも、私の思ひも同じであるといふ事は此子が抑も教へて呉れたので、私が此子をば抱きしめて、坊は父様の物ぢや無い、お前は母様一人のだよ、母さまが何處へ行くにしろ坊は必らず置いては行かない、私の物だ私のだとて頬を吸ひますと何とも言はれぬ解けるやうな笑顔をして、莞爾々々としませう様子の可愛い事、とでもく旦那様のやうな邪慳の方のお子では無い、これは私一人の物だと斯う極めて居まするに、旦那さまが他處からでもお歸りになつて、不愉快さうなお顔つきで此子の枕もとへお坐り遊ばして、覺束ない手つきに風車を立て、見せたり、振りつゝみなど

を振つてお見せなされ、一家の内に我を慰めるは坊主一人だぞとあの色の黒いお顔をお摺り寄せ遊ばすと、泣くかしら恐ろしがるかしらと見て居ますに、いかに嬉し顔をして莞爾々々と私に見せた通りの笑みを見せるでは御座いませぬか、或時旦那さまは、髻をひねつてお前も此子が可愛いかと仰しやいました、當然で御座います、とてつんと致して居りますと、それではお前も可愛いなと例に似ぬ戯言を仰しやつて、高聲の大笑ひを遊ばした其お顔、此子が面ざしに争はれないほど似た處が御座いました、私は此子が可愛いのですもの、何うして旦那様を憎み通せませう、私が善くすれば旦那さまも善くして下さります、たとへには三歳兒に淺瀬と言ひますけれど、私の身の一生を教へたのはまだ物を言はない赤ん坊でした。

十三夜

(上)

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと兩親に出迎はれつ

るものを、今宵は辻より飛のりの車さへ還して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらすの高聲、いはゞ私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の慾さへ渴かねば此上に望みもなし、やれやれ有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母様、あゝ何も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊ばすものを、何の顔さげて離縁状もらふて下されと言はれたものか、叱られるは必定、太郎といふ子もある身にて置いて驅け出して来るまでには種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの喜びを水の泡にさせまする事つらや、寧ろ話さずに戻らうか、戻れば太郎の母と言はれて何時何時までも原田の奥様、御両親に奏任の聲がある身と自慢させ、私さへ身を節約れば時たまはお口に合ふ物お小遣ひも差あげられるに、思ふまゝを通して離縁とならば太郎には繼母の愛き目を見せ、御両親には今までの自慢の鼻俄かに低くさせまして、人の思はく、弟の行末、あゝ此身一つの心から出世の真も止めずばならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか、あの鬼の、鬼の良人のもとへ、え、厭々と身をふるはす途端、よろ／＼として思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父

親の聲、道ゆく悪太郎の悪戯とまがへてなるべし。

外なるはおほ／＼と笑ふて、お父様私で御座んすといかにも可愛き聲、や、誰れだ、誰れであつたと障子を引明て、ほうお聞か、何だな其様な處に立つて居て、何うして又此おそくに出かけて来た、車もなし、女中も連れずか、やれ／＼と早く中へ這入れ、さあ這入れ、何うも不意に驚かされたやうでまご／＼するわな、格子は閉めずとも宜い私が閉める、兎も角も奥が、すつとお月様のさす方へ、さ、蒲團へ乗れ、蒲團へ、何うも疊が汚いので大屋に言つては置いたが職人の都合があると云ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷いて呉れ、やれ／＼何うして此遅くに出て来たお宅では皆お變りもなしかと例に替らずもてはやされるれば、針の簾にのるやうにて奥さま扱ひ情なくじつと涙を吞込んで、はい誰れも時候の障りも御座りませぬ、私は申譯のない御無沙汰して居りましたが貴君もお母様も御機嫌よくいらつしやりますかと問へば、いやもう私は噓一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道といふ奴を始めるがの、それも蒲團かぶつて半日も居ればけろ／＼とする病だから仔細はなしと元氣よく呵々と笑ふに、亥之さんが見えませぬが今晚は何方へか参りましたか、あの子

も替らず勉強で御座んすかと問へば、母親はほく／＼として茶を侷めながら、亥之は今しがた夜學に出て行きました、あれもお前お蔭さまで此間は昇給させて頂いたし、課長様が可愛がつて下さるので何の位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの縁が有るからだとして宅では毎日ひ暮して居ます、お前は如才は有るまいけれど此後とも原田さんの御機嫌の好いやうに、亥之はあの通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない御挨拶よりほか出来まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心を通じるやう、亥之が行末をもお頼み申して置いてお呉れ、ほんに替り目で陽氣が悪ければと太郎さんは何時もお悪戯をして居ますか、何故に今夜は連れてお出でない、お祖父さんも戀しがつてお出なされたものをと言はれて、又今更にうら悲しく、連れて来やうと思ひましたけれどあの子は宵までひでもう疾うに寐ましたから其まゝ置いて参りました、本當に悪戯ばかりつものりまして聞わけとは少しもなく、外へ出れば跡を追ひまするし、家内に居れば私の傍ばかり覗ふて、ほんに／＼手が懸つて成ませぬ、何故彼様で御座りませうと言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に漲るやうに、思ひ切つて置いては來たれど今頃は目を覺して母さん母さんと婢女どもを迷

惑がらせ、お煎餅やおこしの賺しも背かたで、皆々手を引いて鬼に喰はすと威かして居やう、あゝ可愛さうな事をと憚たてゝも泣きたさを、さしも兩親の機嫌よげなるに言ひ出かねて、烟にまぎらす烟草二三服、空咳こん／＼として涙を襦袢の袖にかくしぬ。今宵は舊曆の十三夜、舊弊なれどお月見の眞似事に團子をこしらへてお月様にお供へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極りを悪がつて其様な物はお止しなされと言ふし、十五夜にあげなんだから片月見になつても悪し、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで上げる事が出来なんだに、今夜来て呉れるとは夢のやうな、ほんに心が届いたのであらう、自宅で甘い物はいくらも喰べやうけれど親のこしらへたは又別物、奥様氣を取つて、今夜は昔のお關になつて、外見を構はず豆なり栗なり氣に入つたを喰べて見せてお呉れ、いつでも父様と噂すること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位のいゝ方々や御身分のある奥様がたとの御交際もして、兎も角も原田の妻と名告て通るには氣骨の折れる事もあらう、女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り、人の上に立つものはそれ丈に苦勞が多く、里方が此様な身柄では猶更のこと人に侮られぬやう

の心懸けもしなければ成るまじ、それを種々に思ふて見ると父さんだとして私だとして孫なり子なりの顔の見たいは當然なれど、餘りうるさく出入りをしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿着物に毛縞子の洋傘さした時には見すくお二階の簾を見ながら、あゝお關は何をして居る事かと思ひやるばかり行過ぎて仕舞まする、實家でも少し何とか成つて居たならばお前の肩身も廣からうし、同じくでも少しは息のつけやうものを、何を云ふにも此通り、お月見の團子をあげやうにもお重箱からしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思ふまゝの通路が叶はねば、愚痴の一つがみ賤しき身分を情なげに言はれて、本當に私は親不孝だと思ひます、それは成程柔かい衣服きて手車に乗りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父さんや母さんに斯うして上やうと思ふ事も出来ず、いは自分の皮一重、寧賃仕事してもお傍で暮した方がよつぽど快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、其様な事を假にも言ふてはならぬ、嫁に行つた身が實家の親の貢をするなど、思ひも寄らぬ事、家に居る時は齋藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか、勇さんの氣に入るやうにして家の内を修めてさへ行けば何の仔細は無い、骨

が折れるからとてそれ丈の運のある身ならば堪へられぬ事は無い筈、女などいふ者は何うも愚痴で、お袋などが詰らぬ事を言ひ出すから困り切る、いや何うも團子を喰べさせる事が出来ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調製したもの見えるから十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうぞと父親の戯語を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴しぬ。

嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩きして來るなど悉皆ためしなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほどきらびやかならず、稀に逢ひたる嬉しさにさのみは心も附かざりしが、聲よりの言傳とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れし處のあるは何か仔細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、こりやもう程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、歸るならばもう歸らねばなるまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様私は御願があつて出たので御座ります、何うぞ御聞遊ばしてと屹となつて疊に手を突く時、はじめて一しづく幾層の愛きを洩らしぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り原田

へ歸らぬ決心で出て参つたので御座ります、勇が許して参つたのではなく、あの子を寐かして、太郎を寐かして、もうあの顔を見ぬ決心で出て参りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承知せぬほどの彼の子を、欺して寐かして夢の中に、私は鬼に成つて出て参りました、御父様、御母様、察して下さりませ私は今日までつひに原田の身に就いて御耳に入れました事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍をかためました、何うぞお願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、私はこれから内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人で置いて下さりませとわつと聲たてるを啗しめる福神の袖、墨繪の竹も紫竹の色にや出づると憐れなり。

それは何ういふ仔細でと父も母も詰寄つて問かゝるに今までは黙つて居ましたれど私の家の夫婦さし向ひを半日見て下さつたら大抵がお解りに成ませう、物言ふは用事のある時慳貪に申附けられるばかり、朝起まして機嫌をきけば不圖脇を向いて庭の草花を態とらしき褒め詞、是れにも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して私は

何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用作法を御並べなされ、それはまだ、辛防もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑みなさる、それは素より華族女學校の椅子にかゝつて育つた者ではないに相違なく、御同僚の奥様がたのやうにお花のお茶の、歌の畫のと習ひ立てた事もなければ其お話しのお相手は出来ませぬけれど、出来ずば人知れず習はせて下さつても濟むべき筈、何も表向き實家の悪いを吹聴なされて、召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからといふものは丸で御人が變りまして、思ひ出しても恐ろしい御座ります、私はくら關の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か串戯に態とらしく邪慳に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは私にお厭きなされたので此様もしたら出てゆくか、彼様もしたら離縁をと言ひ出すかと苛めて苛めて苛め抜くので御座りましよ、御父様も御母様も私の性分は御存じ、よしや良人が熱者狂ひなさうとも、圍ひ者してお置きなさうとも、其様

な事に格氣する私でもなく、婢女どもから其様な噂も聞えまするけれどあれほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らばぬやう心がけて居りまするに、唯もう私の爲る事とは一から十まで面白くない思召し、箸の上げ下しに家の内の樂しくないは妻が仕方の悪いからだと思しやる、それも何ういふ事が悪い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さるやうならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはゞ太郎の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなくあの御方は鬼で御座りまする、御自分の口から出てゆけとは仰しやりませぬけれど私が此様な意氣地なしで太郎の可愛さに氣が引かれ、何うでもお詞に違背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば、張も意氣地もない思うたらの奴、それからして氣に入らぬと仰しやりまする、左様かと言つて少しなりとも私の言條を立て、負けぬ氣にお返事をしましたらそれを取つこに出てゆけと言はれるは必定、私は御母様出て来るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとてゆめさら残りをしていとは思ひませぬけれど、何にも知らぬ彼の太郎が、片親に成るかと思ひますると意地もなく、

我慢もなく、詫て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日までも物言はず辛防して居りました、御父様、御母様、私は不運で御座りますとて口惜しさ悲しさ打出し、思ひも寄らぬ事を語れば兩親は顔を見合せて、さては其様の愛き中かと呆れて暫しいふ言もなし。

母親は子に甘きならひ、聞く毎々に身にしみて口惜しく、父様は何と思召すか知らぬが元來此方から貰ふて下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの學校が何うしたのとよくも、勝手な事が言はれたもの、先方は忘れたかも知らぬが此方はたしかに日まで覺えて居る、阿關が十七の御正月、まだ門松を取らせぬ七日の朝の事であつた、もとの猿樂町の彼の家の前でお隣の小娘と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が通り掛つた原田さんの車の中へ落たとつて、それをば阿關が貰ひに行きしに、其時はじめて見たとか言つて人橋かけてやいゝと貰ひたがる、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまだ根つからの子供で何も稽古事も仕込んで置ませず、支度とても只今の有様で御座いますからとて幾度断つたか知ればせぬ、けれど何も舅姑のやかましいが有るではなし、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は

引取つてからでも十分させられるから其心配も要らぬ事、兎角くれさへすれば大事にして置かうからとそれは火のつくやうに催促して、此方から強請た譯ではなけれど支度まで先方で調べて謂は、お前は戀女房、私や父様が遠慮してさのみは出入りさせぬといふも勇さんの身分を恐れては、これは妾手かけに出したのではなし正當にも正當にも百まんたら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出這入しても差つかへは無けれど、彼方が立派にやつて居るに、此方が此通りつまらぬ活計をして居れば、お前の縁にすがつて聲の助力を受けもするかと他人様の所思が口惜しく、瘦せ我慢では無けれど交際だけは御身分相應に盡して、平生は逢ひたい娘の顔も見ずに居ます、それをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出来るの出来ぬのとよく其様な口が利けたもの、黙つて居ては際限もなく募つてそれは、癖に成つて仕舞ひます、第一は婢女どもの手前奥様の威光が殺げて、未にはお前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立るにも母様を馬鹿にする氣になられたら何とします、言ふだけの事は屹度言ふて、それが悪いと小言をいふたら何の私にも家がありますと出て来るが宜からうではないか、ほんに馬鹿々々しいとつては夫れ

ほどの事を今日が日まで黙つて居るといふ事がありますものか、あんまりお前が温順し過ぎるから我儘がつられたのである、聞いたばかりでも腹が立つ、もう、怯けて居るには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあれば其様な火の中にじつとして居るには及びぬこと、なあ父様一遍勇さんに逢ふて十分油を取つたら宜う御座りましよと母は猛つて前後もかへり見ず。父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢてありけるが、あ、お袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我さへ初めて聞いて何うしたものかと思案にくれる、阿關の事なれば並大抵で此様な事を言ひ出しさうにもなく、よく、つらさに出て来たと思えるが、して今夜は聲どのは不在か、何か改まつて、事件でもあつてか、いよく離縁するとも言はれて来たのかと落ついて問ふに、良人は一昨日より家へとは歸られませぬ、五日六日と家を明けるは常の事、さのみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際に召物の揃へかたが悪いとして如何ほど詫びても聞入れがなく、其品をば脱いで擲きつけて、御自身洋服にめしかへて、あ、私位不仕合の人間はあるまい、お前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊ばしました、何といふ事で御座りませう一年三百六十

五日物いふ事も無く、たま／＼言はるれば此様な情ない詞をかけられて、それでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顔おし拭つて居る心か、我身ながら我身の辛防がわかりませぬ、もう／＼もう私は良人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔と思へばそれまで、あの頑是ない太郎の寝顔を眺めながら置いて来るほどの心になりましたからは、もう何うでも勇の側に居る事は出来ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私のやうな不運の母の手で育つより繼母御なり御手かけなり氣に適ふた人に育て、貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々あの子の爲にも成ませう、私はもう今宵かぎり何うしても歸る事は致しませぬとて、断つても断つてぬ子の可愛さに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。

父は歎息して、無理は無い、居辛くもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿關の顔を眺めしが、大丸鬚に金輪の根を巻きて黒縮の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか整ふ奥様風、これを結び髪に結ひかへさせて綿銘仙の半纏に纏がけの水仕事さする事いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一旦の怒りに百年の運を取はづして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの齋藤主計が娘

に戻らば、泣くとも笑ふとも再び原田太郎が母とは呼ばるゝこと成るべきにもあらず、良人に未練は残さずとも我が子の愛の断ちがたくは離れていよ／＼物をも思ふべく、今の苦勞を戀しがる心も出づべし、斯く容よく生れたる身の不幸、不相應の縁につながれて幾らの苦勞をさする事と憐れさの増れども、いや阿關斯う言ふと父が無慈悲で酌取つて呉れぬのと思ふか知らぬが決してお前を叱るではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方は眞から盡す氣でも取りやうに由つては面白くなく見える事もあらう、勇さんだからとてあの通り物の道理を心得た、利發の人ではあり随分學者でもある、無茶苦茶にいちめ立る譯ではあるまいが、得て世間に褒め物の敏腕家など、言はれるは極めて恐ろしい我まゝ者、外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内へ歸つて當りちらされる、前に成つては随分つらい事もあらう、なれどもあれほどの良人を持つ身のつとめ、區役所がよひの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉れるのは格が違ふ、随つてやかましくもあらうむづかしくもあらうそれを機嫌の好いやうにと、のへて行くが妻の役、表面には見えねど世間の奥様といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが

世の勤めなり、殊にはこれほど身がらの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口廣い事は言へと亥之が昨今の月給に有ついたも畢竟は原田さんの口入れではなからうか、七光どころか十光もしてよそながらの恩を着ぬとは言はれぬに幸からうとも一つは親の爲弟の爲、太郎といふ子もあるものを今日までの辛防がなるほどならば、これから後として出来ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は齋藤の娘、一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ關さうでは無いか、合點がいつたら何事も胸に飲めて知らぬ顔に今夜は歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんとても親も察する弟も察する、涙は各自に分けて泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭ふに、阿關はわつと泣いてそれでは離縁をといふたも我儘で御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬやうになれば此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなるもので御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣にならば三方四方波風たゝす、兎もあれ彼の子も兩親の手で育てられますに、つまらぬ事を思ひ寄まして、貴君にまで厭な事をお聞かせ申しました、今宵限り

關はなくなつて魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば良人のつらく當る位百年も辛防出来さうな事、よく御言葉も合點が行きました、もう此様な事は御聞かせ申しませぬほどに心配をして下さりますなとて拭ふあとから又涙、母親は聲たて、何といふ此娘は不仕合と又一しきり大泣きの雨、くもらぬ月も折から淋しく、うしろの土手の自然生を弟の亥之が折て来て、瓶にさしたる薄の穂の招く手振りもあはれなる夜なり。

實家は上野の新坂下、駿河臺への路なれば茂れる森の木の下の闇わびしけれど、今宵は月もさやかなり、廣小路へ出づれば晝も同様、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路ゆく車を窓から呼んで、合點が行つたら兎も角も歸れ、主人の留守に斷りなしの外出、これを咎められるとも申譯の詞は有るまじ、少し時刻は遅れたれど車ならばつひ一飛、話は重ねて聞きに行かう、先づ今夜は歸つて呉れとて手を取つて引出すやうなるも事あら立てじの親の慈悲、阿關はこれまでの身と覺悟してお父様、お母様、今夜の事はこれ限り、歸りますから私は原田の妻なり、良人を誹るは濟みませぬほどにもう何も言ひませぬ、關は立派な良人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心なと喜

んで居て下されば私は何も思ふ事は御座んせぬ、決して決して不料簡など出すやうな事はしませぬほどにそれも案じて下さりますな、私の身体は今夜をはじめに勇のものだと思ひまして、彼の人の思ふまゝに何となりして貰ひましょ、それではもう私は戻ります、亥之さんが歸つたらば宜しくいふて置いて下され、お父様もお母様も御機嫌よう、此次には笑ふて参りますとて是非なさうに立あがれば、母親は無けなしの巾着さげて出て駿河臺まで幾干でゆくと門なる車夫に聲をかくるを、あ、お母様それは私がやります、難有う御座んしたと温順しく挨拶して、格子戸くれば顔に袖、涙をかくして乗り移る憐れさ、家には父が咳拂ひの是れもうるめる聲なりし。

(下)

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえぐに物かなしき上野へ入りてよりまだ一町もやうくと思ふに、いかにしたるか車夫はびつたりと轆を止めて、誠に申かねました私これで御免を願ひます、代は入りませぬからお下りなすつてと突然にいはれて、思ひもかけぬ事なれば阿闍は胸をどつきりとさせて、あれお前そんな事を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり増しは上げやうほどに骨を折つてお呉

れ、こんな淋しい處では代りの車も有るまいではないか、それはお前人困らせといふもの、ぐずらずに行つてお呉れと少しふるへて頼むやうに言へば、増しが欲しいといふのではありませぬ、私からお願ひです何うぞお下りなすつて、もう引くのが厭になつたので御座りますと言ふに、それではお前加減でも悪いか、まあ何うしたといふ譯、此處まで挽いて来て厭になつたでは済むまいがねと聲に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もう何うでも厭になつたのですからとて提燈を持しまゝ不圖脇へのがれて、お前は我まゝの車夫さんだね、それならば規約の處までとは言ひませぬ、代りのある處まで行つて呉れ、ばそれによし、代はやるほどに何處か其邊まで、せめて廣小路まで行つてお呉れと優しい聲にすかさやうにいへば、成るほど若いお方ではあり此淋しい處へおろされては定めしお困りなさりませう、これは私が悪う御座りました、ではお乗せ申しませう、お供を致しませう、嗚お驚きなさりませうとて悪漢らしくもなく提燈を持かふるに、お關もはじめて胸をなで、心丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黒く、小男の瘦せぎす、あ、月に背けたあの顔が誰れやらで有つた、誰れやらに似て居ると人の名も咽元まで轉がりながら、もしやお前さんはと我知らず

聲をかけるに、え、と驚いて振あふ男、あれお前さんはあのお方ではないか、私は
 よもやお忘れはなさるまいと車より滑るやうに下りてつくくと打まもれば、貴嬢は
 齋藤の阿關さん、面目も無い此様な姿で、背後に目が無ければ何の氣もつかずに居ま
 した、それでも音聲にも心づくべき筈なるに、私は餘程の鈍に成りましたと下を向い
 て身を恥れば、阿關は頭の先より爪先まで眺めていえく私だとして往來で逢ふた位
 ではよもや貴君と氣は附きますまい、唯た今の先までも知らぬ他人の車夫さんとのみ
 思ふて居ましたに御存じないは當然、勿體ない事であつたれど知らぬ事なればゆるし
 て下され、まあ何時から此様な業して、よく其孱弱い身に障りもしませぬか、伯母さ
 んが田舎へ引取られてお出なされて、小川町のお店をお廢めなされたといふ噂は他處
 ながら聞いても居ましたれど、私も昔の身でなければ種々と障る事があつてね、お尋
 ね申すは更なること手紙あげる事も成ませんかつた、今は何處に家を持つて、お内儀
 さんも御健勝か、小兒の出来か、今も私は折ふし小川町の勘工場見に行まする度
 毎舊のお店がそつくり其儘同じ烟草店の能登やといふに成つて居まするを、何時通
 つても覗かれて、あゝ高坂の録さんが子供であつたころ、學校の往復りに寄つては巻

烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしい吸立てたものなれど、今は何處に何をして、氣
 の優しい方なれば此様なむづかしい世に何のやうの世渡りをしてお出なさらうか、そ
 れも心に懸りました、實家へ行く度に御様子も、もし知つても居るか聞いては見ま
 するけれど、猿樂町を離れたのは今で五年の前、根つからお便りを聞く縁がなく、何
 んなにおなつかしう御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかければ、男は流れ
 る汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家といふものも御座りませぬ、
 寢處は淺草町の安宿、村田といふが二階に轉がつて、氣に向いた時は今夜のやうに遅
 くまで挽く事もありまするし、厭と思へば日がな一日じろくとして烟のやうに暮し
 て居まする、貴嬢は相變らずの美しくしさ、奥様にお成りなされたと聞いた時からそれ
 でも一度は拜む事が出来るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出来るかと夢のやう
 に願うて居ました、今日までは入用のない命と捨て物に取りあつかふて居ましたけれ
 ど命があればこそその御對面、あゝ能く私を高坂の録之助と覺えて居て下さりました、
 辱なう御座りますと下を向くに、阿關はさめくとして誰れも愛き世に一人と思ふ
 て下さるな。

してお内儀さんはと阿闍の問へば、御存じで御座りましよ筋向ふの杉田やが娘、色が白いかか恰好が何うだとか言ふて世間の人は暗雲に寝たてた女で御座ります、私か如何にも放蕩をつくして家へとは寄りつかぬやうに成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰はぬからだと親類の中のわからずやが勘違ひして、あれならばと母親が眼鏡にかけ、是非もらへ、やれ貰へと無茶苦茶に糊めたてる五月蠅さ、何うなりと成れ、成れ、勝手に成れとて彼れを家へ迎へたは丁度貴嬢が御懐妊だと聞きました時分の事、一年目には私が處にもお目出たうを他人からは言はれて、犬張子や風車を並べたてるやうに成りましたれど、何のそんな事で私が放蕩のやむ事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら氣が改まるかとも思ふて居たのであらうなれど、たとひ小町と西施と手を引いて来て、衣通姫が舞を舞つて見せて呉れても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見て發心が出来ませう、遊んで遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の處に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて實家へ戻したまゝ音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはし

ませぬけれど、其子も昨年の暮寒扶斯に罹つて死んださうに聞きました、女はませた者ではあり、死ぬ際には定めし父様とか何とか言ふたので御座りませう、今年居れば五年になるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴嬢といふ事も知りませぬので、飛んだ我まゝの不調法、さ、お乗りなされ、お供をします、無不意でお驚きなりましたらう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が樂しみに轆轤をにぎつて、何が望みに牛馬の真似をする、錢が貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭で、お客様を乗せやうが空車の時だらうが厭と成ると用捨なく厭に成ます、呆れはてる我まゝ、男、愛想が盡きるでは有りませぬか、さ、お乗りなされ、お供をしますとすゝめられて、あれ知らぬ中は仕方もなし、知つて其車に乗れますものか、それでも此様な淋しい處を一人ゆくは心細いほどに、廣小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しながら行きませうとて阿闍は小袂少し引あげて、ぬり下駄のおと是れも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘れぬ由縁のある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草

屋の一人息子、今は此様に色も黒く見られぬ男になつては居れども、世にある頃の唐棧ぞろひに小氣の利いた前だけ、お世辭も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと、評判された利口らしい人の、さてもくの變り様、我身が嫁入りの噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息子は九で人間が變つたやうな、魔でもさしたか、祟りでもあるか、よもや只事では無いと其頃に聞きしが、今宵見れば如何にも淺ましい身の有様、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私は此人に思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に行々は彼の店の彼處へ坐つて、新聞見ながら商ひするのと思ふても居たれど、はからぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存を入れられやう、烟草屋の録さんには思へどそれはほんの子供心、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とさらぬ夢のやうな戀なるを、思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞はうと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際迄も涙がこぼれて忘れかねた人、私が思ふほどは此人も思ふて、それ故の身の破滅かも知れぬものを、我が此様な九番などに、取すましたるやうな姿をい

かばかり面憎く思はれるであらう、ゆめさら左様した樂しらしい身ではなければと阿關は振返つて録之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿關に向つてさのみは嬉しき様子も見えざりき。

廣小路に出づれば車もあり、阿關は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失禮なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかゝつて何か申たい事は澤山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私はお別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬやうに、伯母さんをも早く安心させておあげなさりまし、陰ながら私も祈ります、何うぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります處を見せて下され、左様ならばと挨拶すれば録之助は紙づゝみを頂いて、お辭儀申す筈なれど賢嬢のお手より下されたのなれば、難有く頂戴して思ひ出にします、お別れ申すが惜しいと言つても是れが夢ならば仕方のない事、さ、お出なされ、私も歸ります、更けては路が淋しう御座りますぞとて空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力なさうの塗り下駄の音、村田の二階も原田の奥も愛きはお互ひの世におもふ事多し。

わかれ道

(上)

お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことごとくと羽目を敲く音のするに誰れだえ、もう寐て仕舞つたから明日来てお呉れと嘘を言へば、寐たつて宜いやね、起きて明けとお呉んなさい、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高く言へば、いやな子だね此様な遅くに何を言ひに来たか、又お餅のおねだりか、と笑つて、今あけるよ少時辛防おしと言ひながら、仕立かけの縫物に針とめして立つは年頃二十餘りの意気な女、多い髪の毛を忙しい折からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の臺なしな半天を着て、急ぎ足に沓脱へ下りて格子戸に添ひし雨戸を明くれば、お氣の毒さまと言ひながらすつと這入るは一寸法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て餘しの小僧なり、年は十六なれども不圖見る處は一か二か、肩幅せばく顔小さく、目鼻だちはきり／＼と利口らしけれどいかにも脊の矮ければ人嘲りて仇名はつけゝる。御免なさい、と火鉢の傍へづか／＼と行けば、お餅を焼くには火が足りないよ、臺所の火消

壺から消し炭を持つて来てお前が勝手に焼いてお喰へ、私は今夜中に此れ一枚を上げねばならぬ、角の質屋の旦那どのが御年始着だからと針を取れば、吉はふ／＼と言つて彼の兀頭には惜しい物だ、御初穂を己れでも着て遣らうかと言へば、馬鹿をお言ひでない人の御初穂を着ると出世が出来ないと言ふではないか、今つから伸びる事が出来なくては仕方が無い、其様な事を他處の家でもしては不可よと氣を附けるに、己れなんぞ御出世は願はないのだから他人の物だらうが何だらうが着かぶつて遣るだけが徳さ、お前さん何時か左様言つたね、運が向く時になると己れに糸織の着物をこしらへて呉れるつて、本當に調製へて呉れるかえと眞面目だつて言へば、それは調製へて上げられるやうならお目出度のもの喜んで調製へるがね、私が姿を見てお呉れ、此様な容体で人さまの仕事を居る境界ではなからうか、まあ夢のやうな約束さとして笑つて居れば、いやなそれは、出来ない時に調製へて呉れとは言はない、お前さんに運の向いた時の事さ、まあ其様な約束でもして喜ばして置いてお呉れ、此様な野郎が糸織ぞろへを被つた處をかしくも無いけれども淋しさうな笑顔をすれば、そんなら吉ちゃんお前が出世の時は私にもしてお呉れか、其約束も極めて置きたいねと

微笑んで言へば、其奴はいけない、己れは何うしても出世なんぞは爲ないのだから。何故々々。何故でもしない、誰れが来て無理やりに手を取つて引上げて己れは此處に斯うして居るのがいいのだ、傘屋の油引きが一番好いのだ、何うで盲目縞の筒袖に三尺を脊負つて産て来たのだから、溢を買ひに行く時かすりでも取つて吹矢の一本も當りを取るのが好い運さ、お前さんなどは以前が立派な人だといふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾になるといふ謎では無いせ、悪く取つて怒つてお呉んなさるな、と火なぶりをしながら身の上を歎くに、左様さ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事があるからね、とお京は尺を杖に振返りて吉三が顔を諦視りぬ。

例の如く臺所から炭を持出して、お前は喰ひなさらぬかと聞けば、いゝえ、とお京の頭をふるに、では己ればかり御馳走さまにならうかな、本當に自家の客番奴めやかましい小言ばかり言やがつて、人を使ふ法をも知りやがらない、死んだお老婆さんはあんなのでは無かつたけれど、今度の奴等と来たら一人として話せるのは無い、お京さんお前は自家の半次さんを好きか、随分厭味に出来あがつて、いゝ氣の骨頂の奴

ではないか、己れは親方の息子だけれど彼奴ばかりは何うしても主人とは思はれない、番ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが随分おもしろいよと話しながら、鐵網の上へ餅をのせて、おゝ熱々と指先を吹いてかゝりぬ。

己れは何うもお前さんの事が他人のやうに思はれぬは何ういふものであらう、お京さんお前は弟といふを持つた事は無いのかと問はれて、私は一人子で同胞なしだから弟にも妹にも持つた事は一度も無いと言ふ、左様ななあ、それでは矢張何でも無いのだらう、何處からか斯うお前のやうな人が己れの眞身の姉さんだと言つて出て来たら何んなに嬉しいか、首つ玉へ嚙り着いて己れはそれぎり往生しても喜ぶのだが、本當に己れは木の股からでも出て来たのか、つひしか親類らしい者に逢つた事も無い、それだから幾度も幾度も考へては己れはもう一生誰れにも逢ふ事が出来ない位なら今のうち死んで仕舞つた方が氣樂だと考へるがね、それでも慾があるから可笑しい、ひよつくり變てこな夢なんかを見てね、平常優しい事の一言も言つて呉れる人が母親や親父や姉さんや兄さんのやうに思はれて、もう少し生きて居やうかしら、もう一年も生きて居たら誰れか本當の事を話して呉れるかと楽しんでね、面白くも無い油引きを

やつて居るが己れ見たやうな變な物が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母親も親父も空つきり當が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れは何うしても不思議でならない、と焼あがりし餅を兩手でたゝきつゝいつも言ふなる心細さを繰返せば、それでもお前借づる錦の守り袋といふやうな證據は無いのかえ、何か手懸りは有りさうなものだねとお京の言ふを消して、何其様な氣の利いた物は有りさうにもしない生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなど、朋輩の奴等が悪口をいふが、もしかもあると左様かも知れない、それなら己れは乞食の子だ、母親も親父も乞食かも知れない、表を通る襪襪を下げた奴が矢張己れが親類まきで毎朝さまつて貰ひに来る跛隻眼のあの婆あ何か己れの爲の何に當るか知れはしない、話さないでもお前は大抵知つて居るだらうけれど今の傘屋に奉公する前は矢張己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しをれて、お京さん己れが本當に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がつては呉れないだらうか、振向いて見るとは呉れまいねと言ふに、串戯をお言ひでないお前が何のやうな人の子で何んな身かそれは知らないが、何だからとつて厭がるも厭がらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言

ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何故其様な意氣地なしをお言ひだと罵ませば、己れは何うしても駄目だよ、何にも爲やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざりき。

(中)

今は亡せたる傘屋の先代に太つ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老婆様ありき、六年前の冬の事寺参りの歸りに角兵衛の子供を拾ふて来て、いゝよ親方からやかましく言つて來たら其時の事、可愛想に足が痛くて歩かれないと言ふと朋輩の意地悪が置去りに捨て、行つたと言ふ、其様な處へ歸るに當るものか些とも怕かない事は無いから私が家に居なさい、みんなも心配する事は無い何の此子位のもの二人や三人、臺所へ板を並べてお飯を喰べさせるに文句が入るものか、判證文を取つた奴でも驅落をするもあれば持逃げの吝な奴もある、料簡次第のものだわな、いは馬には乗つて見ろさ、役に立つか立たないか置いて見なけりや知れはせん、お前新網へ歸るが厭なら此家を死場と極めて骨を折らなきやならないよ、しつかり遣つてお呉

れと言ひ含められて、吉やくと夫れよりの丹精今油ひきに、大人三人前を一手に引うけて鼻唄交り遣つて退ける腕を見るもの、流石に眼鏡と亡き老婆をほめける。

恩ある人は二年目に亡せて今の主も内儀様も息子の半次も氣に喰はぬ者のみなれど、此處を死場と定めたるなれば厭として更に何方に行くべき、身は疝癥に筋骨つまつてか人よりは一寸法師一寸法師と誹らるゝも口惜しきに、吉や手前は親の日に腥さを喰たであらう、ざまを見ろ廻りの廻りの小佛と朋輩の鼻垂れに仕事の上の仇を返されて、鐵拳に撲倒す勇氣はあれども誠に父母いかなる日に失せて何時を精進日とも心得なき身の、心細き事を思ふては干場の傘のかげに隠れて大地を枕に仰向き臥してはこぼるゝ涙を呑込みぬる悲しさ、四季押通し油びかりする目くら綺の筒袖を振つて火の玉のやうな子だと町内に恐がられる亂暴も感むる人なき胸苦しきの餘り、假にも優しう言ふて呉れる人のあれば、しがみ附いて取つて離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春より此裏へと越して來し者なれど物事に氣才の利きて長屋中への交際もよく、大屋なれば傘屋の者へは殊更に愛想を見せ、小僧さん達着る物のほころびでも切れたなら私の家へ持つてお出、お家は御多人數お内儀さんの針持つていらつしや

る暇はあるまじ、私は常住仕事紙と首つ引の身なればほんの一針造作は無い、一人住居の相手なしに毎日毎夜さびしくつて暮して居るなれば手すきの時には遊びにも來て下され、私は此様ながらくした氣なれば吉ちやんのやうな暴れさんが大好き、疝癥がおこつた時には表の米屋が白犬を擲ると思ふて私の家の洗ひかへしを光澤出しの小槌に、礎うちでも遣りに來て下され、それならばお前さんも人に憎まれず私の方でも大助かり、ほんに兩爲で御座んすほどにと戯言まじり何時となく心安く、お京さんもお京さんとして入浸るを職人ども挑發ては帶屋の大将のあちらこちら、桂川の幕が出る時はお半の背に長右衛門と唱はせて彼の帶の上へちよこなんと乗つて出るか、此奴は好いお茶番だと笑はれるに、男なら眞似て見ろ、仕事やの家へ行つて茶棚の奥の菓子鉢の中に、今日は何が何箇あるまで知つて居るのは恐らく己れの外には有るまい、質屋の瓦頭めお京さんに首つたけで、仕事を頼むの何が何うしたのと小うるさく這入込んで前だれの半襟の帯つ皮のと附届をして御機嫌を取つては居るけれど、つひしか喜んだ挨拶をした事が無い、ましてや夜でも夜中でも傘屋の吉が來たとさへ言へば寝間着のまゝで格子戸を明けて、今日は一日遊びに來なかつたね、何うかお爲か、案じ

て居たにと手を取つて引入れられる者が他にあらうか、お氣の毒様なこつたが獨活の大木は役にたかない、山椒は小粒で珍重されると高い事をいふに、此野郎めと背を酷く打たれて、有がたう御座いますと澄まして行く顔つき身長さへあれば人串戯とて怒すまじけれど、一寸法師の生意氣と爪はじきして好い黝りものに烟草休みの話の種なりき。

(下)

十二月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ逃への日限の遅れしを詫びに行きて、歸りは懐手の急ぎ足、草履下駄の先にかゝるものは面白づくに蹴かへして、ころ／＼と轉げる、右に左に追ひかけては大溝の中へ蹴落して一人から／＼高笑ひ、聞く者なくて天上のお月さま宛も皓々と照し給ふを寒いといふ事知らぬ身なれば唯こゝちよく爽かにて、歸りは例の窓を敲いてと目算ながら横町を曲れば、いきなり後より追ひすがる人の、兩手に目を隠して忍び笑ひをするに、誰れだ誰れだと指を撫で、何だお京さんか、小指のまむしが物を言ふ、嚇かしても駄目だよと顔を振のけるに、憎らしい當てられて仕舞つたと笑ひ出す。お京はお高祖頭巾眉深に風道の羽織着て例に似合はぬ

美き粧なるを、吉三は見あげ見下ろして、お前何處へ行きなすつたの、今日明日は忙がしくしてお飯を喰べる間もあるまいと言ふたではないか、何處へお客様にあるいて居たのと不審を立てられて、取越しの御年始さと素知らぬ顔をすれば、嘘を言つてるせ三十日の年始を受ける家は無いやな、親類へでも行きなすつたかと問へば、とんでもない親類へ行くやうな身に成つたのさ、私は明日あの裏の移轉をするよ、あんまりだしぬけどから嘘お前おどろくだらうね、私も少し不意なのでまた本當とも思はれない、兎も角喜んでお呉れ悪い事では無いからと言ふに、本當か、本當か、と吉は呆れて、嘘では無いか申戯では無いか、其様な事を言つておどかして呉れなくても宜い、己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて仕舞ふのだから其様な厭な戯言は廢しにしてお呉れ、え、詰らない事を言ふ人だと頭をふるに、嘘ではないよ何時かお前が言つた通り上等の運が馬車に乗つて迎ひに来たといふ騒ぎだから彼處の裏には居られない、吉ちやん其うちに糸織ぞろひを調製へて上ると言へば、厭だ、己れは其様な物は貰ひたくない、お前その好い運といふは詰らぬ處へ行かうといふのではな

いか、一昨日自家の半次さんが左様言つて居たに、仕事やお京さんは八百屋横町に

按摩をして居る伯父さんが口入れて何處かのお邸へ御奉公に出るのださうだ、何お小間使ひといふ年ではなし、奥さまのお側やお縫物師の譯はない、三つ輪に結つて總の下つた被布を着るお妾さまに相違は無い、何うしてあの顔で仕事やが通せるものかと此様な事を言つて居た、己れは其様な事は無いと思ふから、間違ひだらうと言つて大喧嘩を遣つたのだが、お前もしや其處へ行くのでは無いか、其お邸へ行くのであらう、と問はれて、何も私だとして行きたい事は無いけれど行かなければならぬのさ、吉ちやんお前にもう逢はれなくなるねえとて、唯言ふことながら萎れて聞ゆれば、どんな出世に成るのか知らぬが其處へ行くのは廢したら宜からう、何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、あれほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其様な事を始めたのか、あんまり情ないではないかと吉は我身の潔白に較べて、お廢しよ、お廢しよ、斷つてお仕舞なと言へば、困つたねとお京は立止まつて、それでも吉ちやん私洗ひ張に倦きが來て、もうお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふのさ。

思ひ切つた事を我れ知らず言つては、と笑ひしが、兎も角も家へ行かうよ、吉ちや

ん少しお急ぎと言はれて、何だか己れは根つから面白くとも思はれない、お前まあ先へお出よと後に附いて、地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつしか傘屋の路次を入つてお京が例の窓下に立てば、此處をば毎夜音づれて呉れたのなれど、明日の晩はもうお前の聲も聞かれない、世の中つて厭なものだねと歎息するに、それはお前の心からだとして不満らしい吉三の言ひぬ。

お京は家に入るより洋燈に火を點して、火鉢を掻きおこし、吉ちやんやお焙りよと聲をかけるに己れは厭だと言つて柱際に立つて居るを、それでもお前寒からうではなにか風を引くといけないと氣を附ければ、引いても宜いやね、構はずに置いてお呉れと下を向いて居るに、お前は何うかおしか、何だか可笑しい様子だね私の言ふ事が何か非にでも障つたの、それなら其やうに言つて呉れたが宜い、黙つて其様な顔をして居られると氣に成つて仕方が無いと言へば、氣になんぞ懸けなくてもいよ、己れも傘屋の吉三だ女の世話には成らないと言つて、凭かゝりし柱に脊を擦りながら、あゝ詰らない面白くない、己れは本當に何と言ふのだらう、いろくの人が鳥渡好い顔を見せて直様つまらない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さんも善い人であつ

たし、紺屋のお絹さんといふ縮れつ毛の人も可愛がつて呉れたのだけれど、お老婆さんは中風で死ぬし、お絹さんはお嫁に行くを厭がつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた、お前は不人情で己れを捨て、行くし、もう何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきなぞ、百人前の仕事をしたらからとつて褒美の一つも出やうでは無し朝から晩まで一寸法師の言はれついで、それだからと言つて一生経つても此身長が延びやうかい、待てば甘露といふけれど己れなんぞは一日々々厭な事ばかり降つて来やがる、一昨日半次の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸の腐つたのではないと威張つたに、五日とたゝずに卵をぬがなければ成らないのであらう、そんな嘘つ吐きの、ごまかしの、慾の深いお前さんを姉さん同様に思つて居たが口惜しい、もうお京さんお前には逢はないよ、何うしてもお前には逢はないよ、長々御世話さま此處からお禮を申します、人をつけ、もう誰の事も當てにするものか、左様なら、言つて立あがり沓ぬぎの草履下駄足に引かくるを、あれ吉ちやんそれはお前勸違ひだ、何も私が此處を離れるとてお前を見捨てる事はしない、私はほんとに兄弟とばかり思ふのだもの其様な愛想づかしは酷からう、と後から羽がひじめに抱き止めて、氣の早

い子だねとお京の論せば、そんならお妾に行くを廢めにしなさるかと振かへられて、誰れも願ふて行く處では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだからそれは折角だけれど背かれないよと言ふに、吉は涙の眼に見つめて、お京さん後生だから此肩の手を放しておくんさい。

(この篇はもと國民之友に出したるものなり今回全集中に加へんことを懇請したるに民友社は喜んでこれを承諾せられたり記して以て同社が好意を謝す 著者遺族)

うらむらさき

(上)

夕暮の店先に郵便脚夫が投込んで行きし女文字の書狀一通、炬燵の間の洋燈のかけに讀んで、くるくると帯の間へ巻收むれば起居に心の配られて物案じなる事一通りならず、おのづと色に見えて、結構人の旦那どの、何うぞしたかとお問ひのかゝるに、いえ、格別の事でも御座りませうまいけれど、仲町の姉が何やら心配の事が有るほどに、

此方から行けば宜いのなれど、やかましやの良人が暇といふては毛筋ほども明けさせて呉れぬ五月蠅さ、夜分なりと歸りは此方から送らせうほどにお良人に願ふて鳥渡來て呉れられまいか、待つて居る、と言ふ文面で御座ります、又まゝ娘と紛紜でも起りましたのか、氣の狭い人なれば何事も口には得言はで、たんと胸を痛くするが彼の人の性分、困りもので御座ります、とて態との高笑ひをして聞かせれば、はて扱氣の毒など太い眉を寄せて、お前にすればたつた一人の同胞、善惡ともに分けて聞かねばならぬ役を笑ひ事にしては置かれまい、何事の相談か行つて様子を見たらば宜からう、女は氣の狭いもの、待つと成つては一時も十年のやうに思はれるであらうを、お前の解りを我の故に取られて恨まれても徳の行かぬ事、夜は格別の用も無し、早く行つて聽いて遣るがよからう、と可愛き妻が姉の事なれば、優しき許しの願はずして出るに、飛立つほど嬉しいを此方は態と色にも見せず、では行きませうかと不勝々々に簞笥へ手を懸れば、不實な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何れほど待つて居るか知ればせぬぞ、と知らぬ事なれば、佛性の旦那どの急き立つるに、心の鬼やおのづと面ぼてりして、胸には動悸の波たかゝり。

糸織の小袖を重ねて、縮緬の羽織にお高祖頭巾、背の高き人なれば夜風を厭ふ角袖外套のうつり能く、では行つて來ますと店口に駒下駄直させながら、太吉、太吉と小僧の背を人さし指の先に突いて、お舟こぐ真似に精の出で店の品をばちよるまかされぬやうにしてお呉れ、私の歸りが遅いやうなら構はずと戸をば下して、行火へ焙るならいつまでも床の中へ入れて置いては成らないぞえ、さんは臺所の火のもとを心づけて、旦那のお枕もとへは例の通りお湯わかしにお烟草盆、忘れぬやうにして御不由させますな、成るだけ早くは歸らうけれど、と硝子戸に手をかくれば、旦那どの聲をかけて車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと甘たるき言葉、何の商人の女房が店から車に乗出すは榮耀の沙汰で御座ります、其處らの角から能いほどに直切つて乗つて参りましょ、これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい聲にて笑へば、世帯じみた事を旦那どのが恐悦顔、見ぬやうにして妻は表へ立出でしが大空を見上げてほつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいと雲深う成りぬ。

何處の姉様からお手紙が來やうぞ、真赤な嘘をと我家の見返られて、何事も御存じなしによいお顔をして暇を下さる勿体なさ、あのやうな毒の無い、物疑ひといふては

謙ほどもお持ちなさらぬ心のうつくしい人を、能うも能うも舌三寸に欺しつけて心の
 まゝの不義放埒、これがまの人の女房の所業であらうか、何といふ悪者の、人でなし
 の、法も道理も無茶苦茶の犬畜生のやうな心であらう、此様ないたづらの畜生をば、
 御存じの無い事として天にも地にも無いかのやうに可愛がつて下すつて、私が事と言へ
 ば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる御思召有難い嬉しい恐ろしい、
 餘りの勿体なさに涙がこぼれる、あのやうな良人を持つ身の何が不足で劍の刃渡りす
 るやうな危険い計較をするのやら、可愛さうにあの人の好い仲町の姉さんまでも引合
 ひにして三方四方嘘で固めて、此足はまゝ何處へ向く、思へば私は悪黨人でなし、い
 たづら者の不義者の、まゝ何といふ心得違ひ、と辻に立つて歩みも得やらず、横町の
 角二つ曲りて今は我家の軒は見えぬを、振かへりては熱き涙のはらくとこぼれぬ。
 良人の名は小松原東二郎、西洋小間物の店は名ばかりに、有あまる身代を藏の中に
 寐かして、さりとは當世の算用知らぬ人よし男に、戀女房のお律が手ばしこさ奥も表
 も平手に揉んで、美しい叱に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元からお
 客様への世辭も出る、年もねつから行きなさらぬにお伶俐なお内儀さまと見るほどの

人褒め物の、此人此身が裏道の働き、人は知らじと自ら晦ませども、優しき良人が心
 ざし生憎纏はる心地してお律は路傍に立すくみしまゝ、行くまいか行くまいか、眞思
 ひ切つて行くまいか、今日までの罪は今日までの罪、今から私が氣さへ改めれば、彼
 のお人としてさのみ未練は仰しやるまじく、お互ひに清いお交際をして人知らぬうちに
 汚れを雪いで仕舞つたなら、今から後のあの方の爲、私の爲、生中こがれて附纏ふた
 とて晴れては添はれる中ではなし、可愛い人に不義の名を着せて少しも是れが世間に
 知れたら何とせう、私は兎も角あの方はこれからの御世生前一生を暗黒にさせまして
 それで私は満足に思はれやうか、お、厭な事恐ろしい、何と思ふて私は逢ひに出て來
 たか、よしやお文が千通來やうと行さへせねばお互ひ疵には成るまいもの、もう思ひ
 切つて歸りませう、歸りませう、歸りませう、歸りませう、え、もう私は思ひ切つた
 と路引違へて駒下駄を返せば、生憎夜風の身に寒く、夢のやうなる考へ又もやふつと
 吹破られて、え、私は其やうな心弱い事に引かれてならうか、最初あの家に入する
 時から、東二郎どのを良人と定めて行つたのでは無いものを、形は行つても心は決し
 て遣るまいと極めて置いたを、今更に成つて何の義理はり、悪人でも、いたづらでも

構ひは無い、お氣に入らずはお捨てなされ、捨てられれば結句本望、あのやうな怪物様を良人に奉つて吉岡さんを袖にするやうな考へを、何故しばらくでも持つたのであらう、私の命の有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい、良人を持たうと奥様お出来なさらうと此約束は破るまいと言ふて置いたを、誰れが何のやうに優しからうと、有難い事を言ふて呉れやうと、私の良人は吉岡さんの外には無いものを、もう何事も思ひますまい思ひますまいとて頭巾の上から耳を押へて急ぎ足に五六歩かけ出せば、胸の動悸のいつしか絶えて、心静かに氣の冴えて、色なき唇には冷かなる笑みさへ浮びぬ。

たけくらへ

(一)

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取

る如く、明けくれなしの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりととは陽氣の町と住みたる人の申しさ、三島神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる家もなく、かたぶく橋端の十軒長屋二十軒長屋、商ひはかつぶつ利かぬ處とて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまをかき、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手當ことごとくしく、一家内これにかゝりてそれは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に慾深様のかつき給ふ是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をと人ごとに言ふめれど、さりととは思ひのほかなるもの、此あたりに大長者の噂も聞かざりき、住む人の多くは廓者にて良人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出づれば、うしろに切火打かかる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそね、恨みはかゝる身のはて危く、すはと言はい

命かけの勤めに遊山らしく見ゆるもをかし、娘は大雛の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは檜舞臺と見立つるもをかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざつぱりとしし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやらく忙がしげに横抱きの小包は問はでもさんと此あたりには言ふぞかし、一體の風俗よそと變りて、女子の後帯さちんとせし人少く、がらを好みで巾廣の巻帶、年増はまだよし、十五六の小癪なるが酸漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、處からは是非もなや、昨日河岸店に何葉の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たゞ骨になれば再び古巢への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覺えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとて能くも學びし露八が物真似、榮喜が所作、孟子の母やおどろかん上達の速かさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意氣は七つ八つよりつりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそり節、十五の少年がませかた恐ろし、學校の唱歌にもぎつらよんちよんと拍子を取りて、運動會に

木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしきに教師の苦心さこそと思はるゝ入谷ちかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよくあらはれて、唯學校と一口にて此あたりには呑込みのつく程なるがあり、通ふ子供の数々に或は火消齋人足、おとつさんは刎橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアソびがへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言はれて、名のりや辛き子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの娼家の秘藏息子寮住居に華族さまを氣取りて、ふさ附き帽子面もちゆたかに洋服かるくと花々しきを、坊ちやん坊ちやんとて此子の追従するもをかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となづる黒髪も今幾歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬべき袖の色、發心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、性來おとなしきさまぐの悪戯をしかけ、猫の死骸を繩にくりてお役目なれば投げつけし事もありしが、それは昔、今は校内一人の人とて苟にも侮りき、歳は十五、並脊にていが栗の頭髮も思ひなしか俗とは變りて

すませど、何處やら釋といひたげの素振なり。

(二)

八月廿日は千束神社のまつりとして、山車屋臺に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんす勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて油断のなりがたき此あたりのなれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合せて生氣のありたけ、聞かば膽もつぶれぬべし、横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大將に頭の長とて歳も十六、仁和賀の鐵棒に親父の代理をつとめしより氣位えらくなりて、帯は腰の先に、返事は鼻の先にていふものと定め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと爲人足が女房の蔭口に聞えぬ、心一ぱいに我がまゝを通して身に合はぬ巾をも廣げしが、表町に田中屋の正太郎とて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり身に愛敬あれば人も憎まぬ當の敵あり、我れは私立の學校へ通ひしを、先方は公立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしをる、去年も一昨年も先方には大人の未社がつきて、まつりの趣向も我れよりは花を咲かせ、喧嘩に手出しのなりがたき仕組みもありき、今年又もや負けにならば、誰れだと思ふ横町の長吉だぞと平常の力だては空のばりとい

なされて、辨天ぼりに水およぎの折も我が組になる人は多かるまじ、力を言は、我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは學問が出来をるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、内々は彼方がたに成りたるも口惜し、まつりは明後日、いよく我が方が負け色と見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、正太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲やすし、加擔人は車屋の丑に元結よりの文、手遊屋の彌助などあらば引けは取るまじ、おゝそれよりは彼の人の事後の人の事、藤本のならば宜き智慧も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば眼口にうるさき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそりと、信さん居るか顔を出しぬ。

己れの爲る事は亂暴だと人がいふ、亂暴かも知れないが口惜しい事は口惜しいや、なあ聞いとくれ信さん、去年も己れの處の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と萬燈のたゝき合ひから始まつて、それといふと奴の仲間がばらばらと飛び出しやあがつて、とうだらう小さな者の萬燈を打ちわしらまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町のさまをと一人がいふと、間拔に脊のたかい大人のやうな面をして居る團子屋の頓馬が、

頭もあるものか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなんて悪口を言ったとき、己らあ其時千束様へねり込んで居たもんだから、あとで聞いた時直様仕かへしに行かうと言つたら、父さんに頭から小言を喰つて其時も泣寝入、一昨年はそらね、お前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若い衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、いくら金が有るとつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、あんな奴を生して置くより擲きころす方が世間のためだ、己らあ今度の祭りには如何しても亂暴に仕掛けて取かへしを附けやうと思ふよ、だから信さん友達かひに、それはお前が厭だといふのも知れてるけれども何卒己れの肩を持つて、横町組の耻をすくぬのだからね、おい、本家本元の唱歌だなんて威張りを正太郎を取ちめて呉れないか、己れが私立の寝ぼけ生徒といはれ、ばお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、助けると思つて大萬燈を振廻しておくれ、己れは心から底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端は無いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くても宜いよ。萬燈は振廻せないよ。振廻せなくても宜いよ。僕が這入ると負ける

が宜いかえ。負けても宜いのさ、それは仕方が無いと諦めるから、お前は何も爲ないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへ呉れると豪氣に人氣がつくからね、己れは此様な没分曉漢だのにお前は學が出来るからね、向ふの奴が漢語か何かで冷かしても言つたら、此方も漢語で仕返しておくれ、あ、好い氣持ださつぱりしたお前が承知をしてくれ、ばもう千人力だ、信さん難有うと常に無い優しき言葉も出づるものなり。

一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帯といふ坊様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産聲を揚げしものと大和尚夫婦が最負もあり、同じ學校へかよへば私立々々となげなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若い衆ともまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取ること罪は田中屋方に少からず、見かけて頼まれし義理としても厭とは言ひかねて信如、それではお前の組になるさ、なるといつたら嘘は無いが、成るべく喧嘩は爲ぬ方が勝だよ、いよく先方が賣りに出たら仕方が無い、何いざと言へば田中の正太郎位小指

の先さし、我が力の無いは忘れて、信如は机の抽斗から京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく切れさうだねえと覗き込む長吉が顔、あぶなし此物を振廻してなることか。

(三)

解かば足にもとくべき髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく描おもたげの、緒熊といふ名は恐ろしけれど、これを此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜からず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ聲の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快きものなり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒縞子と染分絞りの晝夜帯胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の歸りに頸筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申しき。大黒屋の美登利とて生國は紀州、言葉のいさゝか訛れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、延いては遣手新造が姉への世辭にも、美いちやん人形をお買

ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を看せねば貰ふ身の有がたくも覺えず、まぐはまぐは、同級の女生徒二十人に揃ひのごむ鞠を與へしはおろかの事、馴染の筆やに店ざらしの手遊を買しめて悦ばせし事もあり、さりとして日々夜々の散財此歳この身分にて叶ふべきにあらず、末は何となる身ぞ、両親ありながら大目に見てあらず詞をかけたる事も無く、樓の主か大切がる様子も怪しきに、聞けば養女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身買りの當時、鑑定に來りし樓の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出でしは此譯、それより奥は何なれや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記に成りぬ、此身は遊藝手藝學校にも通はせられて、其ほかは心のまゝ、半日は姉の部屋、半日は町に遊んで見聞は三味に太鼓にあけ紫のなり形、はじめ藤色絞りの半襟を袷にかけて着て歩きしに、田舎者ななか者と町内の娘どもに笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きついでし事もありしが、今は我れより人々を嘲りて、野暮な姿と打つけの悪まれ口を、言ひ返す者もなくなりぬ、二十日はお祭りなれば心一ぱい面白い事をしてと友達のがむに、趣向は何なりと各自に工夫して大勢の好い事がいゝではないか、幾金でもい

私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、子供仲間の女王様又とあるまじき恵みに大人よりも利きが早く、茶番にしやう、何處のか店を借りて往來から見えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、それよりはお神輿をこしらへてお呉れな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本當のを、重くても構ひはしない、やつちよいやつちよい譯なしだと振鉢巻をする男子の傍から、それでは私たちが詰らない、皆が騒ぐを見るばかりでは美登利さんだとして面白くはあるまい、何でもお前の好い物におしよと、女の一むれは祭りを抜きに常盤座をと、言ひたげの口振をかき、田中の正太は可愛らしい眼をぐるぐると動かして、幻燈にしないか、幻燈に己れの處にも少しは有るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店でやらうではないか、己れが映してで横町の三五郎に口上を言はせやう、美登利さんそれにしないかと言へば、あゝそれは面白からう、三ちやんの口上ならば誰れも笑はずには居られまい、序にあの顔がうつると猶おもしろいと相談はとゝのひて、不足の品を正太が買物役、汗になりて飛び廻るもをかしく、いよゝ明日となりては横町までも其沙汰聞えぬ。

(四)

打つや鼓のしらべ、三味の音色に事かぬ場處も、祭りは別物、酉の市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三島さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃ひは同じ眞岡木綿に町名くづしを、去歲よりはよからぬ形とつぶやくもありし、くちなし染の麻だすき成る程太きを好みて、十四五より以下なるは、達磨、木兎、犬はり子、さまざまの手遊を数多きほど見得にして、七つ九つ十一着くるもあり、大鈴小鈴脊中にならつかせて、駈け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の頸筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧とおもふに、しごいて締めし帯の水淺黄も、見よや縮緬の上染、襟の印のあがりも際立ちて、うしろ鉢巻に山車の花一枝、革緒の雪駄おとのみはすれど、馬鹿ばやしの間には入らざりき、夜宮は事なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に寄り合ひしは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門へ出つ入りつして、呼んで来い三五郎、お前はまた大黒屋の寮へ行つた事があるまい、庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、それならば己れが呼んで来る、萬燈は此處へあづけて行けば誰れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむと

あるに、吝嗇な奴め、其手間で早く行けと我が年下に叱られて、おつと来たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄天とはこれをや、あれあの飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして脊ひく、頭の形は才槌とて頭みちかく、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反齒の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黒きに感心なは目つき何處までもおどけて兩の頬に笑くぼの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはをかしく罪の無き子なり、貧なれや阿波ちいみの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の子供を、養ふ親も轆轤にすぎる身なり、五十軒によき得意場は持ちたりとも、内證の車は商賣もの、外なれば詮なく、十三になれば片腕と一昨年より並木の活版所へも通ひしが、懶惰ものなれば十日の辛防つゝかず、一月と同じ職も無くて霜月より春へかけては突羽根の内職、夏は検査場の氷屋が手傳ひして、呼聲をかしく客を引くに上手なれば、人には重寶がられぬ、去年は仁和賀の臺曳きに出でしより、友達いやしがりて萬年町の呼名今に残れども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎む者の無きも一徳なりし、田中屋は我が命の綱、親子が蒙る御恩すくなからず、日歩とかや

言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの金主様あだには思ふべしや、三公己れが町へ遊びに來いと呼ばれて厭とは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地處は龍華寺のもの、家主は長吉が親なれば、表むき彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつらし。正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれづれに忍ぶ戀路を小聲にうたへば、あれ油断がならぬと内儀さまに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まぢくなひの高聲に皆も來いと呼びつれて表へ駆け出す出合頭、正太は夕飯なせ喰へぬ、遊びに惹けて先刻にから呼ぶをも知らぬか、何方も又のちはど遊ばせて下され、これはお世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母が自らの迎ひに正太いやが言はれず、其まゝ連れて歸らるゝ、あとは俄かに淋しく、人数はさのみ變らねど彼の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわきもせねば戲言も三ちやんのやうではなけれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさをおれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸鬚の大きき、猫なで聲して人の死ぬをも構はず、大方終焉は金と情死なざるやら、それでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さ

りとは欲しや、廓内の大きい樓にも大分の貸附があるらう聞きましたと、大路に立ちて二三人の女房よその財産を数へぬ。

(五)

待つ身につらき夜半の置炬燵、それは戀ぞかし、吹風すしき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂に流して、身じまひの姿見、母親が手づからそけ髪つくるひて、我が子ながら美しくしきを立ちて見、居て見、頸筋が薄かつたと猶ぞいひける、單衣は水色友仙の涼しげに、白茶金らんの丸帯少し幅の狭いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。まだかまだかと扉の周圍を七たび廻り、欠伸の數も盡きて、拂ふとすれど名物の蚊に首筋額際した、か整され、三五郎弱りきる時、美登利立出で、いざと言ふに、此方は言葉もなく袖を捉へて駆け出せば、息がはづむ、胸が痛い、そんなに急ぐならば此方は知らぬ、お前一人でお出と怒られて、別れ別れの到着、筆やの店へ來し時は正太が夕飯の最中とおぼえし。あゝ面白くない、面白くない、彼の人が來なければ幻燈をはじめめるのも嫌、伯母さん此處の家に智慧の板は賣りませぬか、十六武藏でも何でもよい、手が閑で困ると美登利の淋しがれば、それよと即座に鉄を借りて女子づれ

は切抜きにかゝる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北廓全盛見わたせば、軒は提燈電気燈、いつも賑ふ五丁町と、諸聲をかしくはやし立つるに、記憶のよければ去年一昨年とさかのぼりて、手振手拍子ひとつも變る事なし、うかれ立たる十人あまりの騒ぎなれば何事と門に立ちて人垣をつくりし中より、三五郎は居るか、一寸來てくれ大急ぎだと、文次といふ元結よりの呼ぶに、何の用意もなくおいしよ、よし來たと身輕に敷居を飛びこゆる時、此二股野郎覺悟をしろ、横町の面よごしめ唯は置かぬ、誰れだと思ふ長吉だ生ふざけた真似をして後悔するなと頬骨一撃、あつと魂消て逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をたゞ殺せ、正太を引出してやつて仕舞へ、弱虫にげるな、團子屋の頼馬も唯は置かぬと潮のやうに湧かへる騒ぎ、筆屋の軒の掛提燈は苦もなくなたゞき落されて、釣らんぶ危険し店先の喧嘩なりませぬと女房が喚きも聞かばこそ、人數は大凡十四五人、ねぢ鉢巻に大萬燈ふりたて、當るがまゝの亂暴狼藉、土足に踏込む傍若無人、目ざす敵の正太が見えねば、何處へ隠した、何處へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はさすに置くものかと三五郎を取こめて撃つやら蹴るやら、美登利くやくしく止める人を掻きのけて、これお前がたは三

ちやんに何の咎がある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隠しもしない、正太さんは居ぬではないか、此處は私が遊び處、お前がたに指でもさしはせぬ、え、憎らしい長吉め、三ちやんを何故ぶつ、あれ又引倒した、意趣があらば私をおぶち、相手には私になる、伯母さん止めずに下されと身もだへして罵れば何を女郎め煩桁た、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが相應だと多人数のうしろより長吉、泥草履つかんで投つけければ、ねらひ違はず美登利が額際にもさき物した、か、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱留むる女房、さまを見ろ、此方には龍華寺の藤本がついて居るぞ、仕返しには何時でも来い、薄馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬけの意氣地なしめ、歸りには待伏せする、横町の間に氣をつけると三五郎を土間に投出せば、折から靴音たれやらが交番への注進今を知る、それと長吉聲をかくれれば丑松文次その餘の十餘人、方角をかへてばらくと逃足はやく、抜け裏の路次にかいびもあるべし、口惜しい口惜しい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なせ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ、唯死ぬものか、幽霊になつても取殺すぞ、覺えて居る長吉めと湯玉のやうな涙はらく、はては大聲にわつと泣き出す、

身内や痛からん筒袖の處々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの凄まじさに唯おどろと氣を吞まれし、筆やの女房走り寄りて抱き起し、背巾をなで砂を拂ひ、堪忍おし、堪忍おし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者はかり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れて居る、それでも怪我のないは仕合、此上は途中の待ぶせが危険い、幸ひの巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、此通りの仔細で御座ります故と筋をあらく、折からの巡査に語れば、職掌がらうざ送らんと手を取らるゝに、いえいえ送つて下さらずとも歸ります、一人で歸りますと小さく成るに、こりや恐い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなと微笑を含んで頭を撫でらるゝに彌々ちいみて、喧嘩をしたと言ふと父さんに叱られます、頭の家は大屋さんで御座りますからとて萎れるを賺して、さらば門口まで送つて遣る、叱らるゝやうの事は爲ぬわとて連れらるゝに四隣の人胸を撫で、遙に見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振放して一目散に逃げぬ。

(六)

めづらしい事、此炎天に雪が降りはせぬか、美登利が學校を厭がるはよくくの不

機嫌、朝飯がす、まずは後刻に鮎でも眺へやうか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見える、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免蒙れとありしに、いえ、姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけたのなれば、参らねば気が済まぬ、お賽銭下され行つて来ますと家を驅け出して、中田圃の稻荷に鰯口ならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて畦路づたひ歸り来る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正太はかけ寄りて袂を押へ、美登利さん昨夜は御免よと突然にあやまれば、何もお前に詫られる事は無い。それでも己れが憎まれて、己れが喧嘩の相手なもの、お祖母さんが呼びにさへ来なければ歸りはしない、そんなに無暗に三五郎をも打たしはしなかつたものを、今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己れは聞いてさへ口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふではないか、あの野郎亂暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍してお呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのではない、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんが湯に行くといふ、留守居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなかつたのだからねと、我罪のやうに平あやまりにあやまつて、痛みはせぬかと額際を見あげれば、

美登利につこり笑ひて何怪我をするほどではない、それだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけないよ、もし萬一お母さんが聞きでもすると私が叱られるから、親でさへ頭に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては踏まれたも同じだからとて、背ける顔のいとをしく、ほんとに堪忍しておくれ、みんな己れが悪い、だからあやまる、機嫌を直して呉れないか、お前に怒られると己れが困るものと話して、いつしか我家の裏近く来れば、寄らないか美登利さん、誰れも居はしない、お祖母さんも日がけを集めに出たらうし、己ればかりで淋しくてならない、いつか話した錦繪を見せるからお寄りな、種々のがあるからと袖を捉へて離れぬに、美登利は無言にうなづいて、佯びた折戸の庭口より入れば、廣からねども鉢ものをかしく並びて、軒につり忍艸、これは正太が午の日の買物と見えぬ、理由しらぬ人は小首やかたぶけん町内一の財産家といふに、家内は祖母と此子二人、萬の鍵に下腹冷えて留守は見渡しの總長屋、流石に錠前くたくもあらざりき、正太は先へあがりて風入りのよき處を見たて、此處へ来ぬかと團扇の氣あつかひ、十三の子供にはませ過ぎてをかし。古くより持つたへし錦繪かすく取出し、褒めらるゝを

嬉しく美登利さん昔の羽子板を見せやう、これは己れの母さんがお邸に奉公して居る頃いたいたのだとさ、をかしいではないか此大きい事、人の顔も今のは違ふね、あ、此母さんが生きて居ると宜いが、己れが三つの歳死んで、お父さんは在るけれど田舎の實家へ歸つて仕舞つたから今はお祖母さんばかりさ、お前は羨ましいねとそいふに親の事を言ひ出せば、それ繪がぬれる、男が泣くものではないと美登利に言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あたりを集めに廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何寒い位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、あ、一昨年から己れも日かげの集めに廻るさ、お祖母さんは年寄りだから其うちにも夜は危険だし、目が悪いから印形を捺したり何かに不自由だからね、今まで幾人も男を使つたけれど、老人に子供だから馬鹿にして思ふやうには動いて呉れぬとお祖母さんが言つて居たつけ、己れがもう少し大人に成ると質屋を出さして、昔の通りでなくとも田中屋の看板をかけるよと楽しみにして居るよ、他處の人はお祖母さんを吝たと言ふけれど、己れの爲に儉約して呉れるのだから氣の毒でならない、集金に行くうちでも通新町や何かに

随分可愛想なのが有るから、嗚お祖母さんを悪くいふだらう、それを考へると己れは涙がこぼれる、矢張り氣が弱いのだね、今朝も三公の家へ取りに行つたら、奴め身體が痛い癖に親父に知らずまいとして働いて居た、それを見たら己れは口が利けなかつた、男が泣くてえのは可笑しいではないか、だから横町の野蠻人に馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを耻かしさうな顔色、何心なく美登利と見合す目つきの可愛さ。お前の祭の姿は大層よく似合つて羨ましかつた、私も男だとあんな風がして見たい、誰れよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前こそ美くしいや、廊内の大卷さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れはどんなに肩身が廣からう、何處へゆくにも随従て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねえ美登利さん今度一處に寫眞を取らないか、己れは祭りの時の姿で、お前は透綾のあら縞で意氣な形をして、水道尻の加藤でうつつさう、龍華寺の奴が羨ましがるやうに、本當だせ彼奴は屹度怒るよ、眞青に成つて怒るよ、にえ肝だからね、赤くはならない、それとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は厭かえ、厭のやうな顔だものと恨めるもをかしく、變な顔にうつ

るとお前に嫌はれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。
 朝涼はいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩によ、私の寮へも遊びに
 お出でな、燈籠ながして、お魚追ひまじよ、池の橋が直つたれば恐い事は無いと言ひ
 捨てに立出づる美登利の姿、正太うれしげに見送つて美しくと思ひぬ。

(七)

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら學校は育英舎なり、去りし四月の末つ
 かた、櫻は散りて青葉のかけに藤の花見といふ頃、春季の大運動會とて水の谷の原に
 せし事ありしが、つな引、鞠なげ、縄とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れ
 し、其折の事とや、信如いかにしたるか平生の沈着に似ず、池のほとりの松が根につ
 まづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせ
 たる美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱を
 なしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉し
 さうに禮を言つたは可笑しいではないか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであ
 らう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど、取沙汰しける、信如元來かゝる事を

人の上にも聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべ
 きや、それよりは美登利といふ名を聞くことに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸
 の中もやくやして、何とも言はれぬ厭な氣持なり、さりながら事ごとに怒りつける譯
 にもゆかねば、成るだけは知らぬ體をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣
 り過ぎる心なれど、さし向ひて物などを問はれたる時の當惑さ、大方は知りませぬの
 一言にて済ませど、苦しき汗の身うちに流れて心ぼそき思ひなり、美登利はさる事も
 心にとまらねば、初めは藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、學校退けての歸りが
 けに、我れは一足はやくて道端に珍らしき花などを見つければ、おくれし信如を待合
 して、これ此様うつくしい花が咲いてあるに、枝が高く私には折れぬ、信さんは背
 が高ければお手が届きまじよ、後生折つて下されと一むれの中にては年長なるを見か
 けて頼めば、流石に信如袖ふり切りて行過ぎる事もならず、さりとして人の思はくいよ
 くつらければ、手近の枝を引寄せて好悪かまはず申譯ばかりに折りて、投つけるや
 うにすたくと行過ぎるを、さりとは愛敬の無き人と憫れし事もありしが、度かさな
 りての末にはおのづから故意の意地悪のやうに思はれて、人には然もなきに我れには

かりつらき仕打をみせ、物を問へば碌な返事した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしをすれば怒る、陰氣らしい氣のつまる、どうして宜いやら機嫌の取りやうも無い、あのやうなむづかしやは思ひのまゝに捻れて怒つて意地わるが爲たいならんに、友達と思はずは口を利くも入らぬ事と美登利少し疝にさはりて、用の無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひたりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中大川一つ横たはりて、舟も筏も此處には御法度、岸に添ふておもひおもひの道をおるさぬ。

祭りは昨日に過ぎて其あくる日より美登利の學校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く額の泥の洗ふても消えがたき耻辱を、身にしてみても口惜しければぞかし、表町とて横町とて同じ教場におし並べば朋輩に異りは無き筈を、をかしき分け隔てに常日頃意地を持ち、我れは女の、とても敵ひがたき弱味をば附目にして、まつりの夜の所爲はいかなる申怯ぞや、長吉のわからずやは誰れも知る亂暴の上なしなれど、信如の尻おし無くばあれほどに思ひ切りて表町をば荒らし得じ、人前をば物識らしく温順につくりて、陰に廻りて機關の糸を引きしは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせ

よ、學は出来るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬものを、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無し、龍華寺はどれほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短小さま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意氣氣に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお人と遣手衆の言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黒やに大巻の居すば彼の樓は間とかや、さればお店の旦那とても父さん母さん我が身をも粗器には遊ばさず、常々大切がりて床の間にお据ゑなされし瀬戸物の大黒様をば、我れいつぞや座敷の中にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並びし花瓶を仆し、散々に破損をさせしに、旦那次の間御酒めし上りながら、美登利お轉婆が過ぎると言はれしばかり小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りではあるまじと、女衆達にあとくまで羨まれしも畢竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に敗けを取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいちめられんは心外と、これより學校へ通ふ事おもしろからず、我々まゝの本姓あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書籍も十露盤も入らぬ

物にして、中よき友と埒も無く遊びぬ。

(八)

走れ飛ばせの夕に引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬がぶり、彼女が別れに名残の一打、いたさ身にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにたぐの笑ひ顔、坂本へ出で、は用心し給へ千住がへりの青物車にお足元あぶなし、三島様の角までは氣違ひ街道、御顔のしまり何れも緩みて、はいかりながら御鼻の下ながくと見えさせたまへば、そんなじよ其處らに夫れ大した御男子様とて、分厘の價値も無しと、辻に立ちて御慮外を申すもありけり、楊家の娘君寵をうけてと長恨歌を引出すまでもなく、娘の子は何處にも貴重がるる、頃なれど、此あたりの裏屋より赫奕姫の生る、事その例多し、築地の某屋に今は根を移して御前さま方の御相手、踊りに妙を得し雪といふ美形、唯今のお座敷にてお米のなります木はと至極あどけなき事は申すとも、もとは此町の巻帯蕨にて花がるたの内職せしものなり、評判は其頃に高く去るもの日々に疎ければ、名物二つかけを消して二度目の花は紺屋の乙娘、今千束町に新つた屋の御神燈ほのめかして

小吉と呼ぶる、公園の尤物も根生ひは同じ此處の土なりし、あけくれの噂にも御出世といふは女に限りて、男は塵塚さかす黒斑の尾の、ありて用なき物とも見ゆべし、此界限に若い衆と呼ぶる、町並の息子、生意氣ざかりの十七八より五人組七人組、腰に尺八の伊達はなけれど、何とやら殿めしき名の親分が手下につきて、揃ひの手ぬぐひ長提燈、賽ころ振る事おぼえぬうちは素見の格子先に思ひ切つての串戯も言ひがたしとや、眞面目につとむる我が家業は盡のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば突かけ下駄に七五三の着物、何屋の店の新妓を見たか、金杉の糸屋が娘に似てもう一倍鼻がひくいと、頭腦の中を此様な事にこしらへて、一軒ごとの格子に烟草の無理どりと改名して、大門際に喧嘩かひと出るもありけり、見よや女子の勢力と言はぬばかり、春秋しらの五丁町の賑ひ、送りの提燈いま流行らねど、茶屋が廻女の雪駄のおとに響き通へる歌舞音曲、うかれうかれて入込む人の何を目當と言問は、赤えり猪熊に襦袢の裾ながく、につと笑ふ口元目もと、何處が美いとも申しがたけれど華魁衆とて此處にての敬ひ、立はなれては知るによしなし、かゝる中にて朝夕を過ごせば、衣の白

地の紅に染む事無理ならず、美登利の眼の中に男といふ者さつても怖からず恐ろしからず女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はねば、過ぎし故郷を立出の當時泣いて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく、お職を通す姉が身の、愛の辛いの数も知らねば、まぢ人戀ふる鼠なき格子の咒文、別れの背に手加減の秘密まで、唯おもしろく聞なされて、廓ことばを町にいふまでさりとら恥かしからず思へるも哀なり、年はやう／＼數への十四、人形抱いて頬すりする心は御華族のお姫様とて變りなけれど、修身の講義、家政學のいくたても學びしは學校にてばかり、誠あけくれ耳に入りしは好いた好かぬの客の風説、仕着せ積み夜具茶屋への行わたり、派手は美事に、かなはぬは見すばらしく、人事我事分別をいふはまた早し、幼心に目の前の花のみはしるく、持まへの負けじ氣象は勝手に馳せ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、寝ばれ道、朝がへりの殿がた一順すみて朝寝の町も門の箒目青海波をるがき、打水よきほどに濟みし表町の通りを見渡せば、来るは来るは、萬年町 山伏町、新谷町あたりを埒にして、一能一術これも藝人の名はのがれぬ、よか／＼佻や輕業師、人形つかひ大神樂、住吉をどりに角兵衛獅子、おもひ

おもひの扮粧して、縮緬透綾の伊達もあれば、薩摩がすりの洗ひ着に黒縹子の幅狭帯、よき女もあり男もあり、五人七人十人一組の大たむろもあれば、一人淋しき瘦せ老爺の破れ三味線か、へて行くもあり、六つ五つなる女の子に赤襷させて、あれは紀の國をどらするも見ゆ、お顧客は廓内に居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし、彼處に入る身の生涯やめられぬ得分ありと知られて、来るも来るも此邊の町に細かき貫ひを心に留めず、裾に海松のいかゞはしき乞食さへ門には立たず行過ぎるぞかし、容貌よき女太夫の笠にかくれぬ床しの頬を見せながら、喉自慢、腕自慢、あれ彼の聲を此町には聞かせぬが憎しと筆やの女房舌うちして言へば、店先に腰をかけて往來を眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髪の毛を黄楊の髪櫛にちやつと掻きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで来ませうとて、はた／＼驅けよつて袂にすがり、投げ入れし一品を誰れにも笑つて告げざりしが好みの明烏さらりと唄はせて、又御最負の嬌音これたやすくは買ひがたし、あれが子供の所業かと寄集りし人舌を巻いて太夫よりは美登利の顔を眺めぬ、伊達には通るほどの藝人を此處にせき止めて、三味線の音、笛の音、太鼓の音、うたはせて舞はせて人の爲ぬ事して見たいと折ふし正太に呷いて

聞かせれば、驚いて呆れて己らは嫌だ。

(九)

如是我聞、佛説阿彌陀經、聲は松風に和して心のちりも吹拂はるべき御寺様の庫裏より生魚あぶる烟なびきて、卵塔場に嬰兒の襁褓はしたるなど、お宗旨によりて構ひなき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そいろに腥く覺ゆるぞかし、龍華寺の大和尚身代と共に肥え太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何なる賞め言葉を参らせたらばよかるべき、櫻色にもあらず、緋桃の花でもなし、刺り立てたる頭より顔より首筋にいたるまで、銅色の照りに一點のにごりも無く、白髪もまじる太き眉をあげて心まかせに大笑ひなさるゝ時は、本堂の如來さま驚きて臺座より轉び落ち給はんかと危ぶまるゝやうなり、御新造はいまだ四十の上を幾らも越さで、色白に髪の毛薄く、丸髻も小さく結びて見苦しからぬまでの人がら、参詣人へも愛想よく門前の花屋が口悪婢も兎角の陰口を言はぬを見れば、着ふるしの浴衣、總菜のお残りなどおのづからの御恩も蒙るなるべし、もとは檀家の一人なりしが早くに良人を失ひて寄る邊なき身の暫時こゝにお針やとひ同様、口さへ濡らさせて下さらばと

人には本のはりやう
にほはるはうやう

て洗ひ濯ぎよりはじめてお茶ごしらへは素よりの事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尚さま經濟より割出しての御ふびんかゝり、年は二十から違ふて見ともなき事は女も心得ながら、行き處なき身なれば結句よき死場所と人目を恥ぢぬやうになりけり、苦々しき事なれども女の心だて悪からねば檀家の者もさのみは咎めず、總領の花といふを懷孕し頃、檀家の中にも世話好きの名ある坂本の油屋の隠居さま媒人といふも異な物なれど勧めたて、表向きのものにしける、信如も此人の腹より生れて男女二人の同胞、一人は如法の變屈ものにて一日部屋の中にまちくと陰氣らしき生れなれど、姉のお花は皮薄の二重腮可愛らしく出来たる子なれば、美人といふにはあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人にして捨て、置くは惜しい物の中に加へぬ、さりとお寺の娘に左り褌、お釋迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚られて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子の裡に此娘を据ゑて愛敬を賣らすれば、秤りの目は兎に角勘定しらすの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかげ絶えたる事なし、いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用のあれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳面くるやら經よむ

やら斯くては身からだのついき難がたしと夕暮ゆふぐれの縁先えんさきに花はなむしろを敷しかせ、片肌かたはだぬぎに團扇うちあしづかひしながら大盃おほさかづきに泡盛あわもりをなみくくと注つがせて、さかなは好物かうぶつの蒲焼かはやきを表町おもてまちのむさし屋やへあらい處ところをとの眺あつらへ、承うけりてゆく使つかひ番ばんは信如しんじよの役やくなるに、其厭そのいやなること骨ほねにしみて、路みちを歩あるくにも上うへを見みし事ことなく、筋向すぢむかふの筆ふでやに子供こどもづれの聲こゑを聞きけば我が事ことを誹そしらるゝかと情なさけなく、素知そぢらぬ顔かほに鰻屋うなぎやの門かどを過すぎては四邊よつたりに人目ひとめの隙すきをうかいひ、立戻たちもどつて駈かけ入いる時の心地こころち、我身わがみ限かぎつて腥なまきものは食たべまじと思おもひぬ。父親ちちおや和尙わしやうは何處どこまでもさばけたる人ひとにて、少しは慾深よくかの名なにたてども人の風説ふうせきに耳みみをかたふけるやうな小膽せうたんにては無く、手の暇ひまあらば熊手くまての内職ないしやくもして見みやうといふ氣き風ふうなれば、霜月しもつきの酉とりには論ろんなく門前もんぜんの明地あきちに簪かんざしの店みせを開ひらき、御新造ごしんぞうに手拭てぬぐいかぶらせて延喜えんぎの宜いいのをと呼よばせる趣向しゆかう、はじめは恥はぢかしき事ことに思おもひけれど、軒のきならび素人しらうとの手業てわざにて莫大もくだの儲たくらけと聞きくに、此雜沓このざつたふの中なかといひ誰たれも思おもひ寄よらぬ事ことなれば日暮ひぐれより目は目めにも立たつまじと思案しあんして、晝間ひるまは花屋はなやの女房にようぼうに手傳てつたはせ、夜よに入りては自身みづかちおり立たちて呼よつたつるに、慾よくなれやいつしか恥はぢかしさも失うせて、思おもはず聲高こゑたかに負まけまじよ負まけまじよと跡あとを追おふやうになりぬ、人波ひとなみにもまれて買人かひても眼まなこの眩くらみし折をりなれば、現在げんざい

後世ごせねがひに一昨日さつひ來きたりし門前もんぜんも忘わすれて、簪かんざし三本さんぼん七十五錢しちじゅうごせんと懸直かけねすれば、五本ごぼんついたを三錢さんせんならばと直切なほつて行ゆく、世よはぬば玉たまの關せきの儲たくらは此こほかにも有あるべし、信如しんじよは斯かかる事ことともいかに心こころぐるしく、よし檀家だんかの耳みみには入いらずとも近邊きんぺんの人々ひとびとが思おもはく、子供こども仲間なつかまの噂うわさにも龍華寺りゆうけじでは簪かんざしの店みせを出だして、信のぶさんが母かさんの狂氣きやうき面めんして賣うつて居ゐたなど、言いはれもするやと恥はぢかしく、其様そのさまな事ことは止とめたが宜よう御座ござりませうと止とめし事こともありしが、大和尚だいしやう大笑おほはらひに笑わらひすて、黙だまつて居ゐろ、黙だまつて居ゐろ、貴様きさまなどが知しらぬ事ことだわとて丸々まるまる相手あひてにしては呉くれず、朝念佛あさねんぶつに夕勘定ゆふかんぢやう、そろばん手てにしてにこゝと遊あそばさるゝ顔かほつきは我親わがおやながら淺あましくして、何故なぜその頭かぶをまるめ給たまひしぞと恨うらめしくもなりぬ。

もとより一腹いぼ一對つうの中に育そだちて他人たにん交ませすの穩おだかなる家いの内うちなれば、さして此兒このこを陰氣いんきものに仕立したてあげる種たねは無なけれど、性來せいらいおとなしき上に我が言いふ事ことの用もちひられねば兎角とかくに物もののおもしろからず、父ちちが仕業しわざも母ははの所作しよさくも姉あねの教育しやういくも、悉皆しつがいあやまりのやうに思おもはるれと言いふて聞きかれぬものぞと諦あきらめればうら悲かなしきやうに情なさけなく、友朋ともほう輩はいは變屈へんくつ者の意地いぢわると目めざせども、自おのら沈しづみ居ゐる心こころの底そこの弱よわき事こと、我が陰口かげぐちを露つゆばかり

もいふ者ありと聞けば、立出で、喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にとち籠つて人に面合はされぬ臆病至極の身なりけるを、學校にての出来ぶりといひ身分がらの卑しからぬにつけても然る弱虫とは知る者なく、龍華寺の藤本は生煮えの餅のやうに眞があつて氣になる奴と憎がるものも有りけらし。

(十)

祭りの夜は田町の姉のもとへ使ひを吩咐られて、更くるまで我家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、翌日になりて丑松文次その外の口よりこれくであつたと傳へらるゝに、今更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を假りられしばかりつくゞ迷惑に思はれて、我が爲したる事ならねど人々への氣の毒を身一つに脊負たるやうの思ひありき、長吉も少しは我が遣りそこねを恥かしく思ふかして、信如に逢はゞ小言や聞かんと其三四日は姿も見せず、やゝ餘熱のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いて呉んな、誰れもお前正太が明巢とは知るまいではないか、何も女郎の一疋位相手にして三五郎を擲りたい事もなかつたけれど、萬燈を振込んで見りやあ唯も歸れな

い、ほんの附景氣に詰らない事をしてのけた、そりやあ己れが何處までも悪いさ、お前の命令を聞かなかつたは悪からうけれど、今怒られては形なした、お前といふ後だてがあるので己らあ大船に乗つたやうだに、見すてられちまつては困るだらうぢやないか、嫌だといつても此組の大將で居てくんねえ、左様どちばかりは組まないからとて面目なさゝうに詫られて見ればそれでも私は厭だとも言ひがたく、仕方が無い遣る處までやるさ、弱い者いちめは此方の恥になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に末社がついたら其時のこと、決して此方から手出しをしてはならないと留めて、さのみは長吉をも叱り飛ばさねど再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られて其二三日は立居も苦しく、夕ぐれ毎に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなど見知りの臺屋に咎められしほどなりしが、父親はお辭宜の鐵として目上の人に頭をあげた事なく廊内の旦那は言はずとももの事、大屋様地主様いづれの御無理も御尤と受ける質なれば、長吉と喧嘩してこれくの亂暴に逢ひましたと訴へればとて、それは何うも仕方が無い大屋さんの息子さんではないか、此方

に理が有らうが先方が悪からうが喧嘩の相手に成るといふ事は無い、詫びて来い詫びて来い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必定なれば、三五郎は口惜しさを噛みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場所の癒ると共に其うらめしさも何時しか忘れて、頭の家赤ん坊が守りをして二銭が駄賃をうれしがり、ねん／＼よ、おころりよ、と脊負ひあるくさま、年はと問へば生意氣ざかりの十六にも成りながら其づう體を取かしげにもなく、表町へもの／＼と出かけるに、いつも美登利と正太が騷りものになつて、お前は性根を何處へ置いて来たとからかはれながらも遊びの仲間外れざりき。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、ついで秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにて七十五輛と數へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に亂るれば横堀に鞠なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゝる哀れの音を傳へるやうになれば、四季絶間なき日暮里の火の光りもあれが人を焼く烟かとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味

の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寐の床にと何ならぬ一ふしあはれも深く、此時節より通ひ初むるは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみじみと實のあるお方のよし、遊女あがりのさる人が申しさ、此ほどの事か／＼もくたくだしや大音寺前にて珍らしき事は盲目按摩の二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不自由なる身を恨みて水の谷の池に入水したるを新らしい事と傳へる位なもの、八百屋の吉五郎に大工の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに此一件であげられまじたと、顔の真中へ指をさして、何の仔細なく取立て、噂をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の三五人手を引つれて開いた開いた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と静かにて、廓に通ふ車の音のみ何時に變らず勇ましく聞えぬ。

秋雨しと／＼と降るかと思へばさつと音して運び来るやうなる淋しき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は背のほどより表の戸をたて、中に集まりしは例の美登利に正太郎、その外には小さき子供の二三人寄りて細螺はじきの幼げな事して遊ぶほどに、美登利ふと耳を立て、あれ誰れか買物に来たのではないか溝板を踏む足音がするといへば、おや左様か、己いらは些とも聞かなかつたと正太もちうち

うたこかいの手を止めて、誰れか仲間が来たのではないかと嬉しがるに、門なる人の此店の前まで来りける足音の聞えしばかりそれよりはふつと絶えて、音も沙汰もなし。

(十一)

正太は潜りを明けて、ばあと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぼつくと行く後影誰れだ誰れだ、おいお這入よと聲をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず駆け出さんとせしが、あゝ彼奴だと一言、振かへつて、美登利さん呼んだつても来はしないよ、一件だもの、と自分の頭を丸めて見せぬ。信さんかえ、と受けて、嫌な坊主たら無い、屹度筆か何か買ひに来たのだけれど私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地悪の、根性まがりの、ひねつこびれの、吃りの、齒かけの、嫌な奴め、這入つて来たら散々と窘めてやるものを、歸つたは惜しい事をした、とれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて顔を出せば軒の雨だれ前髪に落ちて、おゝ氣味が悪いと首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼくと歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも見送るに、美登利さん何うしたの、と正太

は怪しがりて背中をつゝさぬ。

何うもしない、と氣の無い返事をして、上へあがつて細螺を数へながら、本當に嫌な小僧とつては無い、表向きに威張つた喧嘩は出来もしないで、温順しさうな顔ばかりして、根性がぐすぐして居るのだもの憎らしからうではないか、家の母さんが言ふて居たつけ、がらくして居る者は心が良いのだと、それだからぐすぐして居る信さん何かは心が悪いに相違ない、ねえ正太さん左様であらう、と口を極めて信如の事を悪く言へば、それでも龍華寺はまだ物が解つて居るよ、長吉と來たら彼れははやと、生意氣に大人の口を真似れば、お廢しよ正太さん、子供の癖にませたやうでかしい、お前はよつほど剽輕ものだね、とて美登利は正太の頬をつゝいて、其眞面目がほはと笑ひこけるに、己らだつても最少し經てば大人になるのだ、蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、お祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、巻煙草を吸つて、穿く物は何か宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚裏にして緋珍の鼻緒といふのを穿くよ、似合ふだらうかと言へば、美登利はぐすぐ笑ひながら、背の低い人が角袖外套に雪駄ばき、まあ何んなにか可笑

しからう、目薬の瓶が歩くやうであらうと誹すに、馬鹿を言つて居らあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、此様な小ぼけでは居ないと威張るに、それではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠があれ御覽、と指をさすに、筆やの女房を始めとして座にある者みな笑ひころげぬ。

正太は一人眞面目に成りて、例の目の玉ぐるぐるとさせながら、美登利さんは戯言にして居るのだね、誰れだつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故をかしからう、奇麗な嫁さんを貰つて連れて歩くやうに成るのだがなあ、己らは何でも奇麗のが好きだから、煎餅やお福のやうな痘痘づらや、薪やお出額のやうなが若し来やうなら、直さま追出して家へは入れて遣らないや、己らは痘痕と疥癬つかきは大嫌ひと力を入れるに、主人の女は吹出して、それでも正さん能く私が店へ来て下さるの、伯母さんの痘痕は見えぬかえと笑ふに、それでもお前は年寄りなもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りは何うでも宜いとあるに、それは大失敗だねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、それよりも、それよ

りもずんと好いはお前の隣に坐つてお出なさるのなれど、正太さんはまあ誰にしやうと極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、まあ何れをえ、と問はれて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好いものかと釣りらんぶの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と鬨星をさゝれて、そんな事を知るものか、何だ其様な事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたゝきながら、廻れ、水車を小音に唱ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、さあもう一度はじめからと、これは顔をも赤らめたりぬ。

(十二)

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事は濟めども言は、近道の土手々前に、假初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣しほらしう見えて、縁先に巻きたる藤のさまもなつかしう、中からすの障子のうちには今様の按察の後室が珠敷をつまぐつて、冠つ切りの若紫も立出づるやと思はるゝ、その一構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出来たれば、寸時も早う重

ねさせたき親心、御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つて呉れまいか、定めて花も待つて居やうほどに、と母親よりの吩咐を、何も厭とも言切られぬ温順しさに、唯はいくくと小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木齒の下駄ひたくと、信如は雨傘さしかざして出でぬ。

お齒ぐる溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒やの前まで来し時、さつと吹く風大黒傘の上を攫みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬと力足を踏こたふる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のするすと抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくりぬに、常々仕馴れぬお坊さまの、これは如何な事、心ばかりは急れども、何としても巧くはする事のならぬ口惜しさ、ぢれて、ぢれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、すんくと裂きて紙紮をよるに、意地わるの嵐またもや落し来て、立かけし傘のころくと轉がり出づるを、いまくしい奴めと腹立たしげにいひて、取留めんと手を伸ばすに、膝へ載せて置きし

小包み意氣地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。
見るに氣の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の抽斗から友仙縮緬の切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で、縁先の洋傘さすより早く、庭石の上を傳ふて急ぎ足に來りぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、どのやうの大事にでも遇ひしやうに、胸の動悸の早くうつを、人の見るかと背後の見られて、恐るゝ門の傍へ寄れば、信如もふつと振り返りて、これも無言の腋を流るゝ冷汗、跣足になりて逃げ出したき思ひな

平生の美登利ならば信如が難儀の體を指さして、あれゝあの意氣地なしと笑ふて笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいまゝの悪まれ口、よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとして私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちゃんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎々々

と長吉つらに言はせるのもお前の指圖、女郎でも宜いではないか、塵一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥のお世話には能うならぬほどに、餘計な女郎呼はり置いて貰ひましょ、言ふ事があらば陰のくすくすならで此處でお言ひなされ、お相手には何時でもなつて見せます、さあ何とで御座んす、と袂を捉へて捲くしかくる勢ひ、さこそは當り難うもあるべきを、物いはず格子のかけに小隠れて、さりとて立去るでもなしに唯うちくと胸とらるかすは常の美登利のさまにては無かりき。

(十三)

此處は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに爲しなれども、生憎の雨、生憎の風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙紮を燃る心地、憂き事さまくに何うも堪へられぬ思ひのありしに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、願ねども其人と思ふに、わなくと慄へて顔の色も變るべく、後向きになりて猶も鼻緒に心を盡すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても穿けるやうには成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、え、不器用なあんな手つきして何うなるものぞ、紙紮は婆々燃、糞しべなんぞ前盞に抱かせたとて長もちのする事ではない、それく羽織の裾が地について泥になるは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置けば好いと一々鈍かしう齒がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、此裂でおすげなされと呼かくる事もせず、これも立盡して降雨袖に詫しきを、厭ひもあへず小隠れて覗ひしが、さりととも知らぬ母の親はるかに聲を懸けて、火のしの火が熾りましたぞえ、此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出ての悪戯は成りませぬ、又此間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行きますと大きく言ひて、其聲信如に聞えしを耻かしく、胸はわくくと上氣して、何うでも明けられぬ門の際にさりとも見過しがたき難儀をさまざまの思案盡して、格子の間より手に持つ裂れを物いはず投げ出せば、見ぬやうに見て知らず顔を信如のつくるに、え、例の通りの心根と遣る瀬なき思ひを眼に鍾めて、少し涙の恨み顔、何を憎んで其やうに無情をぶりは見せらるゝ、言ひたい事は此方にあるを、餘りな人とこみ上ぐるほど思ひに迫れど、母親の呼聲しばくなるを詫しく、詮方なきに一足二足え、何ぞいの未練くさい、思

はく耻かしと身をかへして、かたくと飛石を傳ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅入り友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ぼひたる、そゝろに床しき思ひはあれども、手に取あぐる事もせず、空しう眺めて憂き思ひあり。我が不器用をあきらめて、羽織の紐の長きをはづし、結びつけにくく〜と見とむなき間に合せをして、これならばと踏試みるに、歩きにくき事言ふばかりなく、此下駄で田町まで行く事かと今さら難儀は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横に二足ばかり此門をはなるにも、友仙の紅葉眼に残りて、捨て、過ぐるにしのび難く心残りして見返れば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿は何だ、見つともないなと不意に聲を懸くる者あり。

驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廊内よりの歸りと覺しく、浴衣を重ねし唐棧の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして、黒八の襟のかゝつた新らしい半天、印の傘をさしかざし高足駄の爪皮も今朝よりとはしる漆の色、きはくしう見えて誇らしげなり。

僕は鼻緒を切つて仕舞つて何う爲やうかと思つて居る、本當に弱つて居るのだ、と

信如の意氣地なき事を言へば、左様だらうお前に鼻緒の立ッこは無い、好いや己れの下駄を穿いて行きねえ、此鼻緒は大丈夫だよといふに、それでもお前が困るだらう。何己れは馴れたものだ、斯うやつて斯うすると言ひながら急遽しう七分三分に尻端折て、其様な結びつけなんぞより是れが爽快だと下駄を脱ぐに、お前跳足になるのかそれでは氣の毒だと信如困り切るに、好いよ、己れは馴れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔かいから跳足で石ころ道は歩けない、さあ此れを穿いてお出、と揃へて出す親切さ、人には疫病神のやうに厭はれながらも毛虫眉毛を動かして優しき詞のもれ出づるぞをかきしり信さんの下駄は己れが提げて行かう、臺處へ抛り込んで置いたら仔細はあるまい、さあ穿き替へてそれをお出しと世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げてそれなら信さん行つてお出、後刻に學校で逢はうせの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家の方へと行別れるに思ひの留まる紅入の友仙は可憐しき姿を空しく格子門の外にと止めぬ。

(十四)

此年三の酉までありて中一日はつぶれしかと前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさま

じく、此處をかこつげに検査場の門より亂れ入る若人達の勢ひとは、天柱だけ地
 維かくるかと思はる、笑ひ聲のどよめき、仲之町の通りは俄に方角の變りしやうに思
 はれて、角町京町處々のはね橋より、さつさ押せ〜と猪牙が、つた言葉に人波を
 分くる群もあり、河岸の小店の百嚮りより、腰にうづ高き大籠の樓上まで、絃歌の聲
 のさまざまに沸き来るやうな面白さは大方の人おもひ出で、忘れぬものに思すもある
 べし、正太は此日日がけの集めを休ませ貰ひて、三五郎が大頭の店を見舞ふやら、團
 子屋の肴高が愛想氣のない汁粉やを音づれて、何うだ儲けがあるかえと言へば、正太
 んお前好い處へ来た、己れが儲この種なしに成つてもう今からは何を賣らう、直様煮
 かけては置いたれど半途お客は斷れない、何うしやうな、と相談を懸けられて、智慧
 無しの奴め大鍋の周邊にそれッ位無駄がついて居るではないか、それへ湯を廻して砂
 糖さへ甘くすれば十人前や二十人は浮いて来やう、何處でもみんな左様するのだお前
 の店ばかりではない、何此騒ぎの中で良否を言ふ者があらうか、お賣りお賣りと言ひ
 ながら先に立つて砂糖の壺を引寄すれば、隻眼の母親おどろいた顔をして、お前さん
 は本當に商人に出来て居なさる、恐ろしい智慧者だと賞めるに、何だ此様な事が智慧

者なものか、今横町の潮吹きで船が足りないッて斯う遣つたを見て来たので己れ
 の發明では無い、と言ひ捨て、お前は知らないか美登利さんの居る處を、己れは今
 朝から探して居るけれど何處へ行つたか筆やへも来ないと言ふ、廓内だらうかなと問
 へば、む、美登利さんは今の先己れの家の前を通つて揚屋町の刎橋から這入つて行
 つた、本當に正さん大變だせ、今日はね、髪を斯ういふ風にこんな島田に結つてと、
 變てこな手つきして、奇麗だね彼の娘はと鼻を拭つ、言へば、大卷さんより猶美いや、
 だけれど彼の子も華魁に成るのでは可哀さうだと下を向いて正太の答ふるに、華魁いぢ
 やあないか華魁になれば、己れは來年から際物屋に成つてお金をこしらへるがね、そ
 れを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、洒落くさい事を言つて居らあ爾すれば
 お前は屹度振られるよ。何故なん、何故でも振られる譯があるのだもの、と顔を少し
 染めて笑ひながら、それぢやあ己れも一廻りして来やうや、又後に来るよと拾臺辭し
 て門に出で、十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しきふるへ聲に此頃此處の
 流行ぶしを言つて、今では勤めが身にしみてと口の内に繰返し、例の雪駄の音高く浮
 きたつ人の中に交りて小さき身體は忽ちに隠れつ。

揉まれて出でし廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら来るを見れば、まがひもなき大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結ひ綿のやうに絞りはなしふさ〜とかけて、鼈甲のさし込、總つきの花かんざしひらめかし、何時よりは極彩色のたい京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ例の如くは抱きつきもせで打語視るに、彼方は正太さんかと走り寄り、お妻どんお前買物が有ればもう此處でお別れにしましよ、私は此人と一處に歸ります、左様ならとて頭を下げるに、あれ美しいちゃんの現金な、もうお送りは入りませぬとかえ、そんなら私は京町で買物しましよ、とちよ〜走り長屋の細路へ駆け込むに、正太はじめ美登利の袖を引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝かえ昨日かえ何故はやく見せては呉れなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打萎れて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭で仕様が無い、とさし俯きて往來を耻ぢぬ。

(十五)

憂く恥かしく、つゝましき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、島田の番の

なつかしさに振かへり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと猜られて、正太さん私は自宅へ歸るよと言ふに、何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大巻さんと喧嘩でもしたのではないか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顔の赤むばかり、連立ちて閉子屋の前を過ぎるに頓馬は店より聲をかけてお中が宜しう御座いますと仰山の言葉聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太さん一處に來ては嫌だよと、置去りに一人足を早めぬ。

お酉さまは諸共にと言ひしを道引遠へて我が家の方へと美登利の急ぐに、お前一處には來て呉れないのか、何故其方へ歸つて仕舞ふ、あんまりだせと例の如く甘へてかゝるを振切るやうに物言はず行けば、何の故とも知らねども正太は呆れて追ひすがり、袖を留めては怪しがるに、美登利顔のみ打赤めて、何でも無い、と言ふ聲理由あり。

寮の門をばくぐり入るに正太かねても遊びに來馴れてさのみ遠慮の家にもあらねば、跡より續いて縁先からそつと上るを、母親見るより、お、正太さん宜く來て下さつた、今朝から美登利の機嫌が悪くてみんなあぐねて困つて居ます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしくしこまりて加減が悪いのですかと眞面目に問ふを、

いゝえ、と母親怪しき笑顔を少し経ては怒りませう、いつでも極りの我まゝ様、
 嗚お友達とも喧嘩しませうな、ほんに遣切れぬ娘さまではあるとて見かへるに、美登
 利はいつか小座敷に蒲團極巻持出で、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥し
 て物をも言はず。

正太は恐るゝ枕もとへ寄つて、美登利さん何うしたの病氣なのか心持が悪いのか
 全體何うしたの、とさのみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを悩ますに、美登利は
 更に答へも無く押ゆる袖にしのび音の涙、まだ結びこめぬ前髪の毛の濡れて見ゆるを
 譯ありとは著けれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出でず唯ひたすらに困り入る
 ばかり、全體何が何うしたのだらう、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何が
 其様なに腹が立つの、と覗き込んで途方にくるれば、美登利は眼を拭ふて正太さん私
 は怒つて居るのではありません。

それなら何うしてと問はれれば愛き事さまん、是れは何うでも話しのほかの包まし
 さなれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言はずしておのづと頬の赤うなり、さして
 何とは言はれねども次第々々に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし

思ひをまうけて物の恥かし言ふばかりなく、成る事ならば薄暗き部屋のうちに誰れ
 とて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人氣まゝの朝夕を経たや、さらば此
 様の愛き事ありとも人目つゝましからずば斯く迄物は思ふまじ、何時までも何時まで
 も人形と紙雛様とを相手にして飯事許りして居たらば嗚かし嬉しき事ならんを、え、
 厭々、大人に成るは厭な事、何故此やうに年をば取る、もう七月十月、一年も以前へ還
 りたいにと老人じみた考へをして、正太の此處にあるをも思はれず、物いひかければ
 悉く蹴ちらして、歸つてお呉れ正太さん、後生だから歸つてお呉れ、お前が居ると
 私は死んで仕舞ふであらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと眼がまはる、誰
 れも私と私の處へ來ては厭なれば、お前も何卒歸つてと例に似合ぬ愛想づかし、正太
 は何故とも得を解きがたく、煙のうちにあるやうにてお前は何うしても變てこたよ、
 其様な事を言ふ筈は無いに、をかしい人だねと、是れはいさゝか口惜しき思ひに、落
 ついて言ひながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とてそれに心を置くべき歸つてお呉
 れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れ、ばもうお友達でも何でも無い、厭な正
 太さんだと憎らしげに言はれて、それならば歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、

風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

(十六)

眞一文字に駆けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば賣仕舞ふて、腹掛のかくしへ若干金をばちやらつかせ、弟妹引つれつ、好きな物をば何でも買への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、やあ正さん今お前をば探して居たのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上げやうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、黙つて居る生意氣は吐くなと何時になく荒い事を言つて、それどころでは無いとて鬱ぐに、何だ何だ喧嘩かと喰べかけの餡ぱんを懷中に捻ぢ込んで相手は誰れた、龍華寺か長吉か、何處で始まつた廓内か鳥居前か、お祭りの時とは違ふせ、不意でさへ無くば負けはしない、己れが承知だ先棒は振らあ、正さん膽つ玉をしつかりして懸りねえ、と競ひかゝるに、えゝ氣の早い奴め、喧嘩では無い、とて流石に言ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込んだから己れは一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければもう是れから喧嘩の起りッこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなるものと言ふに、何

故どうして片腕がなくなるのだ。お前知らずか己れもたつた今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居たを聞いたのだが、信さんはもう近々何處かの坊さん學校へ這入るのだとさ、衣を着て仕舞へば手が出ねえや、からつきり彼んな袖のへらくした、恐ろしい長い物を捲り上げるのだからね、左様なれば來年から横町も表も残らずお前の手下だよと煽すに、廢して呉れ二錢貰ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人仲間に有つたとて些とも嬉しい事は無い、附きたい方へ何方へでも附きねえ、己れは人は頼まない眞の腕ッこで一度龍華寺と遣りたかつたに、他處へ行かれては仕方が無い、藤本は來年學校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其様に早く成つたらう、仕様の無い野郎だと舌打しながら、それは少しも心に留まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥しきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、火ともし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市めちやめちやに此處も彼處も怪しき事なりき。

美登利は彼日を始めにして生れかはりしやうの身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今に

と空約束はして無く、さじもに中よしなりけれど正太とさへに親します、いつも耻かしげに顔のみ赧めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難くなりける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむもあれども母親一人は、笑みては、今にお俵の本性は現はれまする、これは中休みと理由ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しくなりて正太が美音も聞く事稀に、唯夜なくの弓張提燈、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影をいろ寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽では聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出づる風説をも美登利は絶えて聞かざりき、有りし意地をば其まゝに封じ込めて、此處しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしうのみありけるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外より差入れ置きし者のありけり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆるとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪さしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くとともにしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。

かれ尾花

(一)もと

秋もやうく更にける哉、あしたの風に雁鳴て東籬の菊や、薫り初ぬ、折々に時雨がちして梢の色ふかく成程奥山の鹿の起ふし思ひやられ、おく霜まよふ有明の月に打らむ砧のおとしのぶなど、物の哀はげにと覺えて大方の袖も只ならぬを、物思ふ宿の草葉の露よいか計置まさるらんかし、先の官人何かしとかや獄を分つ事のいと明らか成しかば今干公など呼ばれたる人の末にはかなく落はふれたる娘一人あり、駒馬高蓋はかけても及ばず、門は只狭みに狭みて引入るゝ車の轍ふつに跡もなく成ぬ、親族だつ人無きにし有らねど袖に涙のかゝる時、み返る人少なき世成けり、さしも茂かる入重むぐらにさわらぬは来る年月ぞかし、をしませず愛でぬ花紅葉いくそ度咲散て、ことしは甘斗にや、漸う世の中のさまざま人の心も見しり行まゝに淺ましうも悲しうも愛くもつらくも思ひみだるゝふしいと多かるに、哀うき身かなかく有々てのはては、如何ならんとすべきにか、人にはあなづられ世には輕らしめられてあやしういたづら

なる者に成終るなんさて我身一つはよし、あれこそは誰れが子なれなど指さんに
 無き御名をさへに汚さんことのいと口惜しうも有業かな、いでやとても角ても人笑ひ
 ならんからに望ましからぬ世にまじりてこれよりまさる恥かしめをも見ましよりは、
 ひたすらに世をも背きさまをもかへて人知らぬ谷ぶところなどにもかき籠らば、此世
 後のよいと心安かるべきをと思ひたつ折々多かれど、猶たちがたきほどし有て流石に
 清くも捨あへず、心より外に有ふるなんいかい、は袖のひるまも有るべき時し分かねど、
 此夕暮よ猶ものおもひのやり所もなく誰れのかたみと無きものから大空をのみなが
 められぬ、いとけなきより住馴たればこそ有れけ恐ろしき迄荒にたる所のさまなり、月
 もれとてのすさびならねどまばらに成し板びさしは只みる不破の關屋覺えて生ひのほ
 りたる蔦かづらの時知りがほに色に出たる夜の錦は誰れか見るべき、半ばやれたる
 簀の子のはしに軒の竹の根を分てこゝにも千歳のふしを見せたる中々に心やましか
 し、いにしへは黒木赤木のませ結ひて七草の前裁つくりたる跡しも尾花計いや茂りに
 しげりて寄せ返る波のいとしろうみえしも、此頃大方うら枯れて力なげに打まねく風
 の姿も弱げに成りぬ、入日ぞさし殘る草村に有か無かに鳴くこほろぎの聲も今幾日計

の命にかと覺えて目にも耳にも淋しさのえ堪がたう、時々と息しのびやかにもらして
 打なげくけはひ、野河の岸に咲たる秋萩のはなの下枝ぬれたらん心地してあはれにな
 つかしきすがたしたる、すぎたる人の垣間見んに折らではえこそとまどはれぬめり、
 年頃仕へなれたるものも大方おのがじ、行散たる中にめとの娘のつやと呼なん故母
 の遺言破らじとて有しにかはらすまめやかに仕ふるを天が下の頼もし人にしてともか
 うも月日過すなる、かゝる折には先呼出て今昔しのしのばしきふし互ひに残さすかた
 りかはしてなぐさむとしなければと物思ひ分ちあふぞ例成けり、形もみにくからず心は
 せある若人ながら詞つきさわやかに少し肥過たるぞ品おくれたる心地ぞする、主なる
 人はとしの程よりいと若うちいさやかにやせくと細やかにて成帝がめでけん飛燕が
 おもかげ覺ゆるや、さるはいと弱き人にてなやみ勝なればなめり、何故のみだれぞし
 のぶそめたる衣のなへばみたるに帯は何にかあらん織紋のよしありげなるが色はいと
 うはび返りたるをながしろに引結びつ、物によりそひて時々にさしいらへして
 詞多くもあらず物思ひ静まりたるを少しさしのぞきて、我君さのみな思し屈したまひ
 ぞ、世は猶めぐるものにこそ侍れ、數ならねどもおのれもさふらふ、まして神佛のお

はしまさんになどかはかく埋もれてのみやははてさせ給はん、今世にかひあるさまにしなし奉りてこゝらあなづり聞えたる人に頭を下げさせずはえやみ侍らじ、御親族や何やしらすかたき様なる御方々に羨せん程の御身がらになさせ給へとのみ朝夕に打ねんじ侍る、すべて御心つよう覺せよといふ、其心の嬉しさにこそかひなき世にもながらふるなれ、さはいへどいつかは世に成出らるべき身かは、親しかるべき人にも返りみられ難き幸なさにて誰れかは蓬生の奥まで尋ねん物ぞ、もしはいさゝか幸ひありて思ひの外の世にあふとも御覽せさす人もあらずかし、多くもあらぬ親族などにくまれなんそれもうし、只此のむぐら生こそ無き御かげのといまり給ふとおもへばいとなつかしきに、こゝを捨て立離れなんは玉の臺も更にくのぞましからずよ、うつせみの世の事はしもあてなるも賤しきも富めるもまづしきも終にはことなる事あらじを外にもとむるなんいと淺き事ぞとよ、我身はかくなん思ふとて少し打笑めば、あなゆゝしや法師がいふらん悟りとかいふことやめ給へ、さるはかく草深くのみおはしますにいと世の中遠く成てさるひが事も給ふなれ、きら／＼しき都大路のさま行かふ人の衣の色のうるはしきをみるにも哀我君にもかゝる粧ひさせ奉らばや、何

計の人の娘ならん妻ならんなどあらぬ人をもうらやみ侍る、昨日もさなん御上がさいつ頃御むねをつよくなやませ給ひし折いみじき願立て侍りし何がしの観音に歸りまうしせばやとて出立道にて逢にし人よ、例のふと目とまりてつく／＼と見送り侍りしにそが跡に立て行なんつやが腹がわりの妹にて先に片田舎なる知り人がりもらはれていにしそれにて侍り、思ひがけずふと立といまりて一こと二ことかはしてしが、其うらはしかりし人は主など様にいひさして多くは聞もはてざりしが、富農などが娘にて四位計の人のもとに昨日今日とつぎて来しにや侍りけん、聞とやがて佛の御前にも只この事をのみなん申つる、いかで四位程の人の御妻になさせ給はらましかばつやが生る世の限り何事をもえ願はじとこそ頼み奉れといひさして空打仰ぎ、あなみじかゝる秋の日哉月なき頃のいとわびしきに今ともし火奉らんとてやをらたつ……

第五回

海水渺々山色清絶一洞の天泉よく數十の浴舎をうるをし、四時浴客の絶間なき豆州海濱の少村熱海といへど夏も猶暑さはしらぬ温泉場、林屋といふ一旅宿の上等座敷を借受し男女三たりの浴客は彼の伊豆屋の若夫婦に其の召使ひのお糸也、山静かに水清き土地の季候やお綾が身にも適しけん、半月計逗留する程に流石に少しよしといへど、我からつくる心の病ひはいつ愈る可しとも見えざりけり、假寐の宿の心安さは奥座しきに茶番狂言の催し有とて誘ふ人あれば下座敷に俳優の手踊りありと招かるあり、長き日の徒然にうみて粗茶一ツと隣席の客を招待して東京より取寄せたる風月堂の菓子をすゝむれば、其返禮としてかなたよりは晩酌のさかなにと鮮らけき魚鳥送りこすといふ清く淡き交際に、お綾はしらす徳藏はいと興あることに思ひて都に歸る心もせず、或は山に登り或は海に遊びしらすく日を送りけり、此一行が隣れる部屋は神田猿樂町邊に住む代言人とかにてこれも一對の若夫婦也、夫は三十前後と覺

しく才子めきたる男にしてつまは廿三四にもや近き頃まで新道に御神燈かゝやかせし名残はみえてあか抜のせし美人也、友戀しき旅の宿りに同じ女子同志とお綾が風呂場のゆき返り散歩の道すがらなどいつとはなく物言ひそめて、お綾も又其人からの打さばけて賤しげのなきがなつかしくて又二もなく交わりかわしぬ、此日徳藏は魚見といふ所の景みんとて早くより立いでたれば、お綾は例の限りなき物思にとざゝれて溜息がちに居る折から廊下の口ほそめに明けて、ヲヤ今日はお一人ですかと聲をかけて入来るは其の隣室の妻君也、ヲヤよくいらしつて下さいましたねへ、今日は朝早くから魚見といふ所をみると申て出ましたので誠に淋しくつて成ませんでした、あなたも今日はお一人のやうでいらつしやいますねへ、ハイ私も、富士屋に泊つてお出遊はする華族さまの御せんが話しも少し有から遊びながらくるやうにとお使ひがムいましてので、今しがた出て参りましたですからもう淋しくつて、押かけにお邪魔様にあがりました、綾、どういたして願つたり叶つたり、お邪魔處ではムいませぬ、糸や鳥渡お茶をとみかえれば、今あなたお構ひだてをなすつちやあいけません、お客あつかいはなしつこですよといへば、こなたはほゝるみながら、綾、イーエ私も今いれてもらを

うと思つてゐる所ですもの、お茶位いあがつて下さつてもまさか身上のさわりにも成
 ませんよとたわむるゝに △「ぢやあいたいさましよう、私は又御身代限りでも遊ばす
 といけないとぞんじましてヲホ、私大層なお土産を持て出ましたよ、只今ね餘ま
 り退屈でムいますから粗末なかすてらをこしらへました、どうでお口には合ひますま
 いがと携へきし菓子入れをそこへ差おけば綾それはマア有がたうぞんじます、しかし
 あなたのお手製を頂戴しては勿體ないじやあムいせんか △「ヲヤどういたしましよ
 う矢ッ張けいして遠ざけるとかじやあムいせんか 綾大層おむづかしい事を仰いま
 すねへ △「何ね珍分漢は良人のこわ色ですよヲホ、譯もなきこと打興じるも若きも
 の、ならないなるべし 綾「ホンニ旦那様はどうか代言を遊ばすそうに伺ひましたがもう
 お久しくでムいますか △「イーエー昨年からでムいますですからまた本當の書生同や
 うでしかたがムいせん綾「イエどう遊ばして、それではあなたのおかた付に成ました
 のも △「ハイつい此間でムいますけれど、あの人ゆへには随分長い間苦勞をいたしま
 した 綾「夫はどういふ譯でいらつしやいますの、御不都合で御遊ばさないとならお
 話し遊ばせな △「お馴染も薄いあなたにこんなこと申てはお恥かしうムいすがねへ

お心安だてにマアお聞遊ばして頂戴よ 綾「ハイ伺ひましよう」かくて其女房の語るを
 きけば、賤しげなくみえしも道理さまで貧しきうまれにもあらず、幕府世盛りの頃は
 去る諸侯の用達町人にて時めきし者なりしを、此女の四ツ五ツといふ年に父が病に死
 したるより家運漸く衰へ初て、一兩年の程にはや家藏を人手に渡すに至りたり、母は
 それを苦にやみて、これも同じく黄泉の客と成しは此女が十二の秋也とか、それより
 後見にとて入込し腹黒き伯父の爲に遂に花柳の巷に身を投ずるには至りぬと語り來り
 し時、廊下に足音ひかせて來るは旅宿のはしため也、へいお郵便が参りました。

第六回

下女が取次ぐ狀のうらに東京本町よりとあるは正しく母が手跡也と見ゆるに、來
 客の前とてあわたしくは封も切らず其の儘そこへさし置てかの女房に打向ひ 綾「ソ
 ンはマアおふしあわせが續きましたのですねへ、さぞ御心配のことですムいましてしや
 う △「心配の苦勞のと申ても話しをする人はムいせんし、一人で泣いて計り居りまし
 た綾「さうでしやうとも、それからどう遊ばしました △「だん／＼お話しが長く成ますが
 ねへと再び詞を續くるに、今の夫は亡父の舊友たる某藩士の一男にてむかし一席の茶

話の折に父と父とが許婚の約を結びしも、物替り星移りて後は其行衛をも定かにしるよしなく成たれど、此女が心に寸間片時も忘るゝ折なく、身はうき草のうきし家業をなすに至りてもくれ竹のふし正しくみさほの色かへじと思ふに、或時は抱へぬしの義理をかせに挑む人あり或時は伯父の威をかりて迫る人あり、薄き氷をふむ心地して悲しき月日を送りしほどに、四年以前の春也けり某し法律學校の講師が洋行をなすとかにて其の送別會を新橋の某屋に開きし折招かれし席にて計らずも今の良人には廻り逢たり、その折は未だ學生なりしもやがて其校を卒業をなし代言試験首尾よく及第なしてより、一言の約をかたく守りて年月替らざりし志しをめでたくへて遂に廢業せしめて妻にするには至れる也とか、語り終ればお綾は少し前にすゝみ、綾どうもお感心でいらつしやいますねへ、しかし其の送別會とやらでお名のり合ひ遊ばした時はさぞお嬉しうムいましたらう、伺つてさへ涙がこぼれるやうでムいすもの、△只マア夢のやうでムいましたよ、嬉しいの悲しいのといふ考へは出やいたしませんで、綾さうでしやうねへ、道理こそ大層おむつましいと存じましたが、さういふお間からでは御尤ですわ、△アライやでございすよ、こんなお耻かしいお話しをいたしてさぞお笑ひ遊

ばしましやう、綾笑ふ所じやございません、どこへお出しに成たつて少しもおはち遊す事のないお美しくいお話ですもの、△そんなにおほめ遊ばしては却て面目なく成ますよ、随分私らの中間には操なんぞといふものはどんなものだ位いで居る人も有ますけれど、それはお話しのうちじやあムいせんが、學文をなすつて者の道理を御存じの上ツ方のお嬢様にも御不都合のおうわさなんぞ立てられる方のお有遊ばすのは私にはどうもわかりませんよ、忠臣は二君に仕へず貞女は兩夫にまみえずとか教への本にも有るさうですもの、操がたてられないほどなら私は死んでしまをうとまでに存じました、行衛のしれない夫に義理だてなんぞつまらないやうでは御座いますけれど、心にとはれた時申譯が御座いせんは、さらでも思ひしづむお綾が心をそれと知らねば悟りもせず、思ふがまゝを物語るに、且つ耻ぢ且つは羨みてかしら重げにさしうつぶくお綾が姿をそれと見て、△貴嬢又御氣分がお悪ひのではムいせんか、とんだ長坐をいたしましたねへ、綾イーエどこもわるくはないのですから、どうぞお綾つくり、お蔭様で今日は氣が晴々といはしました、も少しお遊下さいましな、△イーエ又伺ひましやう、あなたもちつとお出かけ遊ばせ、左様なら」と隣室の妻の歸りしのお綾

はしばし忙然たりしが、彼れは路傍の柳にして靡くをならひの身にてすら直ぐなるみさをはしるものを、たとい如何なる事譯ありて、連理の枝いまだ交さず比翼の床いまだ温かならず、みさを、破りしといふならねど、妻と呼ばれ夫といふ其名計は偽りならず、契りし詞に背きたる其の罪とがの恐ろしきに、折も折とて母の書信はもしやと心のさわがれて封じめとくく讀下せば、例の事とて細ましく病氣の事などとひたる末に果たせるかな來月中旬には雄二も歸國すべくしかくくの報知をもしるされたり、今年年早かりしならば嬉しく樂しき報なるべきを、今の我が身に見る時は死期を促がす重罪の宣告文にもさも似たり、律もて責むる形の罪は又まぬがる、折も有べし、我からせむる心のつみは消ゆるの期なき物思ひ、とさせしふすまを押しひらき入來る人の足おとに驚かされて見かえれば、良人の今しも歸れる也、綾ヲヤお歸りでムいましたか、大層お早うムいましたねへ、綾アンマリ早くもないだろう、おまへ氣分でもわるいか、顔色がよくないやうだせ、綾イーエもうでもムいませぬ、綾どこからか郵便がきたのかへと問はれて、見せざらんも異なるものなり、ハイ本町から遣はしましたと、母が手紙を良人にしめせば、綾ア、お母さんからか、東京ではお替りもなか

ろうねといひながら巻かへして、雄二君が歸つて來るそうだが、さぞかし嬉しいだろうなあ、笑をふくむ夫の詞、包むくと思ひしに悟られしかと氣は轉動わざとこなたはそしらぬ顔、綾何も別に嬉しくもムいませぬよ、綾ナニお前じやあない、本町のおふたりがさ。

第七回

悟つたやうな悟らぬやうな良人が心を知り兼ねて、覺束なげに打まもるお綾がさまを知らず顔に徳三は傍にさしよつて、徳三時にお綾追々時候も涼しく成るし、商法の都合にもわしが家に居ないでは不都合だろうと思ふから、一先づ歸京しやうかと實は考へているのだが、お前は少し残る氣か、それとも一所に歸ろうと思ふか何地とも心まかせにするが、いさ「例のやさしき詞をさげばさすがつらくも言ひかねて、綾貴君がお歸り遊ばすなら私もどうぞおつれ下さいまし、それにもう冷かさが立ちますと少しづつ寒さの支度にもかゝらなけりあ成ませんから、綾アハ、豪氣と世帯じみたなあ、其の分じやあ立派な世話女房だせと打笑われて、綾イヤでムいますよとわづかにいへど、雄二が口より此詞をさかばそもいか計り嬉しからん、綾ア、東京ではお替りもなか

の惜しいこともないから、明日直にたつことにしやうじやないか。綾、ハイ私はいつでもよろしうムいますと相談一決したりしかば、宿の主に其よしを告て同宿中に交りかわせし誰かれを呼集ひて、恰かも東京より來たりたる某といふ落語家をさへ招きて興をたすけ、其の夜は飲みつうたひつ明かして、あくる朝に主従三人車をつらねて宿を出づれば、又御出をお待ち申上ますと異句同音にいふを聞くも、又と再び此土地に遊ぶべき身の命かわと心のうちにお綾は思へば、山の姿も海の色もこれや名残の心地して遅き車も何となく羊のあゆみ、ひまの駒行ともなしにいつしかと小田原迄つきしかばこゝにひる餉をしたゝめて、上りの汽車にのり込たり、はや一瞬の其ひまに幾多の田島と幾流の川とを経て新橋停車場にはつきたりけり、其の夜横山町の伊豆屋が家には親子夫婦一室に相坐して、留守中の出來事を語り、滞在中の景色を語り、洋々たる和氣を以て夜もすがら語り明しぬ、かくて後もお綾は時折舅姑が婚姻の期を促がす毎に未だ病ひ全くいえねば今しばらくと計請ひ、徳藏も敢ていそがんともなさざれば、然らば心任かせにとて其のまゝにはなし置けども、徳藏お綾が表むきのむつまじさは人も羨む程也けり、しかのみならず徳藏が勤勉なる、朝は店の者と共に起き、夜は一人

後れていね、お綾が慈悲なる、二人の下婢に伴ひて勝手元のまかないに手を下すなど、主人かくの如くなれば、みせの番頭小僧まで怠るといふもの一人もあらず、あの分では伊豆屋が藏には金のうなる聲を聞くだろうと仇口にさへいはるゝ程に繁盛したり、此夜もお綾は勝手元の見廻り終りたる後ち父と母との住居なる奥の六疊に入來れば、父は一心に隨筆などの類ひか古びし書物を讀居たり、母は餘念もなくしつけ芋をうむ也ければ、綾お母さんマア少しお休み遊ばしませんか、一日何かとお骨折でうますのに夜分也と少し御緩くりなさいました、それはまた私が教へていたやうにうみましやう、母何ネこんなことはしてもしないでもいゝものだけれど、遊んでいるのが勿躰ないからねへ、しかしもう今夜はお休みにしましやうよと、うみ残しの麻町嚙に取かたづくるうちに、父も書物をそこへたゝみて、父「お綾、徳藏は店かへ、綾、ハイ番頭と何か話して居られますが、モッやがて參られまじやうといひつゝ、うしろにさし寄て、綾お父さんお肩を少しおもませなすつて下さいました、父さうかな、それでは氣の毒だがちツと遣つて貰はうか、然しこの頃はお前が毎晩療治をしてくれるので、さぞ按摩のちやいがこぼしているだらう、綾、マア大層上手でムいますからお花主

を一軒取つて仕舞ひましたのですねオホ、父「イヤどうして中々素人ではないよ、かくたはぶる、其所へ大層おにぎやかですなへと、障子を開きて手に一ひらの新聞を携へて入来るは徳三也、世「ヲヤ誰だと思つたら徳かへ、今丁度お茶にでもしようといふ所さ、徳、そりやあ私も結構です、イヤ大層上手そうな按摩が始まりましたね、上下で二百文かな、父「そう悪口をいひなさんな、お前がもんでくれるより餘ッ程上手だよ、徳「ホイこれはしたり、世「何か新聞に珍らしい事が有かね、徳「めづらしい事も別にムいませんねへ、お定まりの小説二つに社説が少々、内閣の更迭談がざつと半面、其半面は藝娼妓のいきな雑報、夫から跡は廣告です、世「さういつてしまつてはおしまひだね、徳「珍らしいといや三河屋の雄二さんはあしたが着ださうですなへ。

第八回

却説く雄二は海外の漫遊漸く終へて幾多の經見と智識とを携へて、知友知己の人々が歡喜の聲に迎へられ、至親至愛なる我日本の港横濱へとは上陸したりき、同所に少時休息せし後小梅なる三河屋が寮へとは歸りつきぬるに、佐平夫婦は只無限の悦びにまぎれていふべきことはあるもいわす、同じことのみくり返すさまは拙きふでは書き

取り難くて省きぬ、二日三日は夢のやうに過ぎたり、いでや新らたにもうけし親戚に對面もなすべく、舊來別懇の知友に外國商況の物語もなすべく爲め一つの盛宴を張らんといふに、其の會席は何處か宜からん、中村井生村も廣淋くや星ヶ岡の茶寮は高尚に過ぎなん、さらば秋といふ世をこのみは春めき渡る歸り咲き櫻が岡の櫻雲盛こそ適當の場所ならめとてこゝに評議は一決したり、さても伊豆屋の徳藏はお綾の心もしるや知らずや、雄二が歸國をせし日より家に居る時は稀にして、大方三河屋に趣きて何くれと眞實やかに取まかないぬ、雄二も舊來の朋友にて心の置かる、人ならねば諸事萬端は徳藏に委ねて又二もなく頼み聞こえ、或時は宴會の日取りを談じ、招待の人数を定めるなどわけ隔てなくみえたりけり、此目出度話しを聞き其の悦びを思ふにつけ、先づ涙ぐまる、は徳藏がつまのお綾也、軒の松風のひらきにははれぬ迷ひのくもをかこち、やり水の流がれをみては行て歸らぬいにしへをしのび、ひるは日ねもす夜はよもすがら、雄二が妾夢にも現にもみえて愛着の心絶ゆるまなく、そもくお綾が最初の心は一度び伊豆屋が所望に應じ、父母が恩義のかどさへ立て、徳藏が妻とよばれたにせば、惜しからぬ命すみやかに捨て、ちかひに背かぬ心のまことを世になきのちにも

あらはさんと思ひ設ふけて嫁入りたれど、徳藏が心の廣やかにして仁心の深きと舅姑の氣だてやさしく誠の父母にもいやましていたわりくるゝがほだしに成て、捨る命をすてかねて昨日とくらし今日と過ぎて雄二が歸國を聞にはいたりぬ、伊豆屋がつまのお綾ならで三河屋の娘の綾子ならば、今日此頃はいか計り嬉しさ餘る時なるべきに、今の我身は引かへて明日の祝ひの其の席に良人と共に招ねかるゝも又一しほの憂苦をまして何なま中の耻かゝやかに雄二に面ての合はさるべき、あすともいわす今宵のうちにかねての覺悟は極めんと思ひ定めて又思へば、さしも慈愛の深かりし父と母とによそながら暇乞をもなさまほしく、又二ツには我れながら未練な心とあきらめてもあきらめ難き雄二が姿、盡ぬ名残をものごしなりと一ト目逢ひなば露いさゝか残るうらみは有るまじと、さすがに引かるゝうしろがみ愚癡なほどなほ哀也、夫らのことをしる由なき母は奥より立出てお綾の部屋をさしのぞき、ヲ、お綾こゝにいたかへ、先ツきからさがしていたよといわれてハツと心づき、綾ヲ御用でムいましたか、鳥渡お呼び下さいませば私がお居間へ参りますのに、母何ね用ではないのさ、今風呂がたつといふから其の前にあしたの支度の髪を結つてあげやうと思つて、綾さやうでムい

ましたか、それは有がたう、しかしねへ髪は昨日結ていたいたのでムいますからこれで結構でムいますよ、母つまらない事をいふものではないよ、人中へ出るんじやあないか、そんななりしていかれちやあ本町のおうちでも又うちの外聞も悪いやあね、サアこのまどしたか明るくつて丁度よさうだ、こゝへお出で、鏡臺はこゝの所がいゝやうだ、綾アラくせ直しは私がおし参ります、それじやあどうも恐入ますがおゆひ遊ばしていたいさましやうと、母が心を無にせじと向へばうさをます鏡うつる姿もやせみえて、取出す涙の玉くしげふたゝびゆはん髪ならずと神ならぬ身のしる元結び、ゆひめを切てとく櫛のつげもゑやらで此まゝにやがて消なん露の身の置間あだなる花かざし、派手なかざりは取すて、け高くつくる高島田、さすが器用の生質とてわづかのほどに結び終りぬ、母サア、立派なお嬢さんが出来上つた、一寸と御覽と合せ鏡さし出されて、とみかう見、綾どうも大層よく出来ましたこと、有がたう存じます、母鳥渡お待よ、たぼが少し、とかき直して、母どうも少し根があたりすぎたじやあないか、この次にはもうちつと下る加減にしようねへ、と何氣なくいふ母の詞、つねには心もとまらねど、あすを限りの我命ちそれともしらすで此次ぎの盥のかたちはこゝ

結つてと楽しみにさるゝ心ぐるしさ、返事の詞もいではこそ、涙みせじのまぎらばしにうつぶさながらちらばりし櫛を拭ひて鏡臺へ取納めなどする程に、母はしばしば打みやりて、母お前は矢ッ張高まげの方がよく似あふねへ、此間本町のお母さんも丸まげにしたらどうだろうとおいゝなすつたから、私はイーエもう一二年は是非嶋田にして置弁、よそえ連て出ました時お嬢さんですかつて人のいふのが嬉しくつて成ませんからと私はいつたのさ、つひ女の子を一人も持たないから娘をもうけたやうな心持がして、お前がきてからどんなに嬉しからう、ヲやお前は何をなくの、何か氣にでもさわつたかへ、嫁の機嫌をさかさまに姑にとらるゝ切なさつらさ、縁勿躰なことを仰しやいます、氣にさわる所の譯ではムいせんが、私のやうないたらぬものを誠の親も及ばぬやうにお可愛がり下さいますすが有がたくつてく嬉し涙がこぼれました、母ヲやいやだよ、としよりでは有まいし。

第九回

降み不降み定めなく時雨催ふす神無月も空めづらしき小春日和、上野の岡の櫻雲臺には今日なんかの片野雄二が歸國の宴を開くと覺しく、午後第三時といふ頃には隣々

たる腕車のひいきを森林中に聞いたりぬ、此日の來客は大むね商業社會の人多數を占めたりとわ見ゆれど、中に紳士あり學生あり洋装和装さまざまに其出で立ちは異なれど、皆これ雄二を至信至愛の人々ぞとは悦ぶこぼしげなる面もちにみえ渡りぬ、雄二は階段のもとに立て來賓に謝意をのべ敬禮を表して一々樓上に案内したり、此日雄二が服そうは黒きフロックコートに純白の襟かざりをなし、清楚雅々たる其の風采一見以て學識と經見二つながら備なわりたる好丈夫とはみ受けられぬ、多くの人に少し先立て入來る一雙の男女はかの伊豆屋の夫妻也、黒紋付の羽織に威儀をとゝのへ仙臺平のはかま折目正しく着なしたる徳藏が姿、雄二に比べておとるとにはあらねど松のかたへの高野楨いさゝか讓る所の無きにもあらず、それがうしろに引添て耻かわしげに入來るお綾が粧ひをいかにと見れば、黒縮緬の三枚着に紅葉の裾もよう白茶縮ちんの帯をむすびて、雨になやむ花のおもて風にもまるゝ柳のこし嬌々とせし其姿又美るはしさも一しほまさりぬ、三河屋夫婦はそれとみるより笑みかたまけ、公イヤ誰君かと思つたら徳さんでしたか、雄二も先刻からお待申て居ります、何卒廣間の方へお出なすつて下さい、と我智ながら叮嚀にあいさつすれば、徳藏は猶うやくしく

徳「今日はどうもお目出たう存じます、ことに天氣も打てつけの晴天で實に好都合ですな、私もモット早くから参上してお手傳ひする氣でしたけれど、出がけに來客が有りましたので大きに遅刻いたしました、父「イエどうしまして、今日は又何かと周旋方を御盡力願はなければならんから、今のうち少しおくつろぎなさい、徳「夫れじやあ一遍御様子を見ましてきまじやう、父「廣間の方が表むきのお客様のお席で東むきの座しきの奥の方が内々の席とは定めて置ました、マアどうぞ見て下さいと、三河屋は徳藏を導きてあなたの室へと出でさりぬ、お綾は母に何ごとか物語らんとする程にはや舞臺には松旭齋天一が西洋手品始まりしと覺しく、さゝめき合ふ聲の聞こゆるに、萬づはのちにゆるるときかかんまづ此方へといざなわれて、心ならずも廣間の方へとは趣くに、こゝはすでに美るはしく樂しき宴席に成居たり、洋々たる和氣は室内にみち悠々たる瑞雲は屋上をめぐり、一酒一肴悦びならざるもなく、或は三河屋夫婦が幸福を賀し、雄二が後來を祝するなど、此座に居るとい合す人は悲哀といふ事は世の中にあるものともしらず、只日の短き計をば無限の恨みと思ふなるべし、かくて雄二はかなたこなたよりさす杯に思はずも數杯を重ねて今は席にも堪へがたければ、其場を

しばし徳藏に任して其の身は下座敷に休息せんととある一間へ入來れば、我より先に一人の婦人床の掛ものを眺めいたり、折わろかりと心に思ひて引かへさんとする程に、思わす此方を振むくは計らざりき徳藏が妻のお綾ならんとわ、これはと驚く雄二よりお綾はバツとあからむ顔、思ひまうけし事ながら今更いふべき詞もなくさしうつむくを雄二はみて、ア、伊豆屋の御新造さんですか、餘まり大人にお成なんですつかりお見違ひ申ました、と何げなくいふ詞も綾子は針もてさゝるゝ如く、返事はなくてふりこぼす涙を雄二はあやしみて、雄「あなたどうかなさいましたか、御氣分でもわるうムいますかとさしよれば、綾「イエどこも悪いことはムいせんが、私は貴君に申譯がムいせん、といひもあへずよ、と計に泣伏したり、雄二も心に察しながら雄「何を仰つしやるかと思つたらそんなことを、しかしねへ貴嬢のお心は十分私もお推察申て居りますが、お互ひにいふ丈けほんのむだ事ですから伺ひも申もしますまい、只純然たる兄妹だと思ひなすつて下さい、そして及ばずながらどこまでもお力には成る積りですし、又おちからを仰ぐかもしれせんが、とに角清潔の御交際が願ひたいのです、私も歸國してあなたのお風説を世間で聞きますのに伊豆屋の妻君は眞の良室

といふのだらう、両親には孝行也良人には貞節也、あゝいふ人はめづらしいものだといふのを聞ませば、どんなに私も嬉しいかしれません、こんな事は私が申までは無く諳じてはいらつしやいませしやうけれど、出ては夫に従ふといふのが婦の本分です、貴嬢の良人と申すのは徳藏君の外にはない、よろしいか御了解が出来ましたか、よしやどういふ契約が成り立つていよふとも、それは公然といふものでは有ません、あなたも唯一徳藏君に従つて他を顧る心がなければ即ち眞の貞節の婦人です、今あなたのよいお風説を聞と供にいつまでも其のお心でお出で下さるやう、老婆心までに申し上げて置ますが、失禮は御免し下さい、幾どういたしましてお詞はよく伺つて呑込みました、サウいつて下されば私も大慶です、これはあなたにお話しをするのじや有ません、随分世間にはつまらない事に義理立をして二ツない命を古わらじ捨るやうに軽々しくする人もないともいへませんが、それこそ道理に外れた話です、先づ第一身體髪膚をゆづりうけた親になげきを懸させたり、又其の義理だてされた人も決してうれしくは思ひますまい、イヤこれは話に實がいつてあなたに異見でもするやうに成ましたな、もうそろそろ御歸館の方も有ましやうからと身を起せば、名残をしとも

いひかねて、千萬無量を只一句、それではもういらつしやいますか。

第十回

さしもうらゝかなりしひるの空には引かへて、陰雲朦朧として一天暗く、暗雨愁々として窓をうち壁間の蟋蟀聲幽かに残り庭前の落葉おとや絶て、其の夜更け行く伊豆屋が家、寂たり莫たる一室の内に、お綾はひとりいねもせずあたりをしばくうかがひて取出す手なれの硯箱、おとに立てじとする墨の薄きるにしをかみしめて、書きおく筆のつかのまも忘れぬ慈愛の吾がふた親、海といふとも猶あさく山にたとえて猶たかき御恩はかへさでさかさまにおなげきかくる不孝の罪、まして伊豆屋の御二方、嫁といへるは名のみにて御苦勞斗かけ参らせ、御見送りをもすべき身が先立ち申す申譯けことしかくくと打明けてかくもかゝれぬ事情を御推もじをと斗りにて、あらくかしくと書きとむ、筆のはこびも常よりはしぶりがちなる表てがき、御両親様参るあや、あやめも分ぬ涙のひまに、雄二どのと良人には詫まいらす詞もあらず、妻とわいへと妻ならずつれなくすす月日をもあくまでやさしきみ心さしは今死ぬる身のみにしみて七生までも忘れはせじ、又雄二どの、今日のお詞、約に背きし不貞をもとが

め給はぬ其の上に、猶身の上まで氣づかいてよそながらのおん意見、それ無にするには無きものから、有てうきよのはてもなき物思ひをばなさんより今宵と極はめし露のいのち、千言萬語のぶるとも名残りをしさの盡くべきかわ、盡きぬ思ひを只一ふで、あはれとも見る人なしに神な月おのれしぐれて散る紅葉哉、ゆるさせたまへとかきさして、さすがに覺悟はわろびれず、身のたしなみにとかねてより母がさづけし懐劍に今宵我みを切らんとは神ならぬ身の白こ袖、みなりを死後にくすさじとひざ引結はふ真紅のしごき、物こそいわね合す手に父と母との暇乞ひ、南無阿彌陀佛は口の内あわやとみえし折しもあれ、かねて様子やうかひけんふすま蹴開きかけ入る徳藏、お綾が手に持つ懐劍を物をもいはすもぎ取たり、綾あなたのお目にかゝれましては猶更生きては居られません、どうぞお慈悲にお見のがしを、徳ゆるさないにもゆるすにも、恩と義理との兩道をせまい心にわけ兼て捨た命は止やあしない、徳藏が女房お綾はとかたへの書置き取りより早く火鉢のうちに投げ入たり、只一べん烟となつて此世の中にない人が罪もとがめもありやあしない、といひつく奥に打向ひ、徳みなさん御安心下さいまし、雄二君もこちらへと聲をかくればいつのまにか舅姑を始めとして我

父母に雄二まで次の一ト間に居ならびたり、お綾は夢にゆめみし心地忙然として打まもれば、雄二は少し前にすゝみて、雄「今日櫻雲臺でのお詞といひ御様子はどうもあやしいので、それとなしに徳藏君に御忠告をした所が少し相談が有からして今夜ひそかに来てくれろといふ御相談で、實は先刻から御様子を見て居たのですが、最前もくれぐれ申た通りそんな思慮の浅い事をしちやあいけませんといふ傍より父母は、何か子細はしらないけれど先つき徳藏と雄二の話しをちらと立聞きした所がどうも心にかゝつて家には居られず、二人連れで出て来ました、全躰マアどういふ譯でと氣づかはしげにとひかければ、徳藏は押とめ、徳「過去は今更仕方が有りませんから夫はそれとして置まして、三河屋のおふたりにも雄二君にもをりいつてねがひが有りますがお聞きといけ下さいませしやうか、あやしき徳藏が詞のはし、父と母とはときかぬれど雄二は夫れとやゝ悟れば、雄「あらたまつて何事か存じませんが私し一身で叶ふことならなんなりと仰せ下さい、徳「早速御引受けて大慶です、外の事でもムいせんが、只つた一人の徳藏の妹をお貰ひなすつては下さいませんか、事の心をしらぬ人は目と目み合はす計り也、徳「こう斗りではお分りに成ますまいが、妻のお綾が死んでみれば又

どんな物か貫らせうと存じますに、妹の綾子が居りましては何かと不都合が有りますからどうぞお貰ひ下さい、三河屋の御両親もよもや御不承知は△いますまいな、あくまで通すおとこ氣を始めてさといと、父母も雄二が心ばかりかね打まもりてのみ居たりけり、雄二お詞は了承いたしました、不肖ながらも片野雄二たしかにお妹御は申うけます、此一言がひでりに雨しほれし坐敷もよみがへり、折から空は雲晴初てまでにさしいる月のかげ真如の光りをうつしけり。

抑も徳藏は其の始め綾子が姿を愛る餘り心をつくして貰ひ受けしも、其後ちつらつら心をとむれば子細有げの綾子が躰はやうこそあらめと何氣なく猶其の色を愛し香をなつかしむが如くしてこの月日を過せし程にいにし熱海の旅宿に於て雄二が歸國の報を得し時包むとすれどあらはるゝ其心根を知りたるより、且つはあわれみ且つ悔みて、折を待てる雄二が妻に送らんものとは思ひし也とか、かくて後伊豆屋三河屋が親密はいよく深く商業繁榮家運長久と取たて、いわんもことたるまじく、只飛鳥河のふち瀬ことなる恨みはなく砂ご長じていわほとなる喜びのみぞかさなりけるとかや。

棚なし小舟

あしがきの近き頃とか、行水の流れ清き江戸川のほとりに其原何某と呼ぶ若人あり、親などもいとくうせて、伯母成人のもとにやしなはれつゝ、このとしを重ね來つるに、其人もまたこそうせて子等のよに成にしかば、有し様にもあらずなまはしたなくわづらはしき事まじれるにわびてこゝには移り住ぬ、いとけなきより學びの道に志ふかゝりしかば、螢雪の光身にそはりて才の際もなみくならず、人ざまもいとめやすけれど、心なん今の世にはめづらかなるまでまめなる人にて、花柳のちまたなどは夢にもみし事あらねば、友などはさうくしがりて玉の盃何とかやあやしうひがものにいひなして、琴酒詩のまゝには大方なげうたれし成べし、かゝればみづからもやうく世の中せばう成て心うきこといと多かり、公に仕へまつりても輕らかならんは人わろく口をしく覺ゆるに、わたくしにこゝろさすことはたさわり勝にて、こゝもかしこも心ゆかぬことのみ重なれば、棚なし小舟波にたいよふさまにて浮たる世をすくすほどに、ともすれば若はの中もとめまほしき折々もあれど、さすがに大み

世の光りよそにしてえそむきあへず、いたづらに月日を明し暮しけり、春の花はたれこめたるまにとくうつろひはて、霞も隔てぬ月のかけをいと涼しとみるまに蚊遣の烟空に消で、吹かへす風に秋は來にけん衣のうら淋しくも成ぬ、廣からぬ庭のおもながら遣水の流れ清きもあり、もの深からねど木立も故なからず、さゝやかなる垣のもとに萩さちかうをみなへしなどのわづかに咲出たるもをかしきに、ものより手をさし出だしたる様にかいひけん初尾花のうす紅なるが打まねきたる、……しのこる花やかに、さすや夕日のかげ柴のうすに消て紅ひの色こき西の空やうくうすく成ぬとみれば、軒ばはいつか暮はてぬ、待えがほに吹わたる萩の上風を窓の簾にうけて巻あげつゝやをら打ながめて、中につひてはらわたをたつはと詩すんじたる、うるはしなどいふにはあらねど、人がらけ高う打静まりてもと思はしげなるしも心深げ也、十三日斗の月庭松の梢をはなれて今さしのぼる光りけさやかに中空高うすみのぼり、星の光りいとよれなる夜也、千里の外までくまなげなるかげをみるにもいとよおもふことぞ限りなき、面をだにみしらでうせけんたらちねのことぞ盡せず恨めしう口をしうおもふはさておきて、猶うたがはしき筋ひとつ年月とき難くて心ひとつにおもひなげく事あり

531 舟 小 し な 棚

けり、このうせにし母なん我が誠のともおほえず、またむげにいはいけなかりしほど伯母なる人のめのととのびやかにたたらひしことおさなき心地にもいとあやしと聞しかば今も猶忘れざりき、かのめのとだに世にあらましかばこと、ひぬべきよしもあらんを、いとうたて五つの罪のうちに孝なき斗おもきはなし、御有かをだにえしらで過すをいかにせん、今もなほ世におはしまさば今宵の月は何方に御覽せさせ給ふらん、さりともおのれがうへをばよも忘れ給はじ、こゝにかく戀聞ゆるを夢にもしらせ給はいかに嬉しがるべきなど、さまざまに打なげくほどに、夜いたう更ぬらんかし、草葉吹渡る秋風みにしみて露も涙もえといめあえず、かたぶき初たる月にむかひて猶思ひつゞくることいと多かりとぞ……

集 全 葉 一

隨
筆

森のした艸

今は昔し東の京に粹士とよばる、男子あり、こゝにかしこに艶福の名高かりしかば、友垣結ぶたれかれいたく羨み妬みて、いかでかれにはなあかさんはやとて、其頃芳原の里の何がし太夫とかや全盛の君にいとよく課じ合せて、かのおとこをいざなひ行きぬ、今宵こそはなどほくそゑみし居たるもしらすやありけん、引つけのむしろとかやにていたく酔してかの全盛の君に盃さすとしてうし取るやがて手もとしどろにそぎつれば、金糸銀糸をもて鳳凰孔雀を縫なしたる錦の打かけしとゝにぬれてその座いたう開けにけり、おこのやつよ、さらでもの水なるをと心しれるとちひそめき合ひ居しに、其夜はことにもてなされて有明の月にかねの音を恨み又來んよ半を契りてきぬぎぬの空いとほえありげ成しかば、計りし事はみなかひなく成ぬ、後にかの傾城をいたくなぢりしに、さればにこそ侍れ、み給ふごとかのひとは引つけのむしろにて酔のすさびにやしらす打かけの袖しとゝに酒をば打かけ給ひにき、我が身もくるはの全盛と呼ぶる、身さすがに名をばをしまれ侍り、あれみよ何がし屋の誰は打かけの事根

にもちて今宵の客をばつらうしたり、さもしき心よといはれんが口をしようてのし業に侍り、誠しからず覺さばこの後さらに伴ひ給へといふ、げにさる事もやあらむとて、一日二日経て又かの男とひ寄りて、いざ給へ、かしこにもいたく待らむをなどいざなひたつれば、かしら打ふりて、いな行かじ、こたびこそからき目見せらるべきなめれといひしとなん、あやしう其道の謀士成けん。

若尾逸平といふ人は、かひの國山梨の郡にかすかなる商人などにや有けん、其土地にも暮しわびて江戸にのぼりてなりはひの道もとめんとて出で立ぬ、八王子あたりにや有けん一夜宿りて、夜中過る頃ふと目覺ぬれば、次の間にて人二人斗ものがたる也、甲州といふこと耳に入て、猶よく聞けば、この頃横濱の沖に外國船多く來てこの國の物産をあがなひ行くといふ、水品などは殊に高價なるべければ、あすはかしこに趣きて人しらぬこそよけれ極めて安直に買しめ置ば一獲千金なるべしといふ、あながま壁に耳ありといふは、今一人なるべし、聞とやがて仕度とゝのへて、其夜はいもねず、あくるままだきに宿をおこして早だちにす、かの人々はよべ酒打のみなどせし

様成しが、まだ明るをもしらずやありけん、夢路をたどる最中成けり、仕合よしと打喜びて其日の中に甲府へつきぬ、勝手はかねてしりたり、其道の人々にときありき残りなくおのがかふべき約定に取定めぬ、かゝる折しも買はんといふ人は到りつきてさてみるに、塵斗も残らず若尾が物に成ぬといふ、唯驚きにおどろきたれど、猶買はでははてじの心にて、いかで我にも少しはゆづり給ひてんや、價の高かるはいとはじをといふ、おもひしことよと打笑まるゝを、さりげなきさまにて、さらば少しはゆづり参らせんとて、そが中三つが一つをゆづりて、其金もて山かたへはつぐのひたり、残る二つの水晶山いか斗の直にや成けん、それより家道朝日の、ぼるがごと興り行きて、甲府の本宅、横濱の店とも大方人のめをおどろかすめり、去年國會開設に際し山梨縣下多額納税議員として撰出せられにたり、聞ならく江戸に志ざして出で立しは卅歳あまりの時成しとか。

さきの千葉縣の令成し池田勝輝ぬしは萩園の門にて歌よむ人成けり、いたく案じいりたる時は大聲にうゝとうなるが常成りしが、さる頃大歌合のありし時、三番三組わが

師の敵手成しに、日夜たゞ案じにあんじて、例のいたうなりければ、妻成る人のかたはらに聞て、我せの君はいとくるし氣にもおはしますかな、和歌てふものはさる難儀のものにやと、ひしにさなりとこたえぬ、つま又女の子うむことこそ一の大事にてこれよりうへの難儀は侍らざる、くらべてみるにいづれぞとへば、何ごとのひかくぞや、それは内にあるものを出すのみぞ、これはあらぬものを出すのなりとて、猶大ごるにうなりけるとぞ。

535 艸 た し の 森

さる頃、小石川の稽古日に人々あつまりてかにかくとものがたらふほど、其座に入來たりしひとりの、いで君たちにもうけたまはらむといふ、何ごとぞといへば、されば也、今我が來し道のある家に照暗といへる苗字なんありつる、こは何とよむべきにや、てるやみといはんも少しをかしかるべくといふ、人々かしらかたぶけあへり、一人のひとの、夏子ぬしこそしり給ふらめ、願はくは判じ給へなど、例のこと更にの給ふもわびし、照暗といふ苗字はさらに聞つることもあらず、大方はやみをてらすてふ意にて何とかよむ作り字などならむかとまではおもひつれど、いまだ何ともいひ

出ざりしに、師の君それは郡名などよりいで、のよみごゑなるべしといふ、又いかなる所にさる家か侍りしといへば、水道端なる所のさる家の軒に立たる瓦斯燈にかきてありしといふに、我がむねもはじめで明らかに成ぬ、さればよといはんとせしに師の君まづ手打たまひて、それにてことよく分り侍り、そは人の苗字には侍らず、瓦斯の事なめり、道のともし火に常夜とかきたるとひとし、これはやみを照らすの意なりとていたく打笑ひたまふ。

たれの詠なりけん、幾度かおもひ定めてかはるらむたのむまじきは我心哉といふありしが、げにさることも有べきなめり、心の關はしかすがにするながら、外物に誘はるゝまゝにともすればあらぬ心などにもなるべきにや、おぼつかなきものよ。

わかき女の獨身にて世を過さんといふ。遠かれと風ある時の火。空ごとする人の契り。むつかしき病者の中頃目になちてよき。いのちは老たるも若きもおぼつかなし。

とし頃の友だちの人の妻になりて久しうあはざりつるにふとあひたる、昔しに露たがはざりいとうれし、大方はおとなしくしうなりてこと人の様になるものを、男にても友などいひつるからに妻もちてもかはらざるぞよき。ものへ行んとて心がまへせしよ、あやにくに雨降りてわびあへるに、曉おき出で、みれば、空名残なうはれたる。男にても女にても我がおもふ人の人にほめられたる。雪のふる日などものへ行くみちのほどのいと寒かりしに、家にうづみ火いとあかくしてまたれたる。老たる親よろこばしてくるゝ人も。いづれもくうれし。文まれ歌まれわがおもふまゝにつり出たる。みに覚えなければどうれしかるべし。

萬にほめらるゝはうれしきものから、さしむかひてかにかくといはれたるまばゆしかし、ほどに過たるごとほめらるゝも空ごとなめりとおもふに、その人にくゝ成ぬ、人あまたつとひたる折、其人ありともしるやあらずや、其中にて人もあがめよの覚えも高き人のたれがしこそ天りんといふものなれ、としもまた若きにか斗の人まだみしことあらずなどいはれたる、いか斗うれしからずや。

うるはしき衣ききし人のやぶれ車くるまにのりたる、何なんの心こころにかとあやし、ぬりもまだあたらしう、ほろのいなづま光ひかりりまばゆく、うしろかけもひざかけもなつかしき毛皮けがしして、引ひくおのこの衣きも何もなみにくからずなどあるに、きたなげなるいなか翁おきなのふるびたる手てぬぐひかぶりてのり居ゐる、いづれもつきくしからず。

悪筆あくひつ成りなりとてみづからすてたる人の、ふとかきたるものを其道そのみちの大家たいかなどいはる、人にほめられたるより、友ともなどもうらやましがりにかにかくといふ、まとゐのむしろなどにて書かく物ものある折をらまれて筆ふでとらせらるゝことなどふたゝび三みつたびかさなるまに、我われからとたのもしう成なりてまなび初はじめるに、はげみありてのわざなれば、めにたちて上達じやうたつする、筆心ふでこころのまゝになればおもしろくてなほつとむるうまざらば大家たいかにもなるべし、はじめ悪筆あくひつなりとて捨すてたるまゝなりせばいつかは人中ひとなかにてものかゝるゝ事ことぞ、ものはすつるにやぶれて、用もちゐるに成なるものぞとよ、身みいやしみてすてたらんにいつのよにかは成なりのぼらるべき、位くらゐは人ひとによりてあるものならず、久方ひさかたの天あめがした、あらがねの土つちのうへ、生いきとしいけるもの、つとめてならざることばあらし、いやしき

もよぎも、富めるもまづしきも、必竟は心からなるべしとなん。

小説のことに従事し始めて一年にも近くなりぬ、いまだよに出したるものもなく、我が心ゆくものもなし、親はらからなどの、なれば決断の心うとく、跡のみかへり見ればぞかく月日斗重ぬるなれ、名人上手と呼べる、人も初作より世にもてはやさるべきにはあるまじ、批難せられてこそそのあたひも定まるなれなど、くれなくせめらる、おのれ思ふにはかなき戯作のよしなしごとなるものから、我が筆とるはまことなり、衣食の爲になすといへども、雨露しのぐ爲の業といへど、拙なるものは誰が目にも拙とみゆらん、我れ筆とるといふ名ある上は、いかで大方のよの人のごと一たび讀みされば屑籠に投げいらるゝものは得かくまじ、人情浮薄にて、今日喜こばるゝもの明日は捨らるゝのよといへども、真情に訴へ、真情をうつさば、一葉の戯著といふともなごかは値のあらざるべき、我れは錦衣を望むものならず、高殿を願ふならず、千載にのこさん名一時の爲にえやは汚がす、一片の短文三度稿をかえて而して世の評を仰がんとするも、空しく紙筆のつひへに終らば、猶天命と觀せんのみ。

隨 感 錄

切なる戀の心は尊とときこと神の如し、凡情うかゞふべからず、凡眼みるべからず、歌へども及ばず、描けどもならず、歌ようは只その熱情の其こりたるしたゝりに過ぎず、畫圖は其かげ法師の曳たるもすそならんのみ。

人、人を戀ふそもくなんの所謂ぞや、あだなる姿、うつくしき聲ねなどに思ひしむる淺はかさはおきて、學才藝能にまよへる心いと拙し、ましてや秋風たちては葛の葉のうらみをなし、置露にさえがちの情をなげくなど、取處なきものにこそ。

大凡天地の間に生をうけたらん人、貧富一道にして貴賤一路のみ、生前するべからず死後なんぞ知らん、蟬蛸朝菌のよはひはものは、吹かせの盡くる時なくしてしかも同じかせならざるがごとし、ありとは見えてあともといぬぬは我人の上なりかし、ざるを猶政事にたづさはる人は、かれは思ふ處とる處たがひて、文武のあらそひ吏民のきしりつよく、かみにしては將相心やいばをとき、下にしては壯漢こぶしを奮ふめり、もし身其局をはなれてみれば、何事ぞ唯國家を思ふ心一つならずや、大かたの事

みなしかり、藝を腕にみかく人、才を學にあらはず人、道にさまたげ多く、害のがれ難し、これを恨み、これを憤る、そもく迷ひ也、我をわれとし天地を見ればぞ不平の情、不快の念何かは深からぬ、心雲開くる處日月むねにやどりて、優々たる春光四時身をはなれざるべし。

戀とは我心に咲出し花のおのづからうるはしくたのしく清らけきものなるを、物にうつしてみればその一ひらの色も香もなく成ぬ、是をあやしと見て其もとを窮めんとするに茫としてしるべからず、夢魂身をくるしめて心緒とくるの時なし、これを迷ひといふ、さればこそ、つれなき人に身をかこち、しのぶ思ひに世をうらむめり、詮ずる處、我がうつし出たるもとの形をおもはざればなり、戀はもと一つのみ、何んぞ我と人とあらんや、二つなしとしればなど我思ふまゝならぬ、さるを猶まゝならずとするは我心より愛ふる也、我なく人なく一道に歸して思へば、戀はたのしくうるはしくのどかに清らかにまこと圓滿完了のものならずや。

ものゝふの刃をとりて戰場にむかふあやふさは、あやふしといへど猶目の前のかた

きなりかし、かたちなく聲なく、我心のうちにかくれて我心のひまをうかひふかたき斗あやふきはなし、或時は名利の淵にいざなひ、ある時は愛欲の谷におとしいれんとす、さるを世の人大方は其かたきをせしらず、喜んで死地に趣くぞはかなき、流石に知らずしもあらず、心にはあやぶみ思ひながら、猶いさぎよくは立はなれかねて、終にはおぼるゝもあり、岸にたちて涙のごひながら身をおどらしてみづから落入るもあるめり、はじめより我とかたきとひとつ心に成て、我心をあざむき、世の人をあざむくも又少なからず、これはたいふべきにしもあらず、見渡したる世路に海もなく山もなければ、人の心の虎狼、おそろしとぞ世の人はいふめる、何ぞやそのとら狼も我心のかたきに比ぶれば、猫の子といひても猶安かるべし、世の人の虎狼はおのづからはなれたる時もありなん、今一かたのは夢のまも身をはなれねば、是に打ちかちゆかむ勇者こそげにかたからめ。

ものへ行道にて、あふ人ごとに我おもて見返りさま笑を、我ことゝは心もつかず只行きにゆく、ふと相しれる人に行あひたれば、其人聲たてゝハ、と笑ふに、少しい

ぶかしうて、何ごとぞくと問へば、その額に墨にいたくつきたるを知り給はずやといふ、などかはさる事のあるべきそは偽りなるべし、つくべき處謂なければとてあらがふに、さは見給へよと少き鏡とり出して見せられたる、實に額ぎは見えぬまで付たるをしらざりしなり、此鏡なくば此人の詞もいかゞは誠ときかん、又此人なくばかりみとまでは思ひ寄りもせじを、猶相しれる人こそ嬉しきものなれ、先に行あひし人々にかに笑ひてかたり傳べけん、思ふもはづかしう。

我方寸の玉は人の尺壁に優れりと思ふたぐひなればにや、猶我師のもとにつとひ我同じ友とよぶ人はいづれも蓮葉のにむりにしまぬ心なめりと思ふを、あやしう世に傳へ出たる事ありて、いつしかと師の上をさへあしぎまにいふめる、ある日のむしろにこの事ふとさる人のいひ出してわりなくなげくに、師ははじめて耳に入り給ひしにや、おどろき給ふこと限りなし、いざやいかさまにして此名すゝがんなと問ひ合せ給ふに、我はおのづからに任せ給はんぞよき、疵なき玉は光りのかくるゝものにはあらじと笑ひてかくぞ書く、

ゆく舟の浮よ成けり折々は

なみもこそたて風もこそ吹け

龍子の君われ返しせんとして同じ紙に、

浪風のあらいとはで世をへなん

心におもきいかりおろさば

師の君其末に、

大舟の安くのどけきよ也とも

たつなみ風は心せよ君

みの子のぬしも、

世の中は浪のうき寐に似たりけり

心の外の風もこそふけ

されど形なくしてかけある道理なし、猶まつ毛の塵に心とめ給は、あやまりなからん
など、師の君とみの子ぬしにかたる。

竹によする進懐の歌よみたるを、師の君いみじうたへ給ふ、

くれ竹のすぐなりと思ふ我にしも

あやしきふしを人はつけり

君のうたとしてはいとよかるべきを、我もしよまばとてかく、

くれ竹のすぐなりとのみ思へども

しらすまがれるふしもこそあれ

などあるは、大方の人の心なりかし、千なみのよめるにかゝるが有りけり、

くれ竹のすぐなるをのみいふものか

まがれるも又一ふしにして

負をしみてふ詞哉と師のきみ笑ひ給ふに、いひ度こと多かりしが。

獅子といふけものは我子の勢ひをためさんとて其おさなき時の無心なるを千丈の谷におとし入れてなすべき様をみるとかいへり、天地の神はから獅子のたけきにはあらで此ちにいかしたるもろくの爲に情をのみかけ給ふと見ゆれど、實は生涯の中にか

ならず千丈の谷をまうけて一度はこゝろみ給ふと覺えたり、其わざわひの我からつくる人より來たりたるとのけじめこそあれ、誰れも一度は得のがれはつまじきこそぞ、梅の花の雪をしのぎて世に匂ひのたかきをみてもしりぬべき事也。

歌といふものをおさなきよりよみならひて月花の折ふしにつけてつらね侍るを、おのづからよしなど、人にほめらるゝもあり、みづからの心にはさしも覺えざるを人のよしといふはよきなめりと心得て、宮城野、わか草など、名づけてかいしるし置けど、誠はたゞ言葉をつらねたるのみにて、しのぶ草をふる屋の軒によそへわすれ草をすみよしの岸になげくなど大かたはいひふるしたる口眞似ぞかし、實景實情をよみてこそと人ごとにいふめれど、その實情こそとめて得がたかりけれ。

やうく我心によの中の哀れといふこと思ひするまゝに、月にも花にも感ふかく成りて、心のうちにしつゝがたきふしぐをかたはしもらすにこそ眞の情はこもり侍れ、昔しよみし歌どもの人にはほめられて、われは其心もなくよみ出したるを、立ちかへり見もてゆけば、さし當りての心になひてげに哀と見ゆるもあり、其むかしはほめた

る人に心ありて、よみ出したる身は何ともしらざりしなりかし、かゝるひがごと又あらんやは、かゝる歌どもを金玉など、たへたるは、をさな子の心なきをみて天地のことはりをあきらめたる人といふにひとし。

悪といふ名こそいとにくきものなれ、されど善といふ名もまた。

外教を嫌ふ人あり、をしへをあしとはあらで、つどひたる人々の心にもいらすかゝるが中にたち交はらん名のみにもいととうしとのがるゝもあり、身は一度も會堂のきざはし踏つることもなく、只何故とはしらす厭ふもあり、我が奉ずるをしへの爲に酔ひて是非をとはずしりぞくるもあり、かゝる人は一度こゝろのはかなる事などよりふと入そめて、又この道に酔ひにゑひて、もと奉じける道とうらはらにもなりぬべし、見もしらすして厭ひぬる人は聞そむるまゝにこのもしう成なんもはかりがたし、よしやたちまじる人々の行ひ清からずとも、これに寄りてかれを捨つるはいとこゝろ狭かるべし、さる人ならんに何方に行てか人の爲うごかされざるべき、よろづ

の道は只我こゝろ一つならんを、何にくるしみてかのがれしりぞくべき、はじめより好厭の念なきにはしかじ。

者婆くさを取て草として薬ならざるなく圓人ことをみることにして法ならざるなし

さかのやおむろと呼ぶ小説家は矢崎鎮四郎といふ人なり、ある一事をいたく案じて狂氣しけるよし世に取ざたす、はやう桃水痴史のもとにて即眞居士より聞きける事よ、あやしう人にはことなりけりな、さる頃居士が氷川の閑居を訪ひて、椽よりはるかに氷川の森を眺めつ、あなうら山しの住居や、かの森に風の音せん時いかに悲悽の感をや起すらんと言ひけるを、人々いみじき事に語りつぐなる、すべてなみならぬおもひを抱く人にて、此日ごろ後悔のほぞを蛇が加むとか口つ、いけにいひ居けるしも狂氣の前表なりけんかしらす、哀れ此道の名家一人いたづらなるものになし終らんこと口をし、今は何方の野山にあくがるらん、行衛計もしらまほしきをなど人々かたる、聞くまゝに哀れにて一日ゑにしある都の花に消息問へば、何事ぞあともなき偽りといふ、そも

いかにしてかゝる噂つたはりけんあやしやといへば、かの人のならひものに案じ入れば夜るももし火を點せず、うば玉のやみに人きゝわくまじき事を口すさみつゝあふぎ居るなど、其よししらぬ人の見ばあやしみ思ふべき事にて、かゝることをや世に傳へそめけん、すべてはかなき偽りと聞くに、人の爲いと嬉しき事なるものから、一犬の虚にほえぬればかけを追ひつゝかたちに成なんあはれうるさの世の中や、この事のみにもあらじはや。

つれづれの法師を慕ふ人のをかしき事ともさまゞ語りたるが中にみづからが心にもげにと覺ゆるふしすくなからず、一日歌よむ友のもとにこのものがたり引出ぬ、さるは風流の極まり幽玄の趣きをこの人々こそ知り居たらめとてなりし、あやしうあざみ笑ひて、かの人ほどの口わるは又あらじかしと只一言いひけるはいかなるにか、いとあやしかりし。

歌よみ歌はしらで三昧をならし、女醫は小歌うたひ、女教師は舞をまふなる、學者

に無學多く、法律家に不法のこといも多きは、今にはじまりけるにもあらず、さればこそ眞珠の光りはいさごにかくれ、名花のほひは草村にうもれ居らんかし。

流水園雜記

よむことの難きにあらずよくよむことの難きなりと何がしの卿の仰せられしは、敷島の道のみならず、はかなき戯言といへども世道人情をもと、する小説の作こそ又至難のわざ成けれ、小説は猶宗教の如し、心底より出たるものにあざればうつしがたしとさる人いひけるはことわりなれど、其宗教にすら猶かたよりたる處あらざらむやは、すべて我愛憎好悪の念を捨て、かくれたるを顯し、うづもれたるを照らし、唯大空の月日のくまなきがごと、ひたすら公平ならむことを願ひて、意あつて無きがごとく、意なくして有るが如く、おのづからをさながらにうつし出さむこそよけれ、我が善と見る處かならずうき世の善ならず、あくともみるも又しかぞかし、一切我れをす

て、千變萬化せむにはしからず、さりとは又至難のわざならずや、萬人のこゝろをもつて心となしけむ其かみのひちりのみよをかけていはむはかしけれど、大小ふたつなし、もとする何かはことならむ、おもかけをかすかなる處にとめてとありける定家卿がをしる、不定これ定といひしかの法師が詞、さては僧俗じゆ佛をはなれて其ほかにと唱ふる誹諧の道、いづれもくこれを外に何かはあらむ、うきよはながし、千歳よろづよにわたり人は盡くる時なし、百つき千つきに傳はりて、その時々の流行、人々のこゝろくおなじからねば、よしや今のよに名人大家の名を得たりともそは行水のたい目の前ならむのみ、かくておもへば、文章何かせむ趣向何かこらさむ我がこのむまゝならむのみといはむなれど、その中にこもる一ふしの火にもこがれず水にもおぼれざるは、猶いにしへ人の書おける何がしくれがしのふみの今もて遊ばるゝにてしんぬべし、ならべて言はむはあやしけれど、式部が源氏、馬さんが八犬傳、すべて趣かふといはず文章といはず、千古さえざる一物のこもればぞかし、此頃の作家のうち、露伴、紅葉、三味、ちぬの浦などいづれもくさるべき人々にておのゝ一家の風骨をそなへたるけしきおもしろけれど、猶その好みにかたよりすきにまかせ

て、ともすれば千篇一律のきらひあるこそ口をしけれ、大かたの作家の初作より以下はみるにたえず、おだ巻のいとくりかへす計なればなりと、さる批評家のいひけるが如し、かすならねど一昨年の春よりこれに筆をそめて、あみにしはいまだ短篇十にみたず、よの人の耳目にふれけるもあらざめれど、此間に我が経にける境界のさまざまは、やうく僧俗儒佛のほかに天地あり、日月あり、雲霧あり、ある時は雷雨、ある時は雷電、迷へるが如きさとり、悟りに似たる迷ひ、有無の間にたゝせたまふ神、清濁の一流にして一流ならざる、是非の一如に似てしからざる、世はいかにも紛雜なるものにてしかも平穩無事なるなど、まだこれをしも天地の誠とさため難けれど、日夜に案じて此さかひにすゝみぬ、唯口をしき處は學あさくして、とる筆つたなく、おもふ半をもうつすにかたければ、霞を隔て、遠山の花をおもふが如く手折ていざといひ難きぞ侘しき。

廿六年秋

案山子のゆみやはこのろなくしてこのろあるけものをばしらす、

このろなき門田のなるこ吹風に

おどろかさるゝ鳥もありけり

ほとゝぎす

ほとゝぎすの聲まだしらねば、いかにしてか聞かばやと戀しがるに、人の訪ひ来て何かは聞えぬ事のあるべき、我が宿の大木にはとまりてさへ鳴くものを、夜ふけ枕にこゝろし給へ、近く聞く時は唯一こえあやしき音に聞きなされるれど、遠くなりゆく聲のいと哀れなるぞと教へられき。時は舊き曆の五月にさへあれば、おのが時たい今と心いさみて、それよりの夜なく目もあはず、いかで聞きもらさじと待わたるに、はかなくて一夜は過ぎぬ、そのつぎの夜もつぎの夜もおぼつかなくて何時しか曉月夜の頃にもなれば、など斯くばかり物はおもはする、いとつれなくも有るかなと憎むく猶まつに弱らで一夜を待あかしに、ある曉のいとねぶたうて、物もおぼえずしばし夢結ぶやうなりしが、耳もと近くその聲あやまたず聞えぬ、まだ聞かざりし音をさや

かに知るは怪しけれと疑ひなき夫れと枕おしやりて、居直れば又一こえさやかにぞなく、故人がよみつる歌の事などさま／＼胸に迫りて、ほと／＼涙もこぼれつべく、ゆかしさのいと堪へがたければ闇の戸おして大空を打見あぐる、月には横雲少しかゝりて、見わたす岡の若葉のかけ暗う、過ぎゆきけんかげも見えぬなん、いと口惜しうもゆかしうも唯身にしみて打ながめられき。明ぬれば歌よむ友のもとに消息して此ほこりはいやとしつるを、事にまぎれてさて暮しつ、夜に入れば又々鳴きわたるよ、こたびは宵より打しきりぬ、人の聞かせしやうに細やかなる聲はあらねど唯ものゝ哀れにて、げに戀する人の我れに聞かすなと言ひけんも道理ぞかし、おもふ事なき身もとすいろに鼻かみわたされて、日記のうちには今宵のおもふこと種々しるして、やがて哀れしる人にとおもふ。かくて二日ばかり、三日の後なりけん、ゆくりなく訪ひ來し友あり、いと嬉しうて、今や此事かたり出でん、しばし／＼と驚かすべき、さこそは人の羨ましがるべきをと、嬉しきにも猶はいかられつ、あらぬ事とも言ひかはすほどに、折しもかの杜鵑橋端に近う鳴く聲のする、あれ聞き給へ、此宿はこゝの森にもあらぬを、此夜頃たえせず聲の聞ゆるが上に、ひるさへ斯くと打出したれば、友は

得ときがたきおも／＼ちして、何をかのたまふ、とたゞに言ふ、かく／＼と語れば、そは承けがたき事と打かたぶき打かたぶきするほどに、又も一聲二聲うちしきれば、あれが聲を郭公とや、いかにして然はおぼしつるぞ、いとよき御聞きさまと友は口おほひもしあへず笑みくつがへる、いつも曉よりなきいで、夕ぐれまでは御櫓のものなるを、いかにして然は聞き給ひけん、物ぐるほしくもおはしますかなといよく／＼笑ふに、さにはあるまじ、いかで山がらすを然はおもふべき、あの鳴音聞き給へ、よもあやまらじと訝しうなりて言へは、月夜に寝ほうけて鳴出づる時は常の聲とも異りぬべし、今のなく音は何かは異ならん、あれ見給へ飛びゆく姿もさやかなるを指さし、あれは此杜鵑いつも初音をなく物に成りぬ。覺めずは夢のかしからましを。

そゞろごと

雨の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし、今歳はいかなれば斯くいつまでも丈のひくきなど言ひてしを夏の末つかた極めて暑かりしに唯一日ふつか、三日とも數へずして驚くばかりに成りぬ、秋かせ少しそよくとすれば端のかたより果敢なげに破れて、風情次第に淋しくなるほど雨の夜の音なひこれこそは哀れなれ、こまかき雨ははらくと音して濃がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり颯と降くるは彼の葉にばかり懸るかといたまし。雨は何時もあはれなる中に秋はまして身にしむこと多かり、更けゆくまゝに燈火のかけなどうら淋しく、寝られぬ夜なれば臥床に入らんも詮なしとて小切れ入れたる疊紙とり出だし、何とはなしに針をも取られぬ、未だ幼くて伯母なる人に縫物ならひつる頃、衾先、襦の形などむづかしう言はれし、いと恥かしうて是れ習ひ得ざらんほどはと家に近き某の社に日参といふ事をなしける、思へばそれも昔なりけり、をしへし人は昔の下になりて習ひとりし身は大方もの忘れしつ、斯くたまさかに取出づるにも指の先こわきやうにて、はかくしうは得も縫ひがたきを、彼の人あらば如何ばかり言ふ甲斐なく淺ましく思ふらん、など打返し其むかしの戀しうてそゝろに袖もぬれそふ心地す、遠くより音し

て歩み來るやうなる雨、近き板戸に打つけの騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老たる親の瘦せたる肩もむとて、骨の手に當りたるもかゝる夜はいと心細さのやるかたなし。

月の夜

村雲すこし有るもよし、無きもよし、みがき立てたるやうの月のかげに尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし、三味も同じこと、琴は西片町あたりの垣根ごしに聞たるが、いと長き月に弾く人のかげも見まほしく、物がたりめきて床しかりし、親しき友に別れたる頃の月いとなくさめがたうも有るかな、千里のほかまでと思ひやるに添ひても行かれぬものなれば唯うらやましうて、これを假に鏡となしたらば人のかげも映るべしやなど果敢なき事さへ思ひ出でらる。さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆるかけ物いふやうにて、手すりめきたる處に寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底ふかく、此池の深さいくばくとも測られぬ心地に成て、月は其その底のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ、久しうありて仰ぎ見るに空なる月と水のかげと孰れを誠のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれと

箱庭に作りたる石二つ水の面にそと取落せば、さゝ波すこし分れて是れにぞ月のかけ
 漂ひぬ、斯くはかなき事して見せつれば甥なる子の小ささが眞似て、姉さまのする事
 我れもすとして硯の石いつのほどに持て出でつらん、我れもお月さま砕くのなりとは
 たと捨てつ、それは亡き兄の物なりしを身に傳へていと大事と思ひたりしに果敢なき
 事にて失ひつる罪得がましき事とおもふ、此池かへさせてなど言へども未ださながら
 にてなん、明ぬれば月は空に還りて名残もといめぬを、硯はいかさまに成ぬらん、夜
 なく影や待とらんと憐なり。嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなどある人
 の心安げに訪ひ寄たる、男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば如何ばかり
 嬉しからん、みづから出るに難からば文にてもおこせかし、歌よみがましきは憎きも
 のなれどかゝる夜の一言には身にしみて思ふ友とも成ぬべし。大路ゆく辻占うりのこ
 ゑ、汽車の笛の遠くひびきたるも、何とはなしに魂あくがる、心地す。

雁がね

朝月夜のかげ空に残りて、見し夢のなごりもまた現なきやうなるに雨戸あけさして
 打ながむれば、さと吹く風竹の葉の露を拂ひて、そとろ寒けく身にしみ渡る折しも、

落くるやうに雁がねの聞えたる、孤つなるは猶さら、列ねし姿もあはれなり、思ふ人を
 遠き縣などにやりて明ぐれ便りの待わたらる、頃これを聞たらば如何なる思ひやすら
 んと哀れなり。朝霧ゆふ霧のまぎれに聲のみ洩らして過ぎゆくもをかし、更けたる
 枕に鐘の音きこえて、月すむ田面に落つらんかけ思ひやるも哀れ深しや。旅寝の床、
 侘人の住家、いづれに聞ても物おもひ添ふる種なるべし、一とせ下谷のほとりに假初
 の家居して、商人といふ名も恥かしき、唯いさゝかの物とり並べて朝夕のたつきとな
 し、頃、檐端の庇あれたれども月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家の二階のは
 づれを縦かにもれ出づる影したはしく、大路に立て心ほそく打あふぐに、秋風たかく
 吹きて空にはいさゝかの雲もなし、あはれかゝる夜よ、歌よむ友のたれかれ集ひて、
 静かに浮世の外の物がたりなど言ひ交はしつるはと、俄かに其わたり戀しう涙ぐまる
 ゝに、友に別れし雁唯一つ、空に聲して何處にかゆく、さびしとは世のつね、命つれ
 なくさへ思はれぬ。搦衣の音に交りて聞えたる如何ならん、三つ口など囁して小さき
 子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしう聞ゆるやと羨ましくなん。

蟲の聲

大正十四年度
高等學校
入学試験問題

垣根の朝顔やう／＼小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花みゆるも其はじめの事おもはれて憐れなるに、松虫すい虫いつしか鳴よわりて、朝日まちとりて籠馬の果敢なげに聲する、小溝の端、壁の中など有るか無きかの命のほど、老たる人、病める身などにて聞きたらば、さこそ比べられて物かなしからん、また初霜は置くまじきを今年は虫の齡いと短かくて、はやくに聲のかれ／＼に成しかな、くつわ虫はかしましき聲もかたちもいと丈夫めかしきを、いつしか時の間におとろへ行くらん、人にもさる類ひはありけりとをかし、鈴虫はふり出でなく聲のうつくしければ、物ねたみされて齡ひの短きなめりと點頭かる、松虫も同じことなれど、名と質と伴はねばあやしまるゝぞかし、常磐の松を名に呼べれば、千歳ならずとも枯野の末まではあるべきを、萩の花ちりこぼるゝやがて聲せず成行くゝさる盛りの短かきものなれば、暫時も似よと此名は負せけん、名づけ親ぞ知らまほしき。此虫一とせ籠に飼ひて露にも霜にも當てじといたはりしが、その頃病ひに臥したりし兄の、夜なく／＼鳴くこゑ耳につきて物侘しく厭はしく、あの聲なくば此夜やすく睡らるべしなど言へるも道理にて、いそぎ取おろして庭草の茂みに放ちぬ、其夜なくやと試みたれどさらに聲の聞えねば、俄か

561 と ころ 〃 そ

に露の身に寒く鳴くべき勢ひの無くなりしかと憐れみ合ひし、其とし暮れて兄は空しき數に入りつ、又の年の秋、今日ぞ此頃など思ひ出づる折しも、ある夜ふけて近き垣根のうちにながらの聲きこえ出でぬ、よもあらじとは思へど唯其ものゝやうに懐かしく、戀しきにも珍らしきにも涙のみこぼれて、此虫がやうに、よし異物なりとも聲かたち同じかるべき人の唯今こゝに立出で來らば如何ならん、我れは其袖をつと捉へて放つ事をなすまじく、母は嬉しさに物は言はれで涙のみふりこぼし給ふや、父は如何さまに爲し給ふらんなど怪しき事を思ひよる、かくて二夜ばかりは鳴きつ、其後は何處にゆきけん、假にも聲の聞えずなりぬ、今も松虫の聲きけばやがて其折おもひ出でられて物かなしきに、籠に飼ふ事は更にも思ひ寄せず、おのづからの野邊に鳴弱りゆくなど、唯その人の別れのやうに思はるゝぞかし。

棹のしづく

ある人のもとにて紫式部と清少納言のよしあしいかになどいふ事の侍りし、人は式部式部とたゞほめにほめぬ、しかあらんそれさる事ながら、清はらのおもとは世にあはれの人也、名家の末なれば世のおぼえもかろからざりしやしらす、萬に女ははかなき物なれば、はかくしき後見などもなくてはふれけむはどうしつらしなどみにしみぬべき事ぞ多かりけらし、やう／＼宮づかへに出初ぬる後宮の御いづくしみにさる人ありとしられ初て、香爐茶の雪に塵をまくなと才たけたりとはかくしてぞあらはれぬ、少納言は心づからと身をもてなすよりは、かくあるべき物ぞかくあれとも教ゆる人はあらざりき、式部はおさなきより父爲時がをしへ兄もありしかば、人のいもうと、してかす／＼におさゆる所も有たりけん、いはゞ富家に生れたる娘のすなほにそだちてそのほど／＼の人妻に成たるものやいはまし、少納言は心たかく身のはか／＼しからざりしかば、ことに出で行ひにあらはさではいづらいかにと見る人もあらざりけんを、式部は天台の一心三觀とやらんおさむる所ふかく侍りし、少納言も佛人にてはあ

りけれど、こゝろに浪のさわぎはげしければくまなき月は照らさずや侍りけん、あはれなるはかくありける身ぞかし、才はおのづからにして徳はやしなふて後の物にこそ、風しづかにしては沖につり舟のかずも見るべく、雲さわぎては外山のかげもおぼろげに成ぬべし、式部が日記に少納言をそしりしはさる事ながら此人はうきよのほか物なりける也、わが日の本に三筆のひとつといひし世尊寺の卿をはじめ袖のうつり香ゆかしたしたひし君たちのうちたれかはまが／＼敷しれものあらんや、さる人々の此君に別れぬる後いかならんつまを得たりともあはれたちまさりてなどおもへるはあらじ、一時の情に二とおもわれぬるは此人の、ぞみたりぬる成かし、駿馬の骨といひける終りのさまを淺ましとつまはじきするは其人をしらねばぞかし、宮の御前すら撫子に涙をそゝぎ給ひけるほど少納言のかくありけるは道理也、おなじうは御堂どのが前にて猶今少しいはせまほしき事侍り、此君を女としてあげつらふ人あやまれり、はやう女のさかいはなれぬる人なればつひの世につまも侍らざりき子も侍らざりき、假初の筆すさび成ける枕の草紙をひもとき侍るに、うはへは花紅葉のうるはしげなることもふたゝび三度見もてゆくに哀れに淋しき氣ぞ此中にもこもり侍る、源氏物がたりを干

古の名物とたゞゆるはその時その人のうちあひてつひにさるもの、出来にけん、少納言に式部の才なしといふべからず、式部が徳は少納言にもさりたる事もとよりなれど、さりとして少納言ををしめるはあやまれり、式部は天つちのいとしごにて、少納言は霜ふる野邊にすて子の身の上成るべし、あはれなるは此君の上やといひしに、人々あざみ笑ひぬ。

物かく筆はやはらかに持てゆび先に力のいらざるぞよきとさる人仰せられしはげにさる事なるべし、うでにて書くと又人のいひしいかゝならん、うでになりとも力をこめたらば筆の自由をうしなひて文字はたど／＼しかるべくや、まことにかながきの上手は手に筆のある事をわすれ、紙にむかひての用意などおさ／＼わすれて、ゆびはうごくともしらす、心は筆のまゝにしたがふか筆は心のまゝにうごくはたゞこの者を心と紙との中立にしてうつつし出すにこそ侍らめ、されどこれはかな書きの事也、まなはいかいあらんしらす。

まつ人の音づれば聞事まれにして厭はしき人はしば／＼来る、この人をかりにかの人とおもはましかばうきは變じてたちまちよろこばしかるべきか、好悪もとこれ人欲のまなこより見ればぞかし、清風むねの中にふかばわづらひなからん物を。

おもひてはいと遠きこともいたりてはほどなき物ぞかし、何がしの官省とてもつとひて事をとるものなればいとたやすし、商社などのいと大きな人がひとりこの、ろよりおこりてかゝる大厦をかまへ大いなる事業をもなせりと見るに、誠や浪江の水の末に驚くが如し、ほとけの道にも三界唯一心心外無別法とぞ侍るめる。

はかなくて世に落はふれたる人をおろかにつたなしとてあざけらんは耻かしかるべし、行水にも淵漸あり人の世に窮達なからめやは、孔子の道にくだしめられたとへも侍る、されば時にあひてさかんにおこれる人もいかうとばんや、計らぬくあせにうさぎを得るたとへも聞ゆ、たゞみづからは心を平にして此ながれのほかにすまんこそめやすかるべけれ。

此月をいかさまにしておくらんあはれよねもなし、こがねなど更に得べき望もあらず、身の職とてもわづかに筆とりてものかくよりほかはあらず、それとて一紙何ほどにかあたひせん、日々にかうべをなやましてよみ出る歌どもにさへわれながらよろしうなづくもあらねばまして人の見るめはいかならん、賣文の徒とか人のいやしがる物から、これをこがねにかへらるゝならば、われは親の爲妹の爲はた我が衣食のため更にいとほじ、歌やと成てみせ先にたにざくとも書ならべてん、あわれかふ人なきをいかにせばや。

春の雪のおもひかけずいと深々とつもりたるに何となく物めづらしく火をけに火さし物あぶりくひなどする折人のもとより文あり、つねにうちとけぬ人のいとなれく敷おもふことをかきおこせて、よにある人々の評などさまぐにあり、をかしくて、ことに我を世にすね物の二葉の春をすて、秋の一葉とうそぶき給ふ事わけは侍るべし、柳のいと結ばれとけぬ片こひや發心のもとなどいへる事多かり、折からをかして、

ひたすらに厭ひははてじ名取川

なき名も戀のうちにぞ有ける

おのづからいひとく折は侍らん、波のぬれ衣などいはんもふるければとてかへしやりつ、これをいかさまにつたへてことやうのものにやいひなすべき、たれも人のこゝろ得しらぬ物なれば。

いざ連歌よまん下の句出し給へと人々いふ、さらばいかにもつけ給へ上の句からにこそとて「つらきうきよのおもしろき哉」とかきてなげ侍れば、あはれにくき出しさまやと師の君わらふ、田中のみの子上の句かきて出す「月花もおもひすて、は中々に」よみ得たりとて人々どよみをつくりぬ、折から伊藤の與助ぬし座にあり、句作にかしらをなやまし居るいとをかしくて、みの子ぬしふところ紙に書きつくるを見れば「いさをたてよ大君の爲」とあり、こは近に征清の軍にしたがはん人なればなめり、ことかしこといとあはひの隔たれば大聲にて物いはんもうし、其よしかきてよとみの子ぬしいふ、我れかきつけてなげやれば、師の君取りてたかくうとふ、

この一句田中のみの子より参らす、いくさの陣にはせむかふて大功をたて給はん君の連歌のよみかけにうしろを見せ給はば、長く卑怯の名や得給はん、たいすみやかにくとなん。

されどもえよみやらでかしらをかへぬ。

物へもてゆくに筆のつか長くていと佗し少し切りてなどいふ人あれど、大方鈞合して作りたる物なれば切りてはつかのいと軽く手ごゝろかはるとさる人仰せられぬ、さる時は切たる後に物をつめて重く成したるぞよきとありし、誠にさる事侍るべし。

長三洲といふ人舌留といふものをながく病みてうせき、身にはことなる事なきに舌の根のたやくされにくさる、也、はじめ出来たる時は手術をおこなひて切とりつ、二度目にはのどへかけてはれぬ、此たびは人の手わざ及びがたしと名高き博士どものいひぬ、子らはいとけなしいかで今一度など親しき限りなげ、ともいかにかせん、自らはいとよく思ひはなれて大方世に心をとめずと見えしが、さる病ひの床に筆墨を取

寄て物書く事一日もやまず、うせての後は庫をもうづめぬべし、かゝる高名の人のかく世をも思ひすてながらなからん後の子等の爲にと多くの反古を作り置けん、人の親のやみならずや、さるにても持つまじきは子ぞかし、あはれきよくてありぬべき身の終に用なきくるしみをもしつる事よ。

此人の書のいとうるはしと見ゆる中に黄金のほひありなど京わらべのしりう言するを心得ずと思ひつるが、げに心ひかる、もの、有つればさぞ有けん、あはれ深かし。

歌の論をよくする人ありよろしき歌よみ出る人は少なしといふ、誠に論の如く、ろのとゝのひゆかば歌はかならずとゝのひぬべし、静におもひこまかにかんがふるとも、論せん爲に論をたてなんはそれ虚論ぞかし、一事一物とてもこゝろにそまりたらば事理ふたつなし、もと末何かはわかれむ。

つら之みつねは自然をうたひたる歌人なるべし、景樹を第二の貫之といふはそのしらべ人の心をもとゝしてやすらかにすなほにとをしへしによれり、さるも猶そのよめ

る歌共の桂園一枝などよろしきも多かれど、古今の歌どもに見くらぶれば姿かたちいたくおとりて餘情などさらく侍らず、さりともこれをかれにおとれりとはいふべからず、くだりゆくよのならひ、人すなほの心をうしなひて物事たくみになりゆき、われと我本のこゝろをさへわするゝに寄れり、よこそりてにこれり、ひとり歌の道に古代をととなふるとも此流れをいかでかすまざるべき、世尊ふたゝび世にあらはれて衆生の濟度をなし給はん時、此道の人丸くだりて和歌のながれむかしにかへりぬべし。

よははかなくてをかきし物也、いさゝか筆に墨をぬりて白紙の上にそめいだせば文といひ歌とよび、おのが心にななひたらばやがて非凡絶倫などたゞゆるぞかし、つくる人もとよりこゝろなし、ほむる物いかでながらんや、きのふの歌才は今日の平凡に成て見かへるものもなきこそ哀れなれ、凡眼いかで玉石をしるべき、わかち難きのまなこをもつてみだりに毀譽のことはを出さば時に冠をくつにする事あり、このあひだにうまれて此詞に左右さるべき文士書客のかしきよ、人の見るをこのます世の聞え願はず静に思ひを筆墨の間にかまふるもの又いくたりかあらん、これありてはじめて

天地しるべく人事うかふにたるべし、夜深くして月くらくともし火消えんとする破窓のもとにひとり思ひて猶ゑがきがたし。

おろかやわれをすね物といふ、明治の清少といひ女西鶴といひ、祇園の百合がおもかげをしたふとさけび小萬茶屋がむかしをうたふもあめり、何事ぞや身は小官吏の乙娘に生れて手藝つたはらず文學に縁とほく、わづかに萩の舎が流れの末をくめりとも日々夜々の引まどの烟こゝろにかゝりていかで古今の清くたかく新古今のあやにめづらしき姿かたちをおもひうかべ得られん、ましてやにほの海の底深き式部が學藝おもひやるまゝにさかひはるか也、たゞいさゝか六つなゝつのおさなだちより誰つたゆるとも覺えず心にうつりたるもの、折々にかたちをあらはしてかくはかなき文字沙たにはなりつ人見なばすねものなどことやうの名をや得たりけん、人はわれを戀にやぶれたる身とやおもふ、あはれさるやさしき心の人々に涙をそぐ我れぞかし、このかすかなる身をさゝげて誠をあらはさんとおもふ人もなし、さらば我一代を何がための犠牲などことん敷とふ人もあらん、花は散時あり月はかくるゝ時あり、わが如きもの

わが如くして過ぬべき一生なるに、はかなきすねもの、呼名をかして、

うつせみのよにすねものといふなるは

つま子もたぬをいふにや有らん

をかしの人ごとよな。

春のゆふべよは花さきぬべしとて人ごころうかる、頃三日四日のかて斗に成て一物も家にとめず、しづかにふみよむ時の心いとをかし、はぎくの小袖の上に羽織きて何がしくれがしの會に出でつもすそふまれて破らじと心づかひする又をかし、身のいやしうて人のあなどる又をかし、折にふれては誰もいふなる一言のおもしろしとて才女などたゝえらるいよくをかし、此としの夏は江の島も見ん箱根にもゆかん名高き月花をなど家には一錢のたくはへもなくていひ居ることにをかし、いかにして明日を過すらんとおもふにねがふこと大方はづれゆくもをかし、おもひの外になるもをかし、すべてよの中はをかしき物也。

一葉全集の末に

(一)

一葉全集に跋のやうなものを付ける役目が私に自然廻はつて来たので、何か書かうと筆は執つたが、さまざまの追懐が胸に浮んで来て、さて何から先きにして宜いか、分から無い。ともあれ、樋口夏子君の小傳といふやうなものを書くのが順序かと思はれるもの、前篇に收めてある『日記』が樋口君の性格が完成しつゝあつた時代に對する立派な自傳なのだから、此上何うにも付け加へやうが無い。もとく、樋口君は良家の娘さんで、年僅に二十五で亡くなられたのだから、その生涯に外面的にはさしたる波瀾の無かつたのは當然で、樋口君の傳記として面白い所が有りとすれば、それは、樋口君の思想の變遷とか、時々の感想とか、日常の行爲とかに現はれた一葉君の人となりでなければならぬ。併し、さういふ方面の記録としては前に云つた通り、『日記』に優るものは無いのだ。それで、此には、唯夏子君の令妹邦子君から聞いた二三の事實を記して置くに止める。

一葉君の父君は則義、母君は瀧子―古屋氏―共に甲斐國東山梨郡大藤村の内中萩原十郎原の人、安政年間志を立て、江戸に出で、則義君は旗本菊地家、母君の方は同じく稻葉家に使へて後、八丁堀衆に加はつた。維新後、東京府廳に職を奉じて、麴町山下町の官舎に住した。則義君この時まで三子を挙げた、長女藤子―安政五年生―長男泉太郎―元治元年生―二男虎之助―慶應二年生―であつたが、明治五年三月廿五日に第四子夏子君が生れた。末子邦子君の生れたのは、明治七年であつた。九年家を本郷六丁目法泉寺の南隣に移した。十年春夏子君は本郷小學校へ入學したが、間も無く退校し、十一年の夏、本郷四丁目に僧あがりの手習師匠があつたので、それへ入門した。十四年の夏一家下谷御徒士町へ移つて、その冬から夏子君は池の端の青海小學校に學んだが、十六年冬退校した。則義君の知人と田重雄といふ歌人が八丁堀に住んで居たが、夏子君は十七年春から半年程其門に入つて居た。其後は家で裁縫の稽古のみをして居た。十九年八月、遠田澄庵の紹介で中島歌子の門に入つた。此邊の事情は『日記』三七二頁から三七三頁に涉つて一葉君自身書いて居る。二十年夏長兄泉太郎君が亡くなつた。二十一年春、夏子君が樋口家の相續人となつた。父則義君官を辭し、

虎之助君―幼より唯名跡だけの別家を爲せり―の住家の近傍、芝高輪に轉居した。則義君は、馬車運送會社を知人と共に起した。同年秋神田表神保町に移つた。二十二年春、神田淡路町に轉居、間も無く則義君病に罹り、七月に亡くなられた。遺つた人は、秋、芝西應寺町の虎之助君の許へ同居した。母君と虎之助君との間に意見の衝突があつて、家庭に小波瀾が絶え無かつたので、一葉君はそれを太く愛ひて、師中島氏に事情を打ち明けた。中島氏は『少時家に來て居る、其の内に何れかの女學校へ教師に推薦しやうから』と云つたので、一葉君は中島氏の内弟子のやうになつて、五ヶ月程中島氏の許に居たが、中島氏も盡力したのであらうが、一葉君の就職は出來無かつた。秋の末になつて、母君と邦子君とを連れて、一葉君は、本郷菊坂町六十番地―真砂町の臺の下―の家を持つて、親子三人ながら賃仕事を爲て、細々と暮して居た。『日記』に依れば、邦子君が最も善く働いて居たやうだ。一葉君自身も針仕事を引受けた。併し、負けぬ氣の、氣位の高かつた一葉君は學問で身を立て度いとは常々思つて居たらしい。それで、同門の花岡田邊龍子君―今の三宅夫人―が既に文名があつたのなどを見て、小説を書いて見たらといふ考が浮んで來たらしいのだ。

邦子君が洋服裁縫の稽古に通つた先で友達になつた人に野々宮菊子君といふのがあつたが、この人が半井桃水君の令妹孝子君と友達であつたので、一葉君は其人に頼んで半井君に紹介して貰つて、二十四年四月十五日に桃水君の芝佐久間町の居を訪ふた。それから後の一葉君の生活は『日記』を見られ、ば總て明であるから、こゝに贅するに及ぶまい。

一葉君の病は二十九年の四月頃からそろそろ其徴候が現はれて来たやうだ。その頃に咽喉が太く腫れた。七月初旬になると熱が大抵九度位あつたといふのだが、元來餘り強い體では無かつたやうだ。『肩に時々凝が出来て、太く堅くなつた時は文鎮で毆ぐつても痛みを感じ無い位だ』と、一葉君自身で話したことがあるが、中島氏の門に入つた初めに、佐々木東洋氏が、一葉君の肩の凝りを一診して『この凝りが下へ下りれば命取りだから、大事にせよ』と云はれたさうだが、病が重ると共にその肩の凝りはズツと下へ下りて了まつたとは邦子君の話なのだ。

一葉君の病が八月の初めになつて大分重くなつたので、邦子君は、姉君に裕と裕羽織を着せ、抱へるやうにして、山龍堂病院に行つて、故樫村清徳氏の診察を受けた。

姉君を一應扣室へ連れ戻して置いて、再び診察室へ取つて返へして、病状を聞くと、最早全く望みは無いと宣告された。邦子君は落膽の餘り少時身動きも出来無かつた、手巾を目にあて、姉君の居る所へ歸ると、一葉君は『何うかしたのか』怪み問うた。邦子君は『今彼方で何か燻されたので、烟が眼に入つて、痛いのだ』と答へた。その後のことであらうが、齋藤緑雨が森鷗外君に頼み、同君の紹介で、青山胤通氏が來診された、一葉君の家人は入院でもさせたらばと云つたのだが、それは最早無効だと青山氏が断じたといふのだ。一葉君の病は奔馳性でもいふのであつたらうか、最後に引續いて非常に熱が高かつた。

二十九年の夏、私が地方から歸つて來て逢つた時には、既に餘程衰へて居るやうであつた。病氣を氣にし無い性質の人だと思つて居たので、私は『薬を飲んで居るか』と殊更に聞いた。一葉君は珍づらしく決然たる語調で『飲んで居ります』と云つた。十月の末になつて又私は地方から一寸と歸つたが、直ぐ地方へ引返すことになつたので、十一月の三四日頃に暇乞に行つた。邦子君が『會つて呉れとは云ひ兼ねる、唯見て行つて呉れ』と、奥の六疊の病室を開けた。一葉君は熱さましを今しがた飲んだ所

だといふのであつたが、髪が亂れて、苦しうに頬に紅みを呈し、東枕に臥て居た。私は、西になる次の間の敷居際に居たのに、苦しうな呼吸が一々数へられるやうに聞えた。度々解熱剤を用ゐるので逆上せて耳が遠くなつて居るからと云ふので、邦子君が枕もとに坐つて、話を取り次がれた。私が「此の歳暮には又歸つて来ますから、その時又お眼にかゝりませう」と云つたのを邦子君が取り次ぐと、一葉君は呻くやうな苦しうな聲で「その時分には私は何に爲つて居ませう、石にでも爲つて居ませうか」とときれ〜云つた。

一葉君の亡くなつたのは二十九年十一月二十三日の午前であつた。同廿五日遺骸は茶毘に付して、築地本願寺地内の先塋に納めた。母君瀧子刀自は三十一年二月に歿せられ、久保木氏に嫁した姉藤子君は三十二年九月に亡くなつた。樋口家の人で今残つて居るのは、虎之助君と、邦子君との二人のみである。

(二)

一葉君の父君則義君は漢學の素養があつて、當時の學者名流等に知己が多く、相當に文學及び藝術に興味を持つて居た中流の上品な人であつたらしい。一葉君は則義君

の愛子であつて、則義君は一葉君にさまざまの物語りをして聞かした。則義君は、一葉君の希望通り學問をさせても宜い位に思つて居られたやうだ。所が、母君の方は普通の婦人で、矢張り、女に學問は不用だと信じて居られた。一葉君の學問好きは、氣概ある婦人の常として見ることも出来やうが、他方では、父君及び兄君などからの感化も少なからずあつたこと、思はれる。一葉君は確に凛とした氣性の婦人であつた。遺妹邦子君にもさういふ所はあるし、虎之助君も人に屈せぬ點では一葉君の兄たるに耻ぢ無い人であるやうに聞て居る。これは階級的ブライドのある上品な家に傳はつた氣性と云へるのでは無からうか、母君瀧子君も決して氣の弱い唯の人好しの婦人では無かつたやうだ。

一葉君は、強度の近視であつた。母君などに隠れて、藏へ入つて、金網の窓から入る僅の光で、假名計りの草双紙を讀んだので、眼が近くなつたとは一葉君自身の話であつたが、遺傳だか何だか知らぬけれども、元來視力の弱い人であつたのかと思はれることが無いでも無い。それは左に右、眼鏡は掛けて居無かつた。

身體は先づ日本の婦人としては中位の大きさであつた。髪は極めて薄かつた。禮儀